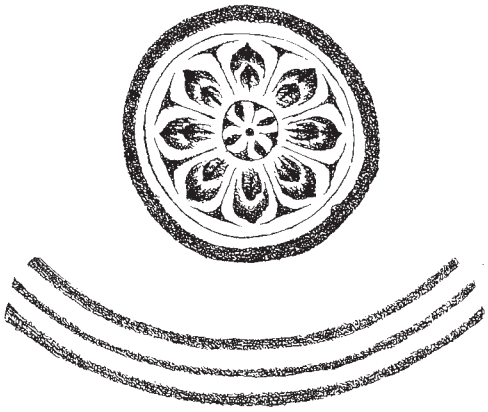
仙台市文化財調査報告書第484集

宮 城 県 仙 台 市

郡山遺跡 40

―― 令和元年度発掘調査概報 ――



2 0 2 0 . 3

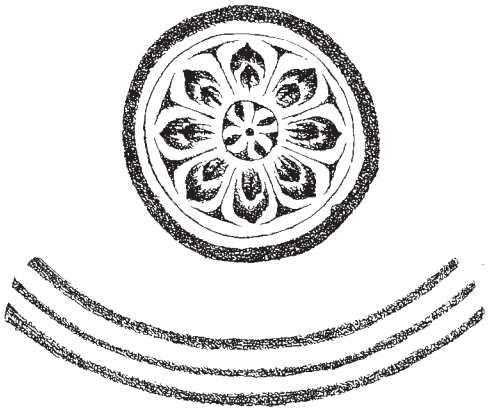
仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市文化財調査報告書第484集

宮 城 県 仙 台 市

郡山遺跡 40

―― 令和元年度発掘調査概報 ――



2 0 2 0 . 3

仙 台 市 教 育 委 員 会

序　文

日頃より仙台市の文化財行政に対しご理解、ご協力を賜り感謝申し上げます。

市内には現在約 780 ヵ所の遺跡が確認されております。このような埋蔵文化財はその時代ごとに、その地に住んだ人々の痕跡を伝えるものであり、当委員会としましては皆様のご理解とご協力を得て、大切な文化財を保存し、後世に伝えるように努めているところであります。

ここに報告いたします郡山遺跡は、地方官衙としてはわが国でも最古段階の重要な遺跡です。昭和 54 年以来、継続的に実施してまいりました発掘調査により、古代の文献に記録のない“幻の城柵”はまさに“甦る城柵”として私たちの前に姿を現してきました。また、その価値が明らかになったことで、平成 18 年には国史跡として指定されています。

東北地方に大きな爪痕を残した東日本大震災から 9 年が経った今年度、震災以来中断されていた史跡内での範囲確認調査を行うことができました。また、同じく国史跡となっている陸奥国分寺跡におきましても、境内にある鐘楼の解体・復元工事に伴い発掘調査を行い、大きな成果をあげることができました。本書はこれらの調査結果を報告・公開するものであります。

発掘調査を継続できましたのもこれまで遺跡の究明にご助言をいただいた先学の諸氏や、市民の皆様のご協力があったからだと感謝しております 。

これまでの文化財の調査成果が遺跡保護や整備、そして私達の生活に寄与することを願ってやみません。今後とも皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和 2 年 3 月

仙台市教育委員会
教育長　佐々木　洋

例　言

1．本書は国庫補助事業における市内遺跡調査のうち、郡山遺跡と陸奥国分寺跡内の範囲確認調査に加え、郡山遺跡内の個人住宅建築工事に関連した発掘調査の調査報告である。

2．本概報は調査調整係の協力を得て整備活用係が行った。また執筆と各作業は以下のように分担し、編集は庄子が行った。

第１・２章Ⅲ～Ⅵ・３章　庄子裕美　　第２章Ⅰ・Ⅱ　五十嵐愛　　第４章　三浦昂也

遺物実測図作成・トレース・図版作成：郡山遺跡発掘調査事務所作業員、向田整理室作業員

遺物観察表作成：庄子、渡部弘美、妹尾一樹、齋野裕彦　　遺物写真撮影：向田整理室作業員

遺構図トレース・図版作成：庄子、郡山遺跡発掘調査事務所作業員　　遺構註記表作成：庄子、五十嵐

3．出土した陶磁器の産地や年代のについては佐藤洋氏に鑑定を依頼した。

4．本書の内容は既に公開されている遺跡見学会資料や各種の発表会資料に優先する。

5．陸奥国分寺跡の発掘調査の実施にあたり、宗教法人陸奥国分寺をはじめ、株式会社伝統建築研究所、株式会社加藤工匠からご協力を得た。

6．本書に係わる出土遺物や実測図、写真などの資料は仙台市教育委員会が保管している。

凡　例

1．断面図の標高値は、海抜高度を示している。但し、海抜高度及び座標系は、平成 23 年（2011）3 月 11 日の東日本大震災以前の値を使用している。また、第 3 章の図中に示した座標系は、世界測地系を使用してる。

2．第 2 章の図中に示した座標系は、郡山遺跡内に昭和 56 年に設定し、平成 8 年度に改訂した任意の座標系（X=0、Y=0 を通る磁北線（1984 年頃の偏角で、真北から 6°　44′　7″ 西傾）で表記している。

3．第 2 章の文中の方位は、真北を基準としている。また、図中の方位に「☆」を付したものは真北を示し、これ以外の方位は座標系に沿った磁北を示している。

4．遺構の略称は次のとおりである。郡山遺跡の遺構番号はこれまで調査された調査区を通しての番号順であるが、ピットは調査区毎としている。

SA: 柱列・材木列　SB: 掘立柱建物跡　SD: 溝跡　SI: 竪穴住居跡　SK: 土坑　SX: 性格不明遺構　P: ピット・柱穴

5．遺物の略号は次のとおりである。

C：土師器（ロクロ不使用）　E：須恵器　F：丸瓦・軒丸瓦　G：平瓦・軒平瓦　H：その他の瓦

I：陶器・瓦質土器　J：磁器　K：石製品　N：鉄製品　P：土製品

6．土師器実測図における網掛けは、黒色処理を示している。その他の付着物や痕跡は図中に表記している。

7．遺物観察表中の法量で（　）が付いた数字は、図上で復元した推定値ないし残存値である。

8．遺構観察表中の土色については「新版標準土色帖」（小山・竹原 1989）を使用した。

9．第 1 図は国土地理院発行の 1：25000「長町」を、また第 2 図は仙台市発行の「2 千 5 百分の 1 都市基本図」を、各調査区位置図は『郡山遺跡発掘調査報告書　総括編（1)』の「付図 2　Ⅱ期官衙全体図」を、第 32 図は国土地理院発行の「2 万 5 千分の 1 地形図」を基に作成し使用した。

目　次

第１章　はじめに

Ⅰ．調査体制・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

Ⅱ．調査計画と実績・・・・・・・・・・・・・・・1

1．調査計画

2．調査実績

第２章　郡山遺跡

Ⅰ．第 292 次発掘調査・・・・・・・・・・・・・・4

Ⅱ．第 294 次発掘調査　・・・・・・・・・・・・・14

Ⅲ．第 295 次発掘調査・・・・・・・・・・・・・23

Ⅳ．第 296 次発掘調査・・・・・・・・・・・・・25

Ⅴ．第 297 次発掘調査・・・・・・・・・・・・・26

Ⅵ．第 299 次発掘調査・・・・・・・・・・・・・28

第３章　陸奥国分寺跡第 30 次調査・・・・・・ 34

第４章　調査成果の普及と関連活動・・・・・・49

第１章　はじめに

Ⅰ．調査体制

調査主体　仙台市教育委員会

調査担当　文化財課長　長島栄一

整備活用係　係長 佐藤淳　　主任 高橋敬子、小野寺啓次　　主事 庄子裕美、五十嵐愛

文化財教諭 齋藤健一、三浦昂也、佐藤文征　　専門員 渡部弘美

調査調整係　係長 平間亮輔　　主任 及川謙作　　主事 妹尾一樹、相川ひとみ、柳澤楓、佐藤恒介、

木村恒　　文化財教諭 大友渉、尾形隆寛、栗和田祥郎、元山祐一　　専門員 齋野裕彦

本報告書に掲載する各調査の担当職員は以下の通りである。

郡山遺跡第 292・294 次調査：五十嵐愛・尾形隆寛

郡山遺跡第 295 ～ 297・299 次調査：庄子裕美・三浦昂也

陸奥国分寺跡第 30 次調査：庄子裕美・三浦昂也・渡部弘美

発掘調査・整理作業を適正に実施するため「郡山遺跡・陸奥国分寺跡等調査指導委員会」を設置し、指導・助言を受けていたが、東日本大震災以降、復旧に伴う発掘調査を優先せざるを得ない状況であったことから、調査指導委員会については、震災後はやむなく休会としている。令和２年度以降については、郡山遺跡と陸奥国分寺跡等の遺跡内での発掘調査の状況を踏まえて、委員会の再開へ向けた調整を図っていくこととする。

Ⅱ．調査計画と実績

１．調査計画

令和元年度に計画した本書掲載の調査は、国庫補助事業である「市内遺跡発掘調査」の一部として計画し、郡山遺跡・陸奥国分寺跡を対象とした 。

郡山遺跡では第５次５ヶ年計画終了後に平成 17 年度から補足調査を実施してきたが、個人住宅建築に関わる調査に加え、今年度は郡山遺跡の史跡整備に伴う範囲確認調査を再開した。

発掘調査総経費は 22,450,000 円（国庫補助金額 11,225,000 円）の予算で計画し、当初は郡山遺跡の個人住宅対応に 4,991,215 円、郡山遺跡の範囲確認調査に 1,264,831 円、「仙台平野の遺跡群」として郡山遺跡以外の市域全体の個人住宅対応に 4,083,000 円、出土木製品の保存処理に 1,001,000 円、仙台城跡調査に 11,109,954 円とした。これによって本書の掲載に関わる発掘調査の実施計画を立案した。しかし、陸奥国分寺跡の内容確認調査を国庫補助事業で対応することになり、郡山遺跡の範囲確認調査を 1,086,065 円、出土木製品の保存処理を 781,000 円、仙台城跡調査を 10,709,920 円に変更し、陸奥国分寺跡の内容確認調査を 798,800 円とした。

遺跡名	調査地区	調査予定面積	調査予定期間	調査原因
郡山遺跡	官衙内部など５箇所	約 300 ㎡	平成 31 年４月～令和２年３月	個人住宅建築
郡山遺跡	Ⅱ期官衙中枢部	約 60 ㎡	令和元年９月	範囲確認調査
陸奥国分寺跡	鐘楼	約 70 ㎡	令和元年 11 月	範囲確認調査

表１　令和元年度発掘調査計画

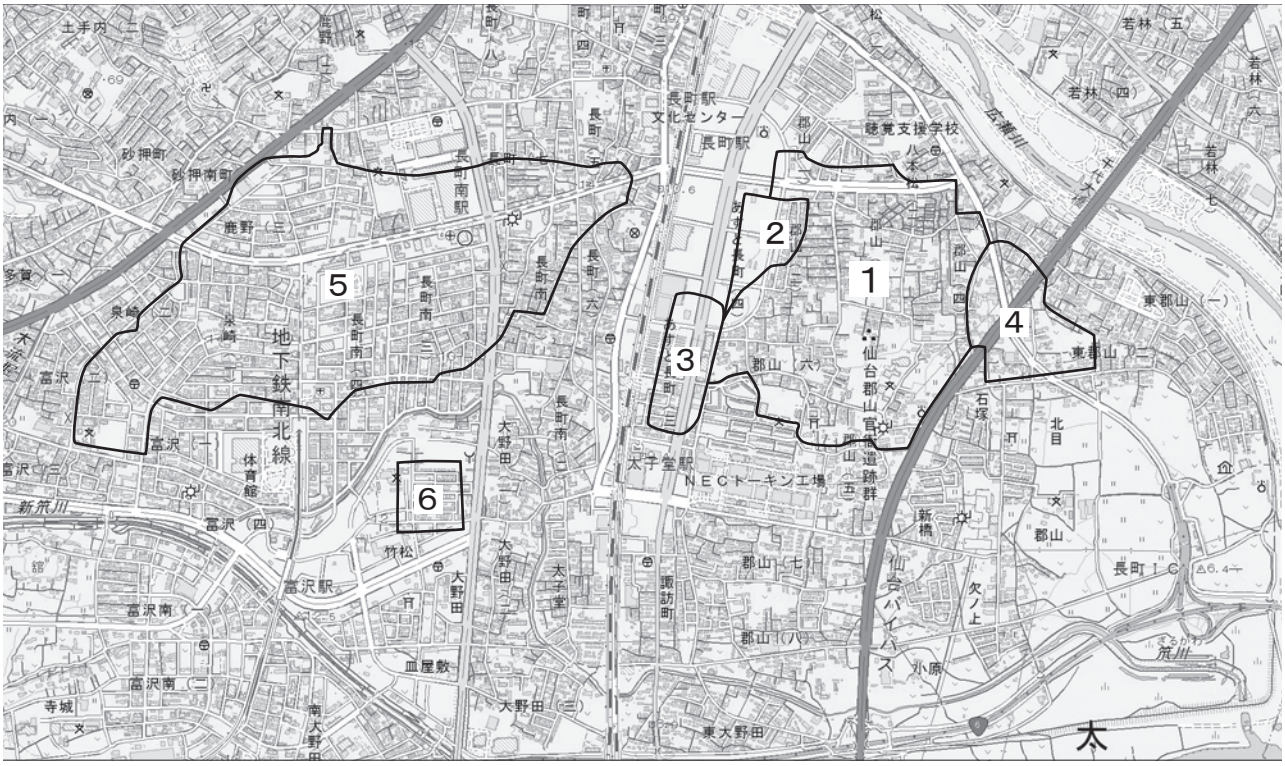
２．調査実績

郡山遺跡については、令和元年度は９箇所の調査を実施した。そのうち本報告書では、国庫補助事業の対象となる個人住宅建築に関わる調査である平成 30 年度実施の第 292・294 次調査に加え、第 295 ～ 297 次調査と範囲確

認調査の第 299 次調査の報告を行う。受託事業で行われた第 298・300・301 次調査については、本年度に刊行される『仙台市文化財調査報告書第 482 集　六反田遺跡ほか発掘調査報告書』に所収される予定である。なお、令和元年度中に実施した第 302・303 次調査については来年度の報告とする。また陸奥国分寺の鐘楼の解体・復元修理工事に伴い実施した陸奥国分寺跡の範囲確認調査の結果を本書で報告する。

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間	調査原因	対応
郡山遺跡第 292 次	II 期官衙西部	22 ㎡	平成 31 年 2 月 12 日～ 3 月 8 日	個人住宅建築	郡山遺跡ほか調査
郡山遺跡第 293 次	郡山遺跡南東部	88.83 ㎡	平成 31 年 2 月 18 日～ 2 月 20 日	宅地造成	開発に伴う本発掘調査
郡山遺跡第 294 次	II 期官衙南東部	22 ㎡	平成 31 年 3 月 12 日～ 3 月 27 日	個人住宅建築	郡山遺跡ほか調査
郡山遺跡第 295 次	II 期官衙南東部	17.5 ㎡	令和元年 6 月 4 日～ 6 月 5 日	個人住宅建築	郡山遺跡ほか調査
郡山遺跡第 296 次	II 期官衙南東部	15 ㎡	令和元年 5 月 20 日	個人住宅建築	郡山遺跡ほか調査
郡山遺跡第 297 次	郡山遺跡南西部	12.5 ㎡	令和元年 6 月 25 日	個人住宅建築	郡山遺跡ほか調査
郡山遺跡第 298 次	II 期官衙東部	37.4 ㎡	令和元年 7 月 17 日～ 8 月 2 日	宅地造成	開発に伴う本発掘調査
郡山遺跡第 299 次	II 期官衙中枢部南東側	57.5 ㎡	令和元年 9 月 2 日～ 9 月 17 日	範囲確認	郡山遺跡ほか調査
郡山遺跡第 300 次	II 期官衙外郭西辺	30 ㎡	令和元年 10 月 2 日～ 10 月 4 日	長屋住宅建築	開発に伴う確認調査
郡山遺跡第 301 次	II 期官衙外郭南辺	30 ㎡	令和元年 12 月 9 日～ 12 月 16 日	建売住宅建築	開発に伴う確認調査
郡山遺跡第 302 次	II 期官衙南西部	18 ㎡	令和元年 12 月 10 日～ 12 月 23 日	個人住宅建築	郡山遺跡ほか調査
郡山遺跡第 303 次	II 期官衙南西部	14 ㎡	令和元年 12 月 10 日～ 12 月 23 日	個人住宅建築	郡山遺跡ほか調査
陸奥国分寺跡第 30 次	鐘楼	82.7 ㎡	令和元年 11 月 11 日～ 12 月 6 日	範囲確認	陸奥国分寺跡調査

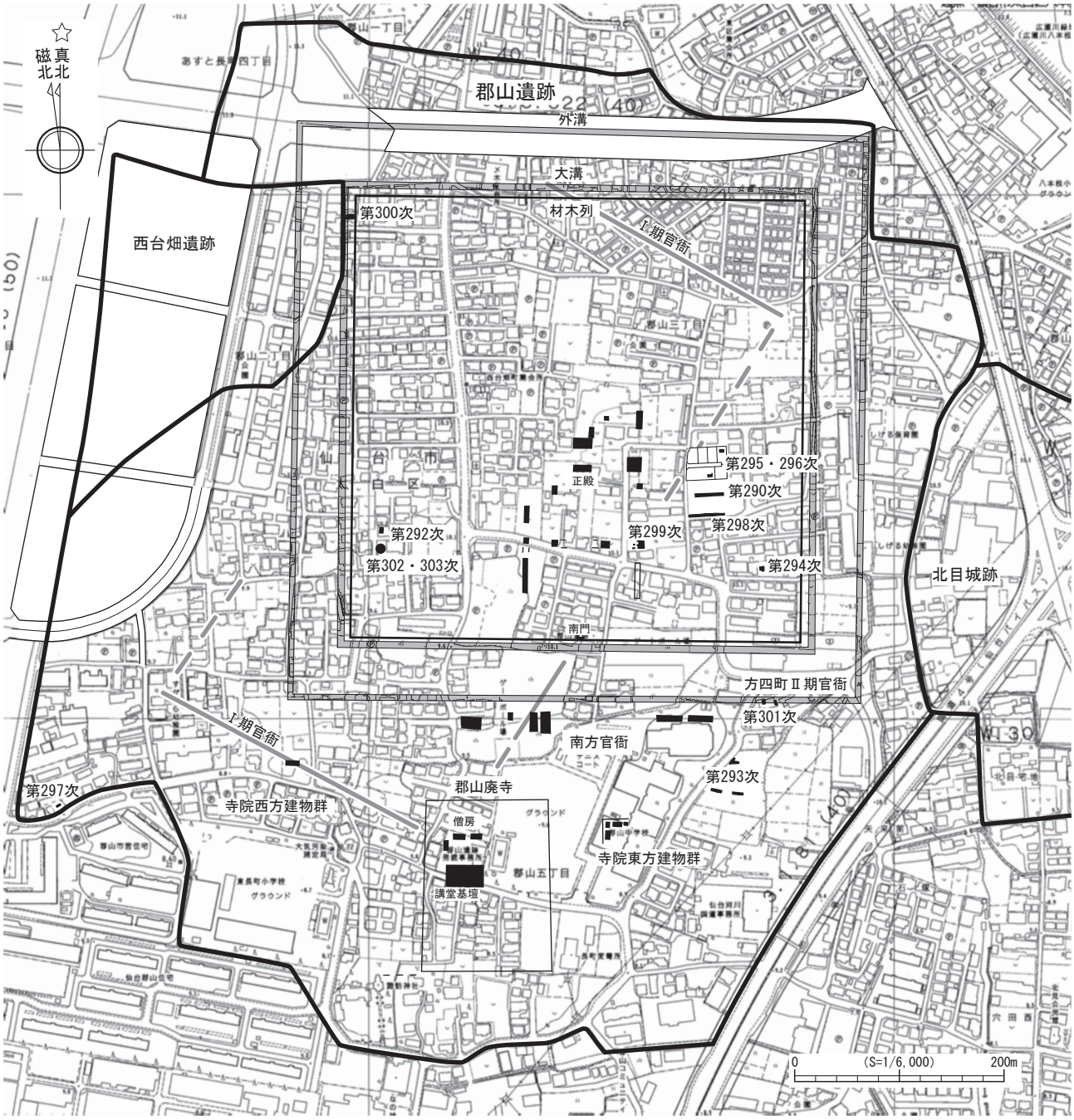
表 2　令和元年度発掘調査実績



1. 郡山遺跡　2. 西台畑遺跡　3. 長町駅東遺跡　4. 北目城跡　5. 富沢遺跡　6. 大野田官衙遺跡

第 1 図　遺跡位置図

※陸奥国分寺跡の位置は第 3 章第 32 図を参照

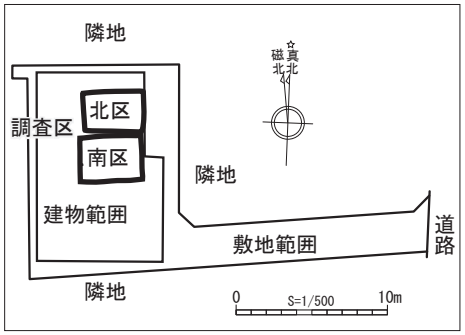


第２図　郡山遺跡調査地点位置図

第２章　郡山遺跡

Ⅰ．第 292 次発掘調査

1.　調査経過と調査方法

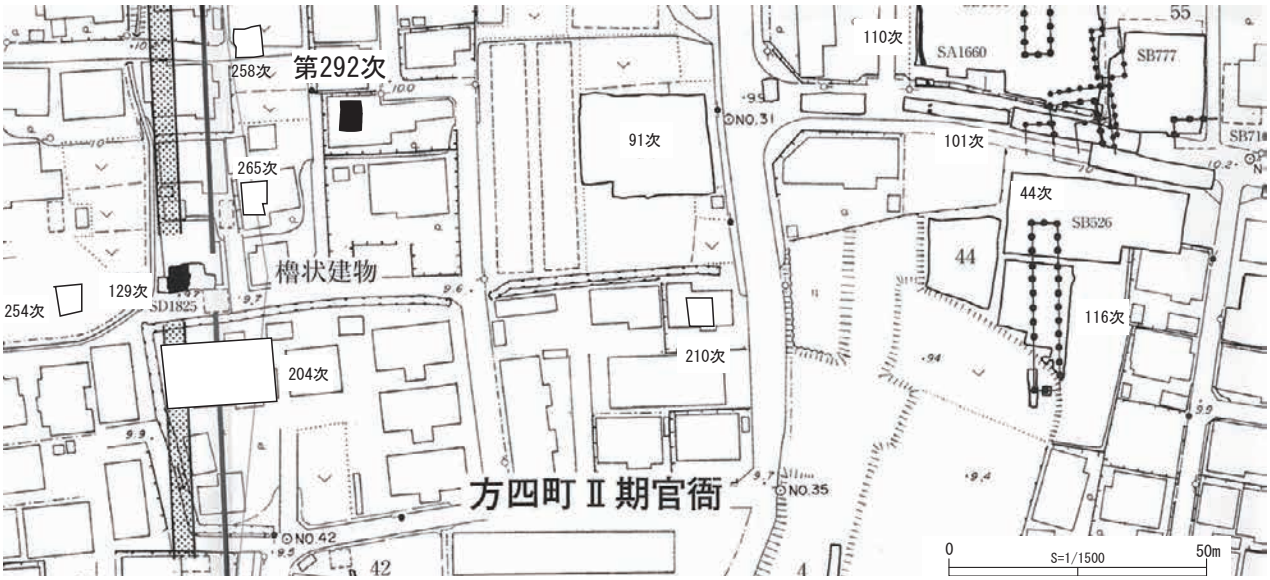


第 3 図　第 292 次調査区配置図

第 292 次調査は、個人住宅建築に伴う調査である。平成 30 年 12 月 17 日付で申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（平成 30 年 12 月 21 日付 H30 教生文第 102-483 号で回答）に基づき実施した。

今回の調査地点は、郡山遺跡方四町Ⅱ期官衙の西辺付近に位置し、平成 11 年度に調査が行われた第 129 次調査区、平成 28 年度に調査が行われた第 265 次調査区の北東側に、平成 27 年度に調査が行われた第 258 次調査区の南東側にあたる。（第 2・4 図）

調査は平成 31 年 2 月 12 日に着手し、想定される遺構検出状況をもとに、建築予定範囲内に東西 4.0 m×南北 3.0 mの規模で調査区を設定した。重機により盛土および基本層Ⅲ層中まで掘り下げ、基本層Ⅲ層中（GL － 1.2 ～ 1.3 m）で遺構検出作業を行った。本来の検出面上面より下部で遺構検出を行ったため、一部の遺構は調査区壁断面においてのみ検出した。また、調査区の南側に遺構が広がることが確認されたため、南側に東西 4.0 m×南北 3.0 mの調査区を追加し、基本層Ⅲ層中（GL － 0.8 ～ 0.9 m）で遺構検出作業を行った。遺構の記録は、平面図・断面図を S=1/20 で作製し、記録写真はデジタルカメラを用いて撮影した。また、調査の際に郡山座標（No.31）から基準点・水準点の移設を行った。3 月 8 日に調査を終了し、その後重機により埋戻しを行った。



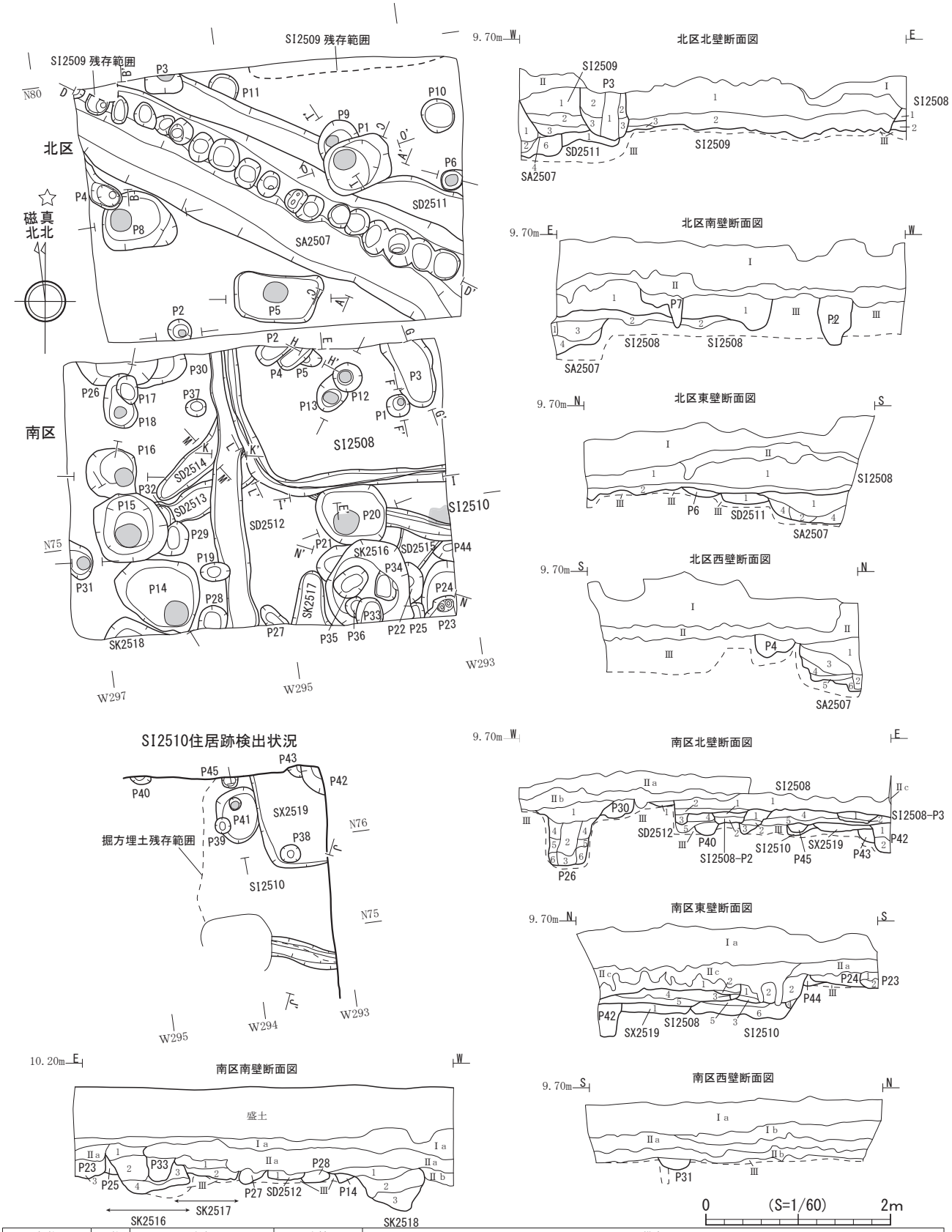
第 4 図　第 292 次調査区位置図

2.　検出遺構と出土遺物

検出された遺構は、材木列跡 1 列、竪穴住居跡 3 軒、溝跡 5 条、土坑 3 基、性格不明遺構 1 基、ピット 45 基である。また、各遺構および基本層中から土師器片や須恵器片、瓦片などの遺物が出土している。

【SA2507 材木列跡】

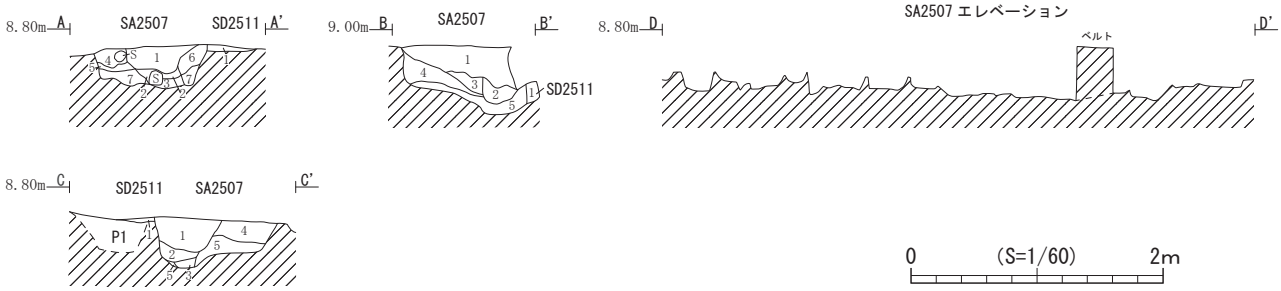
調査区の北側で検出された北西－南東方向の材木列跡である。SD2511 溝跡より新しく、SI2508･2509 竪穴住居跡、P1 より古い。規模は検出長が約 4.2 mで、調査区外にさらに延びる。方向は N―66°―W である。溝状の抜き取り穴が確認され、底面において直径 20 ～ 35 ㎝の柱の抜き取り痕跡がほぼ連続して検出された。柱の抜き取り痕跡は材木列掘方の北東側に寄って検出された。材木列の掘方・抜き取りを合わせた上端幅は 95 ～ 105 ㎝で、掘方



部位	層位	土色	土性	備考
基本層北区	Ⅰ	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	
	Ⅱ	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層粒～中ブロックを含む。酸化鉄を含む。マンガン粒を含む。　耕作土
	Ⅲ	10YR7/2 にぶい黄橙色	シルト質粘土	褐灰色粘土小ブロックを含む。マンガン粒を含む。酸化鉄を含む。　遺構検出面
基本層南区	Ⅰa	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	にぶい黄橙色粘土質シルト粒～中ブロックを少量含む。炭化物粒（～φ 1 cm）を含む。
	Ⅰb	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	にぶい黄橙色・灰黄褐色粘土質シルトを粒～大ブロック状に含む。炭化物粒（～φ 5 mm）を少量含む。
	Ⅱa	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	にぶい黄橙色粘土質シルト粒～小ブロックを微量含む。炭化物粒（～φ 1 cm）を少量含む。
	Ⅱb	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層と斑状に混ざる。マンガン粒を含む。
	Ⅱc	10YR5/1 褐灰色	シルト	木根跡とみられる。酸化鉄粒を含む。
	Ⅲ	10YR6/2 灰黄褐色	粘土	にぶい黄橙色・褐灰色粘土を斑状に含む。酸化鉄粒とマンガン粒を含む。　遺構検出面

第 5 図　第 292 次調査区平面・断面図

遺構	層位	土色	土性	備考
SI2509	1	10YR5/1 褐灰色	粘土	灰黄褐色粘土質シルト・灰黄褐色シルト質粘土と粒～大ブロック状斑状に混ざる。炭化物粒（～φ５㎜）を少量含む。酸化鉄粒を含む。
	2	10YR4/1 褐灰色	粘土	黒褐色粘土・灰白色粘土と粒～小ブロック状斑状に混ざる。酸化鉄粒とマンガン粒を含む。
	3	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層粒～小ブロックを含む　酸化鉄粒を含む
SD2511	1	10YR5/1 褐灰色	粘土	褐灰色粘土・にぶい黄橙色シルト質粘土と粒～中ブロック状斑状に混ざる。酸化鉄とマンガン粒を含む。
SK2517	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層粒を少量含む。マンガン粒を含む。
	2	10YR4/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層と粒～大ブロック状斑状に混ざる。マンガン粒を含む。
SK2518	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	Ⅲ層粒～大ブロックを含む。マンガン粒を含む。炭化物粒（～φ５㎜）を微量含む。
	2	10YR5/1 褐灰色	粘土	にぶい黄褐色粘土・Ⅲ層と斑状に混ざる。マンガン粒を含む。
	3	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	褐灰色粘土・Ⅲ層と粒～中ブロック状斑状に混ざる。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を含む。
SX2519	1	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層粒～小ブロックを少量含む。酸化鉄粒を含む。
P3	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	にぶい黄褐色粘土質シルトと粒～小ブロック状斑状に混ざる。炭化物粒（～φ10㎜）をやや多量含む。酸化鉄粒を含む。（柱痕跡）
	2	10YR5/2 灰黄褐色	シルト質粘土	にぶい黄褐色シルト質粘土と斑状に混ざる。炭化物粒（～φ10㎜）を中量含む。淡黄色粘土粒～小ブロックを含む。（掘方埋土）
	3	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	鈍い黄褐色・淡黄色シルト質粘土粒～小ブロック状に斑状に混ざる。（掘方埋土）
P26	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層粒～大ブロックを少量含む。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を含む。炭化物粒（～φ１㎝）を少量含む。（抜取り穴）
	2	10YR5/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層粒～小ブロックを少量含む。炭化物粒（～φ２㎝）を含む。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を含む。（柱痕跡）
	3	10YR5/1 褐灰色	粘土	灰白色粘土粒～大ブロックを含む。炭化物粒・焼土粒（～φ５㎜）を少量含む。マンガン粒を含む。（柱痕跡）
	4	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層と粒～中ブロック状斑状に混ざる。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を含む。炭化物粒（φ～５㎜）を微量含む。（掘方埋土）
	5	10YR4/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層粒～小ブロックを斑状に含む。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を含む。（掘方埋土）
	6	10YR5/1 褐灰色	粘土	にぶい黄褐色粘土・Ⅲ層と粒～大ブロック状斑状に混ざる。酸化鉄粒とマンガン粒を含む。（掘方埋土）



部位	層位	土色	土性	備考
SA2507 西壁	1	10YR5/1 褐灰色	粘土	褐灰色粘土・灰黄褐色粘土と粒～大ブロック状に斑状に混ざる。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を含む。（柱抜取り穴）
	2	10YR3/1 黒褐色	粘土	褐灰色粘土・灰黄褐色粘土粒～小ブロック状に斑状に混ざる。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を含む。（柱抜取り痕）
	3	10YR5/1 褐灰色	粘土	褐灰色粘土・灰黄褐色粘土粒～中ブロック状に斑状に混ざる。黒褐色粘土粒～小ブロックと酸化鉄粒とマンガン粒を含む。（掘方埋土）
	4	10YR5/1 褐灰色	粘土	灰黄褐色粘土粒状に斑状に混ざる。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を含む。（掘方埋土）
	5	10YR5/1 褐灰色	粘土	灰黄褐色粘土と斑状に混ざる。Ⅲ層粒～小ブロックを含む。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を多量含む。（掘方埋土）
	6	10YR6/1 褐灰色	粘土	黒褐色粘土・灰黄褐色粘土ブロック状に斑状に混ざる。マンガン粒と酸化鉄粒を含む。（掘方埋土）
SA2507 (B － B')	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層と粒～大ブロック状に斑状に混ざる。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を含む。（抜取り穴）
	2	10YR4/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層・黒褐色粘土と粒～中ブロック状に斑状に混ざる。酸化鉄粒を含む（層下部に集中箇所有）。マンガン粒を含む。（柱抜取り痕）
	3	10YR3/1 黒褐色	粘土	褐灰色粘土が斑状に混ざる。Ⅲ層粒～小ブロックを含む。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を含む。（掘方埋土）
	4	10YR6/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層・褐灰色粘土を粒～小ブロック状に含む。マンガン粒を含む。酸化鉄粒を含む。（掘方埋土）
	5	10YR5/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層・褐灰色粘土を粒～小ブロック状または薄層状に含む。酸化鉄粒・マンガン粒を含む。（掘方埋土）
SA2507 (A － A')	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層と粒～大ブロック状に斑状に混ざる。黒褐色粘土を粒～小ブロック状に含む。酸化鉄粒とマンガン粒を含む。（抜取り穴）
	2	10YR4/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層を粒～小ブロック状に含む。酸化鉄粒を含む。（抜取り穴）
	3	10YR3/1 黒褐色	粘土	Ⅲ層・褐灰色粘土を粒～小ブロック状に含む。酸化鉄粒を含む。（柱抜取り痕）
	4	10YR4/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層を粒～中ブロック状に含む。マンガン粒を多量含む。酸化鉄粒を少量含む。（掘方埋土）
	5	10YR6/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層と粒～小ブロック状に斑状に混ざる。黒褐色粘土を粒～小ブロック状に含む。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を少量含む。（掘方埋土）
	6	10YR3/1 黒褐色	粘土	Ⅲ層と粒～大ブロック状に混ざる。酸化鉄粒を含む。（掘方埋土）
	7	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層と粒～中ブロック状に斑状に混ざる。黒褐色粘土粒～小ブロックを少量含む。酸化鉄粒を少量含む。（掘方埋土）
SA2507 (C － C')	1	10YR3/1 黒褐色	粘土	褐灰色粘土・灰黄褐色粘土粒～大ブロック状に斑状に混ざる。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を含む。（抜取り穴）
	2	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	褐灰色・灰黄褐色・黒褐色粘土を粒～小ブロック状に含む。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を含む。（抜取り穴）
	3	10YR4/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層粒を含む。黒褐色粘土粒～小ブロックを含む。酸化鉄粒を含む。（柱抜取り痕）
	4	10YR4/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層を粒～中ブロック状に含む。マンガン粒を多量含む。酸化鉄粒を少量含む。（掘方埋土）
	5	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層と粒～中ブロック状に斑状に混ざる。黒褐色粘土粒～小ブロックを少量含む。酸化鉄粒を少量含む。（掘方埋土）
SA2507 東～南壁	1	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	黒褐色粘土・にぶい黄橙色シルト質粘土と粒～大ブロック状に斑状に混ざる。酸化鉄粒を含む。（抜取り穴）
	2	10YR3/1 黒褐色	粘土	褐灰色粘土と斑状に混ざる。Ⅲ層粒を中量含む。酸化鉄粒を含む。（柱抜取り痕）
	3	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	黒褐色粘土・Ⅱ層と粒～中ブロック状に斑状に混ざる。酸化鉄粒を含む。（掘方埋土）
	4	10YR5/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層・黒褐色粘土と粒～中ブロック状に斑状に混ざる。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を含む。（掘方埋土）

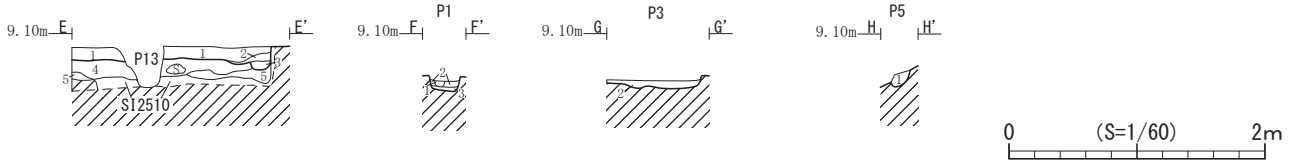
第６図　SA2507 材木列跡断面・エレベーション図

の下端幅は約 80 ㎝、深さは約 60 ㎝である。断面形状はほぼ箱形とみられる。堆積土は掘方埋土が４層、抜取り穴が３層に分層される。遺物は出土していない。

【SI2508 竪穴住居跡】

調査区の東側で検出された。SA2507 材木列跡、SI2510 竪穴住居跡、SD2511・2512・2513 溝跡、P6・P20・P38・P39・P40・P41・P42・P43・P45 より新しく、SI2509 竪穴住居跡、P7・P12・P13 より古い。北側の調査区では掘り過ぎにより壁断面でのみ検出しているが、南側の調査区で住居跡の南西部を検出している。東辺は調査区外となっている。規模は東西方向が 2.4 m以上で、南北方向は不明である。南辺を基準とした方向は N － 86° － E である。堆積土は２層に分層される。遺構検出面から床面までの深さは 15 ～ 20 ㎝である。掘方を５～ 15 ㎝

埋め戻して床面としている。床面の施設としては、周溝、ピット５基（SI2508-P1 ～ P5）が検出された。周溝は南壁際および西壁際で検出されており、規模は幅 10 ～ 20 ㎝、深さ 5 ～ 10 ㎝で、断面形状はＵ字形を呈する。堆積土は単層である。5 基検出されたピット（SI2508-P1 ～ P5）のうち､柱痕跡を確認したピットは 1 基（SI2508-P1）のみであるが、配置から考えて主柱穴ではないと推測される。遺物は土師器片が出土している。



部位	層位	土色	土性	備考
SI2508 北区南壁	1	10YR5/2 灰黄褐色	シルト質粘土	褐灰色粘土と斑状に混ざる。灰白色・黒褐色粘土粒～中ブロックを含む。炭化物粒（～φ５㎜）を少量含む。マンガン粒を含む。酸化鉄粒を含む。（堆積土）
	2	10YR6/2 灰黄褐色	粘土	灰白色・黒褐色粘土を粒～小ブロック状または薄層状に含む。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を含む。（掘方埋土？）
SI2508 南区北壁	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層・褐灰色粘土が粒～小ブロック状にやや多量斑状に混ざる。酸化鉄を多量含む。マンガン粒を含む。（堆積土）
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層粒を少量含む。マンガン粒を含む。酸化鉄粒を含む。（堆積土）
	3	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層粒を含む。マンガン粒を含む。酸化鉄粒を含む。（周溝）
	4	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層粒～小ブロックを中量含む。褐灰色粘土粒～大ブロックを中量含む。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を含む。（掘方埋土）
	5	10YR4/1 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層と粒～小ブロック状に斑状混ざる。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を含む。（掘方埋土）
SI2508 P1	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	灰白色粘土粒～小ブロックを含む。マンガン粒を含む。（柱痕跡）
	2	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層粒を含む。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を含む。（掘方埋土）
	3	10YR6/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層粒～小ブロックを含む。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を含む。（掘方埋土）
SI2508 P2	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層粒を少量含む。マンガン粒を含む。酸化鉄粒を含む。
	2	10YR5/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層粒を少量含む。マンガン粒を含む。酸化鉄粒を含む。
SI2508 P3	1	10YR6/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層粒～中ブロックを中量含む。褐灰色粘土粒を含む。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を含む。
	2	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層・黒褐色粘土と粒～中ブロック状に斑状混ざる。酸化鉄粒を含む。炭化物粒（～φ５㎜）を含む。マンガン粒を含む。
SI2508 P4	1	10YR5/1 褐灰色	粘土	褐灰色粘土を粒～大ブロック状に含む。Ⅲ層粒を含む。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を含む。
	2	10YR5/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層と粒～小ブロック状に斑状混ざる。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を含む。
	3	10YR5/1 褐灰色	粘土	褐灰色粘土・Ⅲ層と粒～小ブロック状に斑状混ざる。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を含む。
SI2508 P5	1	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	褐灰色粘土・Ⅲ層と粒～小ブロック状に斑状混ざる。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を含む。

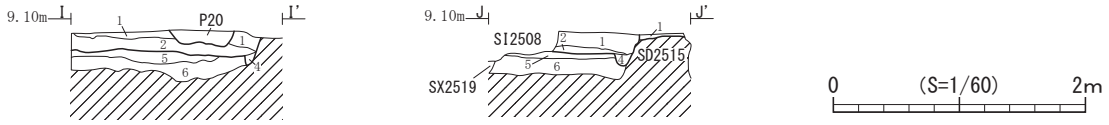
第 7 図　SI2508 竪穴住居跡断面図

【SI2509 竪穴住居跡】

調査区の北壁で検出された。SA2507 材木列跡、SI2508 竪穴住居跡、SD2511 溝跡より新しく、P3 より古い。掘り過ぎにより壁断面での検出となっており、部分的に残存部を確認したのみである。方向は不明であるが、住居跡の北側は調査区外となっている。規模は東西方向が 4.1 m以上、南北方向は不明である。堆積土は 3 層に分層されるが、床面が不明のため掘方埋土を含む可能性がある。遺物は出土していない。

【SI2510 竪穴住居跡】

調査区の東側で検出された。SD2515 溝跡より新しく、SI2508 竪穴住居跡、SX2519 性格不明遺構、P20 より古い。住居跡の南西辺を確認したが、東側は調査区外となっている。規模は短軸が 1.7 m以上、長軸が 2.1 m以上である。南西辺を基準とした方向は N － 75°－ W である。堆積土は 3 層に分層され、下部で炭化物の集中箇所を確認している。遺構検出面から床面までの深さは 20 ～ 25 ㎝である。掘方を 15 ～ 20 ㎝埋め戻して床面としている。床面の施設としては南西壁際で周溝が検出された。周溝の規模は、幅 7 ～ 20 ㎝、深さ約 8 ㎝で、断面形状はＵ字形を呈する。堆積土は単層である。遺物は土師器が出土しており、そのうち土師器坏（第 11 図 1）を図化した。



部位	層位	土色	土性	備考
SI2510 壁・ベルト	1	10YR5/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層粒～小ブロックを少量含む。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を含む。（堆積土）
	2	10YR4/1 褐灰色	粘土	褐灰色粘土・Ⅲ層を粒～小ブロック状に少量含む。酸化鉄粒とマンガン粒を含む。炭化物粒（～φ５㎜）を微量含む。（堆積土）
	3	10YR5/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層粒～小ブロックを少量含む。酸化鉄粒を含む。（堆積土）
	4	10YR4/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層粒をやや多量含む。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を含む。（周溝埋土）
	5	10YR5/1 褐灰色	粘土	褐灰色粘土・Ⅲ層と粒～中ブロック状に斑状混ざる。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を含む。（掘方埋土）
	6	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層・褐灰色粘土と粒～大ブロック状に斑状混ざる。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を含む。（掘方埋土）

第 8 図　SI2510 竪穴住居跡断面図

【SD2511 溝跡】

調査区の北側で検出された北西－南東方向の溝跡である。SA2507 材木列跡と並列するため、関連が考えられたが、遺構断面の観察から別遺構と判断した。P11 より新しく、SA2507 材木列跡、P1・P3・P9 より古い。規模は検出長が約 3.4 ｍで、調査区外にさらに延びる。方向はＮ－ 67°－Ｗで、上端幅が 30 ～ 40 ㎝、下端幅が 20 ～ 35 ㎝である。断面形状は皿形を呈すると推測される。遺構検出面から底面までの深さは約 10 ㎝で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

【SD2512 溝跡】

調査区の南側で検出された南北方向の溝跡である。SD2513・2514 溝跡、P28 より新しく、SI2508 竪穴住居跡、P19 より古い。規模は検出長が約 3.0 ｍで、調査区外にさらに延びる。方向はＮ－ 2°－Ｗで、上端幅が 25 ～ 35 ㎝、下端幅が 20 ～ 25 ㎝で、断面形状は浅い皿形を呈する。遺構検出面から底面までの深さは 5 ～ 10 ㎝で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

【SD2513 溝跡】

調査区の南側で検出された南西－北東方向の溝跡である。P32 より新しく、SI2508 竪穴住居跡、SD2512 溝跡、P15・P29 より古い。規模は検出長が約 1.1 ｍで、方向はＮ－ 71°－Ｅである。上端幅が 23 ～ 35 ㎝、下端幅が 18 ～ 25 ㎝で、断面形状は浅い皿形を呈する。遺構検出面から底面までの深さは約 5 ㎝で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

【SD2514 溝跡】

調査区の南側で検出された南西－北東方向の溝跡である。SD2512 溝跡より古い。規模は検出長が約 1.1 ｍで、方向はＮ－ 42°－Ｅである。上端幅が 20 ～ 30 ㎝、下端幅が 15 ～ 23 ㎝で、断面形状は浅い皿形を呈する。遺構検出面から底面までの深さは約 5 ㎝で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

【SD2515 溝跡】

調査区の南東側で検出された南西－北東方向の溝跡である。P44 より新しく、SI2510 竪穴住居跡、SK2516 土坑、P22 より古い。規模は検出長が約 40 ㎝で、方向はＮ－ 52°－Ｅである。上端幅が 35 ～ 45 ㎝、下端幅が 30 ～ 40 ㎝で、断面形状は浅い皿形を呈する。遺構検出面から底面までの深さは約 5 ㎝で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

【SK2516 土坑】

調査区の南東側で検出された。SD2515 溝跡、P20・P21・P22・P25・P34・P35・P36 より新しく、SK2517 土坑・P33 より古い。規模は東西 90 ㎝、南北 90 ㎝以上であり、平面形は楕円形を基調としたものと推測される。深さは約 65 ㎝で、断面形状は逆台形を呈すると推測される。堆積土は 6 層に分層される。遺物は陶器が出土している。

【SK2517 土坑】

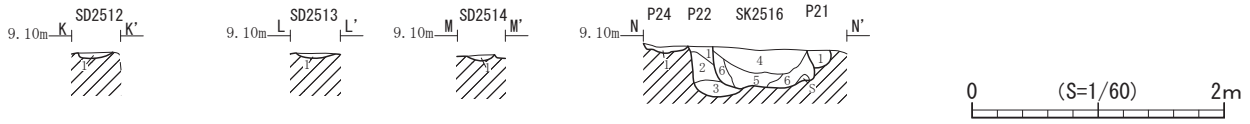
調査区の南東側で検出された。SK2516 土坑より新しい。規模は東西 45 ㎝以上、南北 60 ㎝以上であり、平面形は不明である。深さは約 20 ㎝で、断面形状は不明である。堆積土は 2 層に分層される。遺物は出土していない。

【SK2518 土坑】

調査区の南西側で検出された。P14・P28 より新しい。規模は東西 70 ㎝以上、南北 20 ㎝以上であり、平面形は不明である。深さは 50 ㎝以上で、断面形状は不明である。堆積土は 3 層に分層される。遺物は土師器片が出土しており、このうち平瓶の可能性がある土師器を図化した。内外面に漆が付着している。

【SX2519 性格不明遺構】

調査区の東側で検出された。SI2510 竪穴住居跡、P41･P43 より新しく、SI2508 竪穴住居跡、P38･P42 より古い。規模は東西 75 ㎝以上、南北 1.1 ｍ以上であり、平面形は方形を基調としたものと推測される。深さは 5 ～ 10 ㎝で、



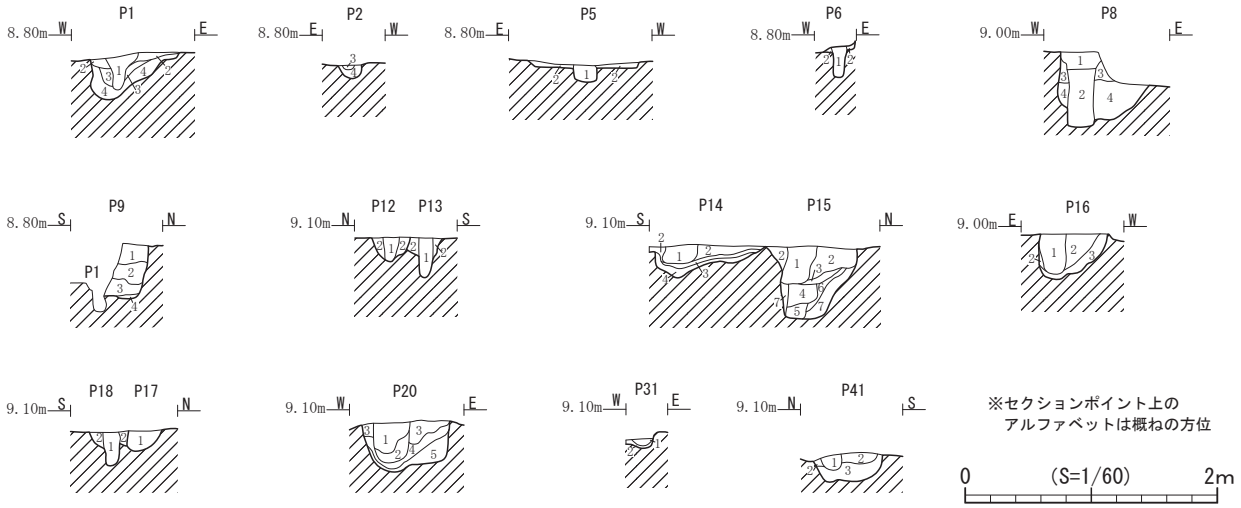
遺構	層位	土色	土性	備考
SD2512	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層と粒～大ブロック状に斑状混ざる。
SD2513	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層と粒～小ブロック状に斑状混ざる。酸化鉄粒を含む。
SD2514	1	10YR5/1 褐灰色	粘土質シルト	Ⅲ層と斑状に混ざる。マンガン粒を多量含む。酸化鉄粒を多量含む。
SD2515	1	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	Ⅲ層と斑状に混ざる。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を含む。
SK2516	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	灰黄褐色粘土と斑状に混ざる。炭化物粒（～φ 1 cm）を少量含む。マンガン粒を含む。焼土粒（～φ 5 mm）を微量含む。
	2	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	灰黄褐色粘土と斑状に混ざる。Ⅲ層粒～大ブロックを中量含む。炭化物粒・焼土粒（～φ 5 mm）を微量含む。マンガン粒を含む。
	3	10YR5/1 褐灰色	粘土	灰黄褐色粘土と斑状に混ざる。Ⅲ層粒～中ブロックを少量含む。マンガン粒を含む。褐灰色粘土粒を含む。
	4	10YR4/1 褐灰色	粘土	炭化物粒（～φ 1 cm）を含む。灰白色粘土を粒～中ブロック状に少量含む。マンガン粒を含む。酸化鉄粒を含む。
	5	10YR4/1 褐灰色	粘土	にぶい黄橙色粘土粒～中ブロックを中量含む。酸化鉄粒を含む。
	6	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	Ⅲ層と粒～大ブロック状に斑状混ざる。マンガン粒を含む。

第 9 図　溝跡・土坑断面図

断面形状は逆台形を呈すると推測される。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

【ピット】

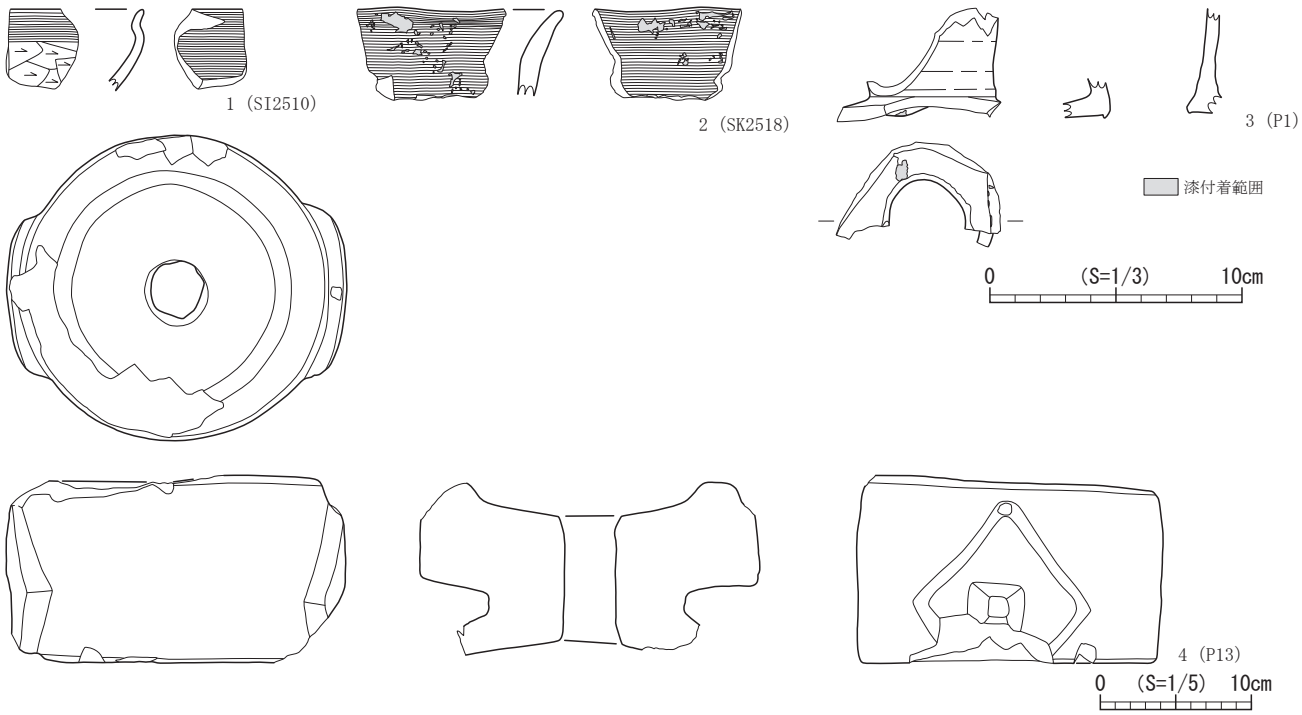
今回の調査では計 45 基のピットが検出された。平面形状は円形や楕円形、隅丸方形を基調としたものが主体であり、直径は 20 ～ 95 ㎝である。柱痕跡が検出されたピットは 17 基であり、柱痕跡の直径が 20 ㎝をこえるものもあることから、掘立柱建物等を構成する可能性が考えられるが、本調査区内においての組み合わせは不明である。遺物は漆が付着した須恵器の平瓶の破片（P1 出土・第 11 図 3）や、茶臼（P24 出土・第 11 図 4）、鉱滓（P8 出土・写真 2-5）などが出土している。



遺構	層位	土色	土性	備考
P1	1	10YR4/2 灰黄褐色 10YR3/1 黒褐色	粘土	縞状に堆積。酸化鉄粒を多量含む。（柱痕跡）
	2	10YR5/1 褐灰色	粘土	10YR3/1 黒褐色粘土粒を少量含む。酸化鉄粒を含む。（掘方埋土）
	3	10YR5/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層・黒褐色粘土を粒～小ブロック状にやや多量含む。酸化鉄粒を含む。（掘方埋土）
	4	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層・黒褐色粘土と小ブロック状に斑状混ざる。酸化鉄粒を含む。（掘方埋土）
P2	1	10YR6/1 褐灰色	シルト質粘土	Ⅲ層粒～小ブロックを少量含む。マンガン粒を含む。酸化鉄粒を含む。
	2	10YR5/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層とブロック状に斑状混ざる。マンガン粒を多量含む。
	3	10YR4/1 褐灰色	粘土	炭化物粒（～φ 1 mm）を微量含む。（柱痕跡）
	4	10YR7/2 にぶい黄橙色	シルト質粘土	褐灰色シルト質粘土を粒～ブロック状に斑状含む。酸化鉄粒を極多量含む。マンガン粒を含む。（掘方埋土）
P5	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	灰白色・暗褐色粘土と斑状に混ざる。マンガン粒を多量含む。酸化鉄粒を含む。（柱痕跡）
	2	10YR4/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層と斑状に混ざる。マンガン粒を多量含む。酸化鉄粒を含む。（掘方埋土）
P6	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層と小ブロック状に斑状混ざる。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を含む。（柱痕跡）
	2	10YR7/2 にぶい黄橙色	シルト質粘土	褐灰色粘土と斑状に混ざる。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を含む。（掘方埋土）
P8	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	Ⅲ層と粒～大ブロック状に斑状混ざる。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を含む。（抜取り？）
	2	10YR4/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層粒を少量含む。酸化鉄粒を含む。炭化物粒（～φ 15 mm）を少量含む。（柱痕跡）
	3	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	黒褐色粘土・Ⅲ層と粒～小ブロック状に斑状混ざる。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を含む。（掘方埋土）
	4	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層と斑状に混ざる。褐灰色粘土を粒～大ブロック状に含む。酸化鉄粒を少量含む。マンガン粒を含む。（掘方埋土）
P9	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層と斑状に混ざる。黒褐色粘土を粒～小ブロック状に含む。酸化鉄粒を多量含む。マンガン粒を含む。
	2	10YR5/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層と粒～小ブロック状に斑状混ざる。黒褐色粘土を粒～小ブロック状に含む。酸化鉄粒を中量含む。マンガン粒を少量含む。
	3	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層と粒～中ブロック状に斑状混ざる　黒褐色粘土を粒～小ブロック状に含む。酸化鉄粒を少量含む。
	4	10YR3/1 黒褐色	粘土	Ⅲ層と斑状に混ざる。酸化鉄粒を含む。（柱痕跡）

第 10 図　ピット断面図

遺構	層位	土色	土性	備考
P12	1	2.5Y4/1 黄灰色	粘土	マンガン粒を含む。（柱痕跡）
	2	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	灰黄褐色粘土粒を含む。マンガン粒を含む。（掘方埋土）
P13	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	マンガン粒を含む。（柱痕跡）
	2	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	灰黄褐色シルト質粘土と粒～小ブロック状に混ざる。マンガン粒を含む。酸化鉄粒を含む。（掘方埋土）
P14	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	にぶい黄褐色粘土と斑状に混ざる。Ⅲ層粒を微量含む。炭化物粒（～φ 1 ㎜）を微量含む。マンガン粒を含む。（柱痕跡）
	2	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	Ⅲ層粒～小ブロックを微量含む。黒褐色粘土粒～小ブロックを含む。マンガン粒を多量含む。（掘方埋土）
	3	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	Ⅲ層と粒～中ブロック状に斑状混ざる。（掘方埋土）
	4	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層と粒～中ブロック状に斑状混ざる。（掘方埋土）
P15	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層を粒～中ブロック状に斑状含む。マンガン粒を多量含む。焼土粒～大ブロックを含む。（柱痕跡）
	2	10YR5/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層粒～小ブロックを少量含む。焼土粒・炭化粒（～φ 1 ㎝）を少量含む。マンガン粒を含む。（掘方埋土）
	3	10YR4/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層粒を少量含む。（掘方埋土）
	4	10YR4/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層粒～小ブロックを少量含む。焼土粒～小ブロックを微量含む。炭化物粒（～φ 0.5 ㎜）を微量含む。（柱痕跡）
	5	10YR4/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層粒を少量含む。炭化物粒（～φ 0.5 ㎜）を微量含む。（柱痕跡）
	6	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層粒～小ブロックをやや多量含む。黒褐色粘土粒～小ブロックを含む。マンガン粒を微量含む。（掘方埋土）
	7	10YR5/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層粒～小ブロックが斑状に混ざる。黒褐色粘土粒～小ブロックを含む。マンガン粒を含む。（掘方埋土）
P16	1	10YR5/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層粒～小ブロックを微量含む。炭化粒・焼土粒（～φ 5 ㎜）を少量含む。マンガン粒を少量含む。（柱痕跡）
	2	10YR5/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層と粒～中ブロック状に斑状混ざる。マンガン粒を含む。（掘方埋土）
	3	10YR5/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層と粒～大ブロック状に斑状混ざる。マンガン粒を含む。炭化物粒（～φ 1 ㎜）を微量含む。（掘方埋土）
P17	1	2.5Y4/1 黄灰色	粘土	Ⅲ層と斑状に混ざる。マンガン粒を含む。酸化鉄粒を微量含む。
P18	1	2.5Y5/1 黄灰色	粘土	Ⅲ層粒～小ブロックを含む。（柱痕跡）
	2	2.5Y5/1 黄灰色	粘土	Ⅲ層と粒～中ブロック状に斑状混ざる。マンガン粒を含む。酸化鉄粒をやや多量含む。（掘方埋土）
P20	1	10YR3/1 黒褐色	粘土	灰黄褐色シルト質粘土・にぶい黄橙色粘土を粒～小ブロック状に斑状に含む。焼土粒・炭化物粒（～φ 1 ㎝）を含む。酸化鉄粒を含む。（柱痕跡）
	2	10YR4/1 褐灰色	粘土	灰黄褐色シルト質粘土・にぶい黄橙色粘土を粒～大ブロック状に斑状に含む。焼土粒・炭化粒（～φ 1 ㎝）を含む。酸化鉄粒を含む。（柱痕跡）
	3	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	Ⅲ層粒～小ブロックを少量含む。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を少量含む。（掘方埋土）
	4	10YR4/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層粒～小ブロックを少量含む。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を含む。（掘方埋土）
	5	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層粒～小ブロックを中量含む。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を含む。炭化物粒（～φ 5 ㎜）を少量含む。（掘方埋土）
P31	1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	Ⅲ層粒～小ブロックを少量含む。マンガン粒を含む。炭化物粒（～φ 1 ㎜）を少量含む。（柱痕跡）
	2	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	Ⅲ層と粒～大ブロック状に斑状に混ざる。マンガン粒を含む。（掘方埋土）
P41	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	灰黄褐色粘土と斑状に混ざる。Ⅲ層粒を少量含む。炭化物粒（～φ 1 ㎝）を少量含む。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を含む。（柱痕跡）
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	褐灰色粘土・Ⅲ層を粒～小ブロック状に斑状含む。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を含む。（掘方埋土）
	3	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層・褐灰色粘土を粒～小ブロック状に斑状含む。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を含む。（掘方埋土）



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量（㎝）			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	C-1319	SI2510	掘方埋土	土師器	坏	－	－	(3.2)	口：ヨコナデ体：ヘラケズリ）	ヨコナデ	胎土緻密 砂粒少量含む	2-1
2	C-1320	SK2518	堆積土	土師器	（平瓶）	－	－	(3.4)	ヨコナデ	ヨコナデ	胎土緻密 砂粒含む　内外面に付着物（漆）	2-2
3	E-638	P1	堆積土	須恵器	平瓶	－	－	(4.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土緻密　内面に付着物（漆？）	2-3
－	Ic-19	P8	堆積土	陶器	甕	－	－	(4.7)	ケズリ→ナデ	ロクロナデ→ナデ	胎土緻密 砂粒多く含む（中世） 写真掲載のみ	2-4

図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量（㎝）			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
4	K-411	P13	堆積層	石製品	茶臼	20.2	22.5	12.4	上臼台座文様：菱形　臼面：摩耗により不明　上縁幅 2.1 ㎝　挽木孔径 3.8 ㎝　挽木孔深 5.0 ㎝ 供給孔径 4.2 ㎝　重さ 6600 g	2-6
－	N-160	P8	柱痕跡	鉄滓	－	4.9	4.0	2.6	19.3 g　写真掲載のみ	2-5

第 11 図　第 292 次調査出土遺物

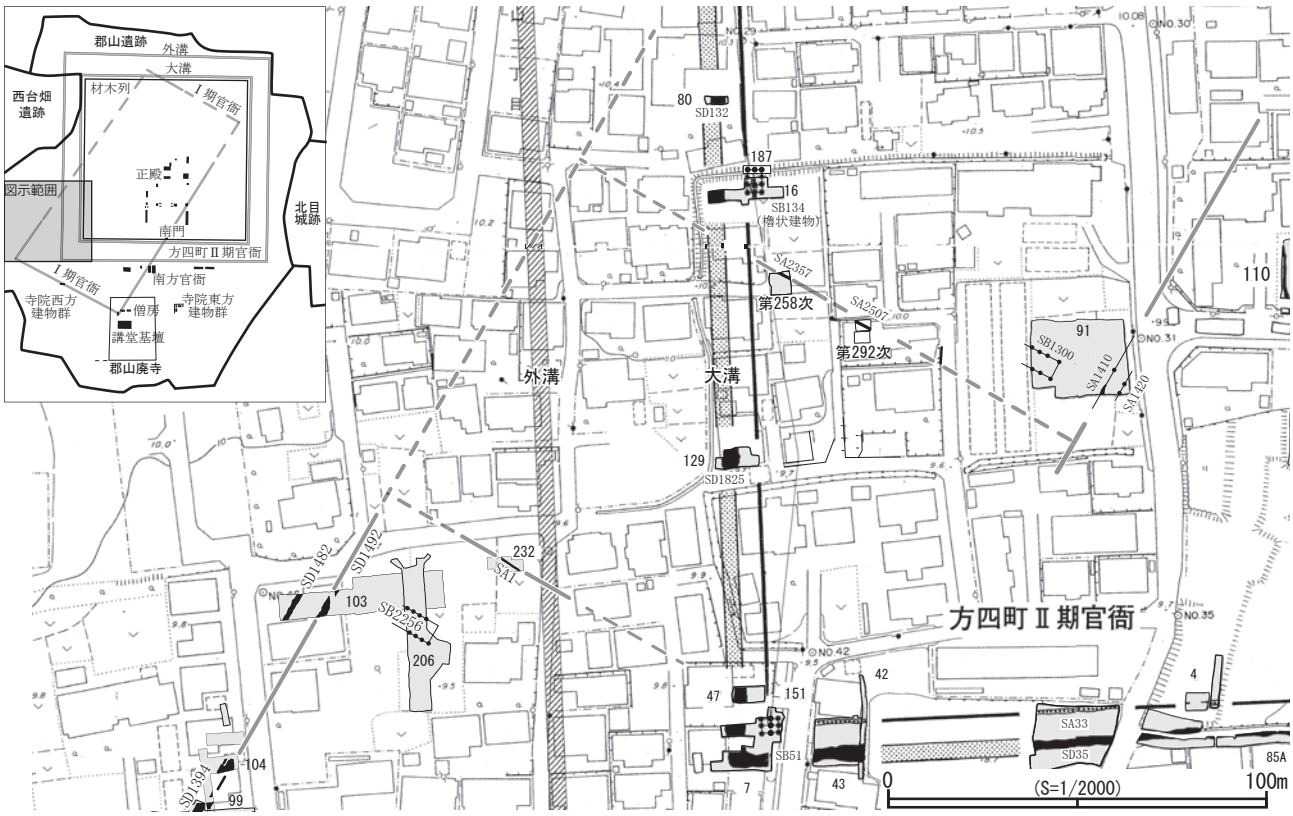
3. まとめ

今回の第292次調査区からは材木列跡が1列(SA2507)、竪穴住居跡が3軒(SI2508・2509・2510)、溝跡5条(SD2511～2515)、土坑3基（SK2516～2518)、性格不明遺構1基（SX2519)、ピット45基が検出された。主な遺構の重複関係から考えられる新旧関係は以下のとおりである。ただし、並列して表記した遺構が必ずしも同時期を示すものではない。

このうちSA2507材木列跡については、292次調査区の東側に位置する91次調査区で確認されているSA1410・1420材木列跡とほぼ直交する位置関係となる可能性が高い（第12図)。SA1410・1420材木列跡はⅠ期官衙の内部を区画していたと考えられ、SA2507材木列跡も同様に内部区画施設と推測される。SA1410・1420材木列跡に直交する材木列跡は、292次調査区の北西側に位置する258次調査区でSA2357材木列跡が確認されているが、SA2507材木列跡とは検出された位置に若干のずれがあるため、周辺での調査事例を待って同一の遺構であるかを判断する必要がある。SA2507材木列跡と重複関係にあり、それよりも新しいSI2508竪穴住居跡は、遺構の方向からⅡ期官衙に伴う可能性が考えられるが、詳細は不明である。

なお、ピットから漆が付着した須恵器の平瓶が出土しているが、周辺の43、91、265次調査区でも漆が付着した平瓶が出土しており、平瓶ではないが漆が付着した遺物は7、16、258次調査区でも確認されているため、周辺に漆を使用した施設等が存在していたと考えられる。また、漆の付着した土師器の口縁部破片も出土しており、265次調査で出土した漆付着の土師器平瓶と類似している。現時点で須恵器を模倣した土師器平瓶は265次調査出土の1例のみであり、類例として注目される。

今回の292次調査区ではⅠ期官衙の内部区画施設とみられる材木列跡や、それよりも新しい時期の竪穴住居跡のほか、掘立柱建物跡を構成する可能性が高い柱穴等が検出された。また、周辺に漆を使用した施設等が存在していたことを示す遺物が見つかった。官衙内部の様相を解明するため、今後も周辺での調査を進めていく必要がある。

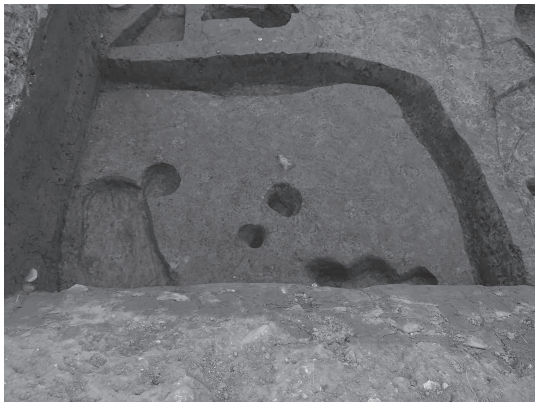


第 12 図　周辺調査区と遺構配置

1．北区遺構検出状況 (南から)

2．南区遺構検出状況 (南から)

3．SA2507 柱抜き取り痕検出状況 (東から)



4．SI2508 床面完掘状況 (北から)

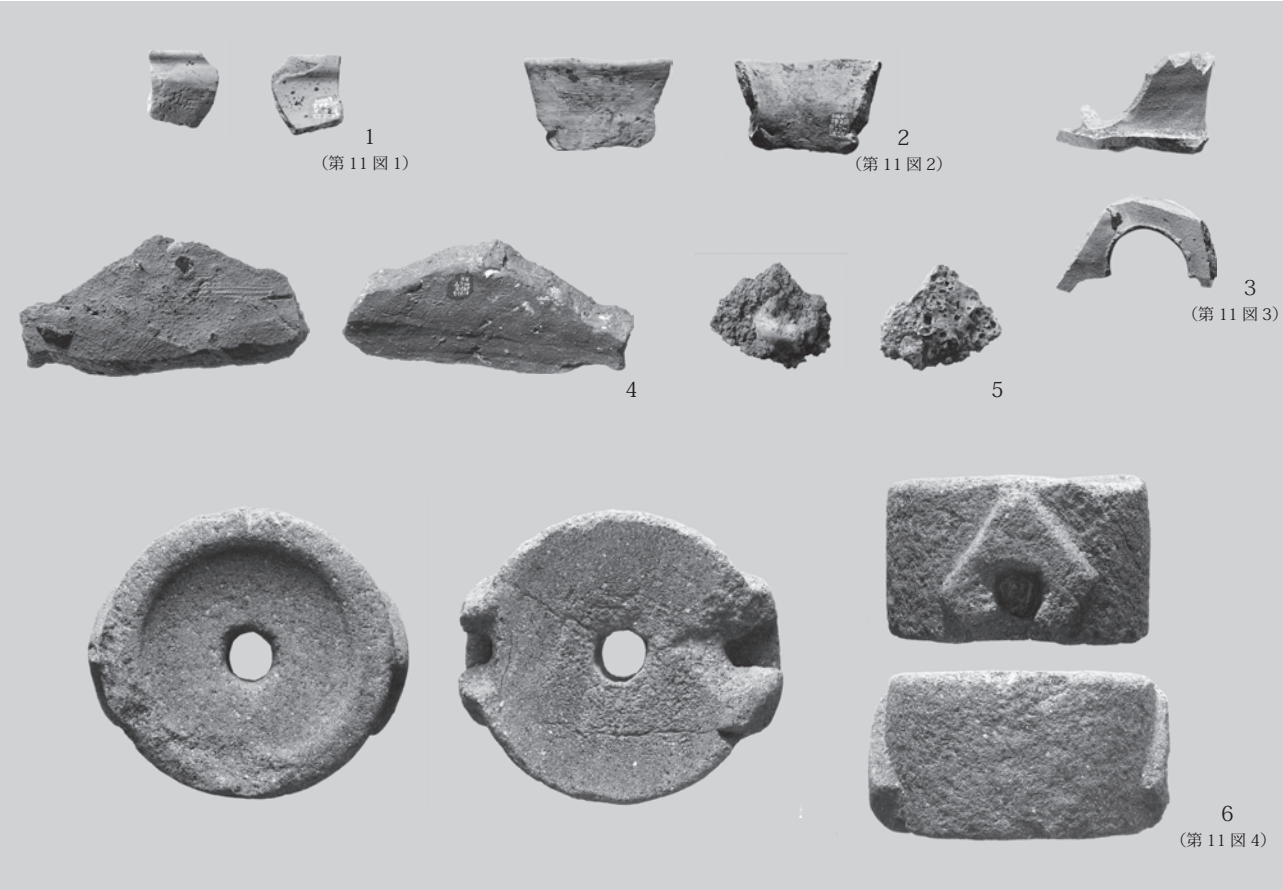
写真図版 1　第 292 次調査 (1)

1. 北区西～北壁断面（南東から）

2. 南区北壁断面（南から）

3. 北区遺構完掘状況（東から）

4. 南区遺構完掘状況（南から）



第 292 次調査出土遺物

写真図版 2　第 292 次調査 (2)

Ⅱ．　第 294 次発掘調査

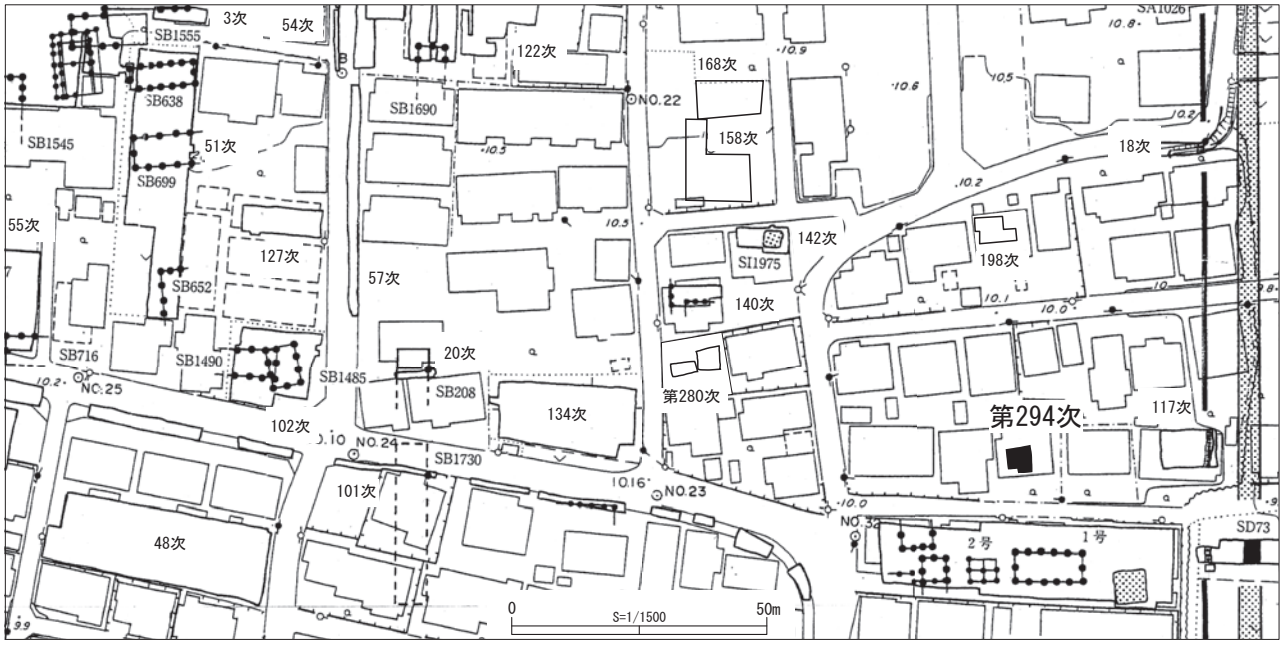
1．調査経過と調査方法

第 294 次調査は、個人住宅建築に伴う調査である。平成 31 年 2 月 4 日付けで申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（平成 31 年 2 月 6 日付 H30 教生文第 102-545 号で回答）に基づき実施した。

今回の調査地点は、郡山遺跡方四町Ⅱ期官衙の南東部に位置し、平成 10 年度に調査が行われた第 117 次調査区の西側に、昭和 54 年度に郡山遺跡で初めて調査が行われた調査区の北側にあたる。（第 2・14 図）

第 13 図　第 294 次調査区位置図

調査は平成 31 年 3 月 12 日に着手し、想定される遺構検出状況をもとに、建築予定範囲内に東西 5.0 m×南北 5.0 m（一部 4.0 m）の規模で調査区を設定した。重機により盛土および基本層Ⅰ・Ⅱ層まで掘り下げ、基本層Ⅲ層上面（GL － 0.5 ～ 0.6 m）で遺構検出作業を行った。遺構の記録は、平面図・断面図を S=1/20 で作製し、記録写真はデジタルカメラを用いて撮影した。また、調査の際に郡山座標（No.22）から基準点・水準点の移設を行った。3 月 27 日に調査を終了し、その後重機により埋戻しを行った。



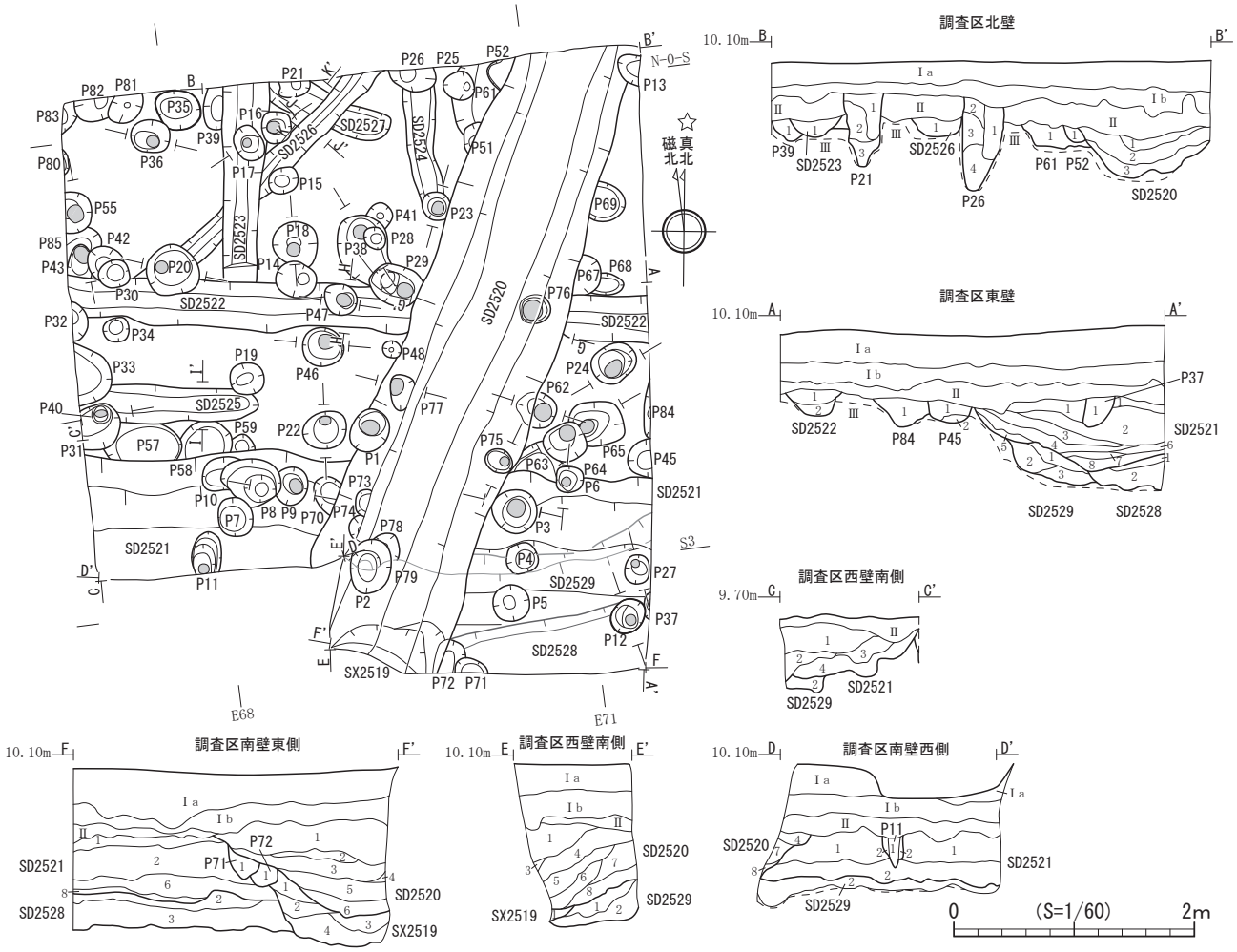
第 14 図　第 294 次調査区位置図

2．検出遺構と出土遺物

検出された遺構は、溝跡 10 条、性格不明遺構 1 基、ピット 78 基である。遺構検出面はⅢ層上面であるが、調査区壁断面の観察を行った結果、Ⅱ層上面から掘り込まれた遺構も少数存在することを確認している。また、各遺構および基本層中から土師器片や須恵器片、瓦などの遺物が出土している。

【SD2520 溝跡】

調査区の東側で検出された北東－南西方向の溝跡である。SD2521・2522・2528・2529 溝跡、SX2530 性格不明遺構、P3・P23・P29・P48・P51・P52・P61・P62・P63・P67・P69・P70・P71・P72・P73・P74・P75・P76・P77・P78・P79 より新しく、P1・P2・P13 より古い。規模は検出長が約 5.5 mで、調査区外にさらに延びる。方向は N － 22°－ E で、上端幅が 0.95 ～ 1.35 m、中端幅が 65 ～ 75 ㎝、下端幅が 35 ～ 45 ㎝で、断面形状は逆台形を呈する。遺構検出面から底面までの深さは 35 ～ 80 ㎝で、北から南へ深くなり、堆積土は最大で 8 層に分層された。遺物は土師器片や須恵器高台付坏（第 18 図 1）や平行叩きが施された丸瓦（第 18 図 2）のほか、礫が多量出土した。



遺構名	層位	土色	土性	備考
基本層	Ⅰa	10YR4/4 褐色	シルト	上部に砕石。炭化物粒（～φ 10 ㎜）を少量含む。
	Ⅰb	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	浅黄色シルト粒～小ブロックを少量含む。
	Ⅱ	10YR4/4 褐色	シルト	灰黄褐色シルトと斑状に混ざる。浅黄色シルト粒～小ブロックを含む。
	Ⅲ	10YR7/2 にぶい黄橙色	シルト質粘土	灰白色・褐灰色粘土を粒～中ブロック状に含む。
SD2520（G－G'）	1	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	黒色シルト質粘土・Ⅲ層が粒～大ブロック状に斑状に混ざる。マンガン粒を含む。炭化物粒（～φ 5 ㎜）を少量含む。
	2	10YR4/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層粒を少量含む。マンガン粒を含む。
	3	10YR4/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層粒～大ブロックを含む。部分的に灰白色粘土を薄層状に含む。
SD2520 北壁	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	Ⅲ層と粒～大ブロック状に斑状に混ざる。炭化物粒（～φ 5 ㎜）を微量含む。
	2	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	Ⅲ層粒を微量含む。マンガン粒を含む。
	3	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層を粒～中ブロック状（一部薄層状）に少量含む。マンガン粒を含む。
SD2520 南壁	1	10YR5/2 灰黄褐色	粘土質シルト	粒～小ブロック状に斑状に混ざる。
		10YR5/1 褐灰色	粘土質シルト	
		10YR7/2 にぶい黄橙色	シルト質粘土	
	2	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	褐灰色シルト質粘土と斑状に混ざる。Ⅲ層粒～小ブロックを少量含む。
	3	10YR5/2 灰黄褐色	シルト質粘土	褐灰色シルト質粘土と斑状に混ざる。Ⅲ層粒～小ブロックを少量含む。
	4	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	Ⅲ層・にぶい黄橙色シルト質粘土を粒～小ブロック状に少量含む。
	5	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	にぶい黄橙色シルト質粘土粒～小ブロックを斑状に含む。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を含む。Ⅲ層粒を微量含む。
	6	10YR4/1 褐灰色	粘土	褐灰色粘土と斑状に混ざる。灰黄色粘土を粒～小ブロック状に少量含む。酸化鉄粒を含む。
	7	10YR5/1 褐灰色	シルト質粘土	Ⅲ層粒を微量含む。マンガン粒を含む。
	8	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	Ⅲ層粒と酸化鉄粒とマンガン粒を含む。
SD2521 西壁	1	10YR5/2 灰黄褐色	粘土質シルト	灰黄褐色粘土質シルトが斑状に混ざる。マンガン粒を含む。Ⅲ層粒を微量含む。
	2	10YR5/2 灰黄褐色	シルト質粘土	粒～小ブロック状に斑状に混ざる。マンガン粒を含む。酸化鉄粒を含む。炭化物粒・焼土（～φ 5 ㎜）を微量含む。
		10YR5/3 にぶい黄褐色		
		10YR7/2 にぶい黄橙色		
	3	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	灰黄褐色粘土質シルトが斑状に混ざる。Ⅲ層粒を微量含む。マンガン粒を含む。
	4	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色粘土質シルトと斑状に混ざる。Ⅲ層粒～小ブロックを少量含む。炭化物粒（～φ 10 ㎜）を微量含む。
SD2521 東壁	1	10YR5/2 灰黄褐色	粘土質シルト	灰黄褐色粘土質シルトが斑状に混ざる。マンガン粒を含む。Ⅲ層粒を微量含む。
	2	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	灰黄褐色粘土質シルトが斑状に混ざる。Ⅲ層粒を微量含む。マンガン粒を含む。
	3	10YR5/2 灰黄褐色	シルト質粘土	粒～小ブロック状に斑状に混ざる。マンガン粒と酸化鉄粒を含む。炭化物粒・焼土（～φ 5 ㎜）を微量含む。
		10YR5/3 にぶい黄褐色		
		10YR7/2 にぶい黄橙色		
	4	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色粘土質シルトと斑状に混ざる。Ⅲ層粒～小ブロックを少量含む。炭化物粒（～φ 10 ㎜）を微量含む。
	5	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土	Ⅲ層と粒～小ブロック状に斑状に混ざる。マンガン粒を含む。
	6	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	褐灰色粘土粒～小ブロックを含む。Ⅲ層粒を含む。
	7	10YR4/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層粒を微量含む。炭化物粒・焼土（～φ 10 ㎜）を少量含む。
	8	10YR4/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層粒を少量含む。炭化物粒・焼土（～φ 10 ㎜）を少量含む。

第 15 図　第 294 次調査区平面・断面図

【SD2521 溝跡】

調査区の南側で検出された東西方向の溝跡である。SD2528・2529 溝跡、P31・P57・P58・P59・P63 より新しく、SD2520 溝跡、SX2530 性格不明遺構、P3・P4・P5・P6・P7・P8・P9・P10・P11・P12・P27・P37・P70・P71・P72 より古い。規模は検出長が約 4.75 mで、調査区外にさらに延びる。方向はN－87°－Wで、上端幅が 1.7 m以上、中端幅・下端幅は不明で、断面形状は不明である。遺構検出面から底面までの深さは約 60 ㎝で、堆積土は最大で 8 層に分層された。遺物は須恵器甕（第 18 図 3）や、石錘（第 18 図 4）、土師器片などが出土している。

【SD2522 溝跡】

調査区の中央部で検出された東西方向の溝跡である。SD2523・2526 溝跡、P42・P43・P47・P67 より新しく、SD2520 溝跡、P14・P20・P29・P30・P32 より古い。規模は検出長が約 4.8 mで、調査区外にさらに延びる。方向はN－2°－Wで、上端幅が 30 ～ 40 ㎝、下端幅が 10 ～ 15 ㎝で、断面形状は上部が開く皿形を呈する。遺構検出面から底面までの深さは約 20 ㎝で、堆積土は 2 層に分層された。遺物は土師器片が出土している。

【SD2523 溝跡】

調査区の北西側で検出された南北方向の溝跡である。SD2526・2527 溝跡、P39 より新しく、SD2522 溝跡、P16・P17 より古い。規模は検出長が約 1.7 mで、北側の調査区外にさらに延びる。方向はN－2°－Eで、上端幅が 27 ～ 40 ㎝、下端幅が 10 ～ 15 ㎝で、断面形状は皿形を呈する。遺構検出面から底面までの深さは約 15 ㎝で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

【SD2524 溝跡】

調査区の北東側で検出された南北方向の溝跡である。P23・P26 より古い。規模は検出長が約 95 ㎝で、北側の調査区外にさらに延びると推測される。方向はN－6°－Wで、上端幅が 20 ～ 25 ㎝、下端幅が 10 ～ 15 ㎝で、断面形状は浅い皿形を呈する。遺構検出面から底面までの深さは約 5 ㎝で、堆積土は単層である。遺物は土師器片が出土している。

【SD2525 溝跡】

調査区の南西側で検出された東西方向の溝跡である。P57・P58 より新しく、P19・P31・P33・P44 より古い。規模は検出長が約 1.25 mで、西側の調査区外にさらに延びると推測される。方向はN－87°－Wで、上端幅が 25 ～ 30 ㎝、下端幅が 10 ～ 15 ㎝で、断面形状は浅い皿形を呈する。遺構検出面から底面までの深さは約 7 ㎝で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

【SD2526 溝跡】

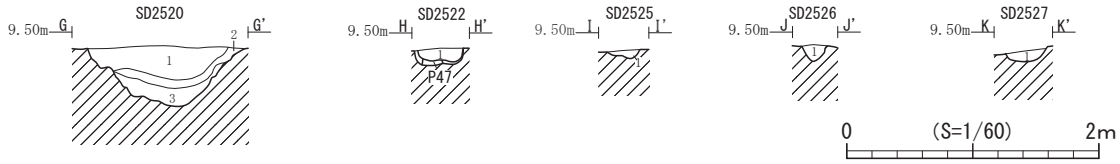
調査区の北西側で検出された北東－南西方向の溝跡である。SD2527 溝跡より新しく、SD2522・2523 溝跡、P15･P16･P20 より古い。規模は検出長が約 2.4 mで､北東側の調査区外にさらに延びる。方向はN－43°－Eで、上端幅が 18 ～ 23 ㎝、下端幅が 3 ～ 7 ㎝で、断面形状は上部が開くU字形を呈する。遺構検出面から底面までの深さは約 15 ㎝で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

【SD2527 溝跡】

調査区の北側で検出された北西－南東方向の溝跡である。SD2523・2526 溝跡、P21 より古い。規模は検出長が約 1.0 mで､北西側の調査区外にさらに延びる。方向はN－64°－Wで､上端幅が 25 ～ 30 ㎝､下端幅が約 15 ㎝で、断面形状は皿形を呈する。遺構検出面から底面までの深さは約 10 ㎝で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

【SD2528 溝跡】

調査区の南東側で検出された北東－南西方向の溝跡である。SD2529 溝跡より新しく、SD2520・2521 溝跡、



遺構名	層位	土色	土性	備考
SD2522	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	Ⅲ層とブロック状に斑状に混ざる。
SD2522 東壁	1	10YR5/1 褐灰色	粘土質シルト	Ⅲ層粒を少量含む。
	2	10YR5/2 灰黄褐色	粘土質シルト	Ⅲ層と粒～小ブロック状に斑状混ざる。
SD2523	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	Ⅲ層とブロック状に斑状に混ざる。炭化物粒（～φ 10 ㎜）を微量含む。
SD2524	1	10YR5/1 褐灰色	粘土質シルト	斑状に混ざる。
		10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	
		10YR7/2 にぶい黄橙色	シルト質粘土	
SD2525	1	10YR5/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層と斑状に混ざる。
SD2526	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	Ⅲ層と斑状に混ざる。
SD2527	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	Ⅲ層と斑状に混ざる。
SD2528	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	斑状に混ざる。Ⅲ層粒～小ブロックを含む　炭化粒・焼土（～φ 5 ㎜）を含む。
		10YR4/2 灰黄褐色	粘土	
	2	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	斑状に混ざる。Ⅲ層粒（一部層下部では薄層状）を少量含む。炭化粒・焼土（～φ 20 ㎜）をやや多量含む。
		10YR4/1 褐灰色	粘土	
SD2529	1	10YR5/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層が粒～小ブロック状に斑状に混ざる。マンガン粒を含む。
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層と粒～大ブロック状に斑状に混ざる。マンガン粒を含む。酸化鉄粒を含む。
	3	10YR4/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層粒～大ブロックを含む。炭化粒・焼土（～φ 5 ㎜）を微量含む。マンガン粒と酸化鉄粒を含む。
SX2530	1	10YR5/1 褐灰色	粘土	灰黄褐色粘土と斑状に混ざる。Ⅲ層粒を微量含む。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を含む。
	2	10YR5/1 褐灰色	粘土	灰黄褐色粘土粒～小ブロックを含む。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を含む。
	3	10YR5/1 褐灰色	粘土	褐灰色粘土を斑状に含む。Ⅲ層粒～小ブロックを少量含む。マンガン粒と酸化鉄粒を含む。
	4	10YR5/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層粒を微量含む。マンガン粒を多量含む。
P11	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	Ⅲ層粒を少量含む。（柱痕跡）
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	Ⅲ層粒～小ブロックを少量含む。炭化物粒（～φ 5 ㎜）を微量含む。（掘方埋土）
P21	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	Ⅲ層粒を少量含む。炭化粒（～φ 5 ㎜）を微量含む。（柱痕跡？）
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	Ⅲ層と粒～大ブロック状に斑状に混ざる。炭化粒（～φ 5 ㎜）を微量含む。マンガン粒を含む。（掘方埋土）
	3	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	Ⅲ層粒～中ブロックを少量含む。マンガン粒を含む。（掘方埋土）
P26	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	褐灰色粘土質シルト・Ⅲ層とブロック状に斑状に混ざる。（柱痕跡）
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	Ⅲ層粒～中ブロックを少量含む。（掘方埋土）
	3	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	褐灰色粘土質シルトと斑状に混ざる。Ⅲ層を粒～中ブロック状に少量含む。（掘方埋土）
	4	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	Ⅲ層粒～小ブロックを少量含む。（掘方埋土）
P37	1	10YR5/1 褐灰色	粘土質シルト	Ⅲ層粒～小ブロックを少量含む。
P39	1	10YR5/2 灰黄褐色	シルト質粘土	Ⅲ層粒～小ブロックを中量含む。
P45	1	10YR5/1 褐灰色	粘土質シルト	Ⅲ層粒を含む。
	2	10YR5/1 褐灰色	粘土質シルト	Ⅲ層と斑状に混ざる。
P52	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	Ⅲ層と粒～小ブロック状に斑状に混ざる。
P61	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	Ⅲ層と斑状に混ざる。
P71	1	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	Ⅲ層粒～小ブロックを含む。炭化粒・焼土（～φ 5 ㎜）を少量含む。
P72	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層粒～小ブロックを微量含む。
P84	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	Ⅲ層と粒～小ブロック状に斑状に混ざる。　酸化鉄粒を含む。

第 16 図　溝跡断面図

SX2530 性格不明遺構より古い。規模は検出長が約 1.7 ｍで、調査区外にさらに延びる。方向はＮ－ 79°－Ｅで、上端幅が 60 ㎝以上、下端幅が 50 ㎝以上で、断面形状は不明である。遺構検出面から底面までの深さは 30 ㎝以上で、確認されている堆積土は 2 層である。遺物は土師器片が出土している。

【SD2529 溝跡】

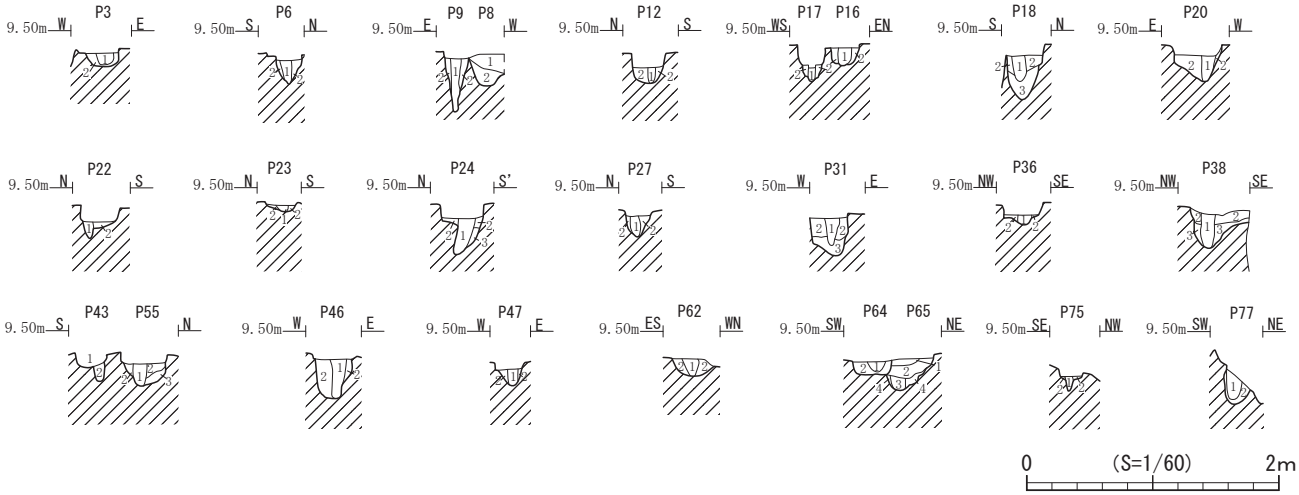
調査区の南東側で検出された東西方向の溝跡である。P78・P79 より新しく、SD2520・2521・2528 溝跡、SX2530 性格不明遺構より古い。規模は検出長が約 2.6 ｍで、調査区外にさらに延びる。方向はＮ－ 62°－Ｅで、上端幅が 75 ㎝以上、下端幅が 50 ㎝以上で、断面形状は不明である。遺構検出面から底面までの深さは約 30 ㎝で、確認されている堆積土は 3 層である。遺物は出土していない。

【SX2530 性格不明遺構】

調査区の南側で検出された。SD2521・2528・2529 溝跡より新しく、SD2520 溝跡、P72 より古い。規模は東西 1 ｍ以上、南北 40 ㎝以上であり、平面形は円形を基調としたものと推測される。深さは 50 ㎝以上で、断面形状は不明である。確認されている堆積土は 4 層である。遺物は土師器片と須恵器片が出土している。

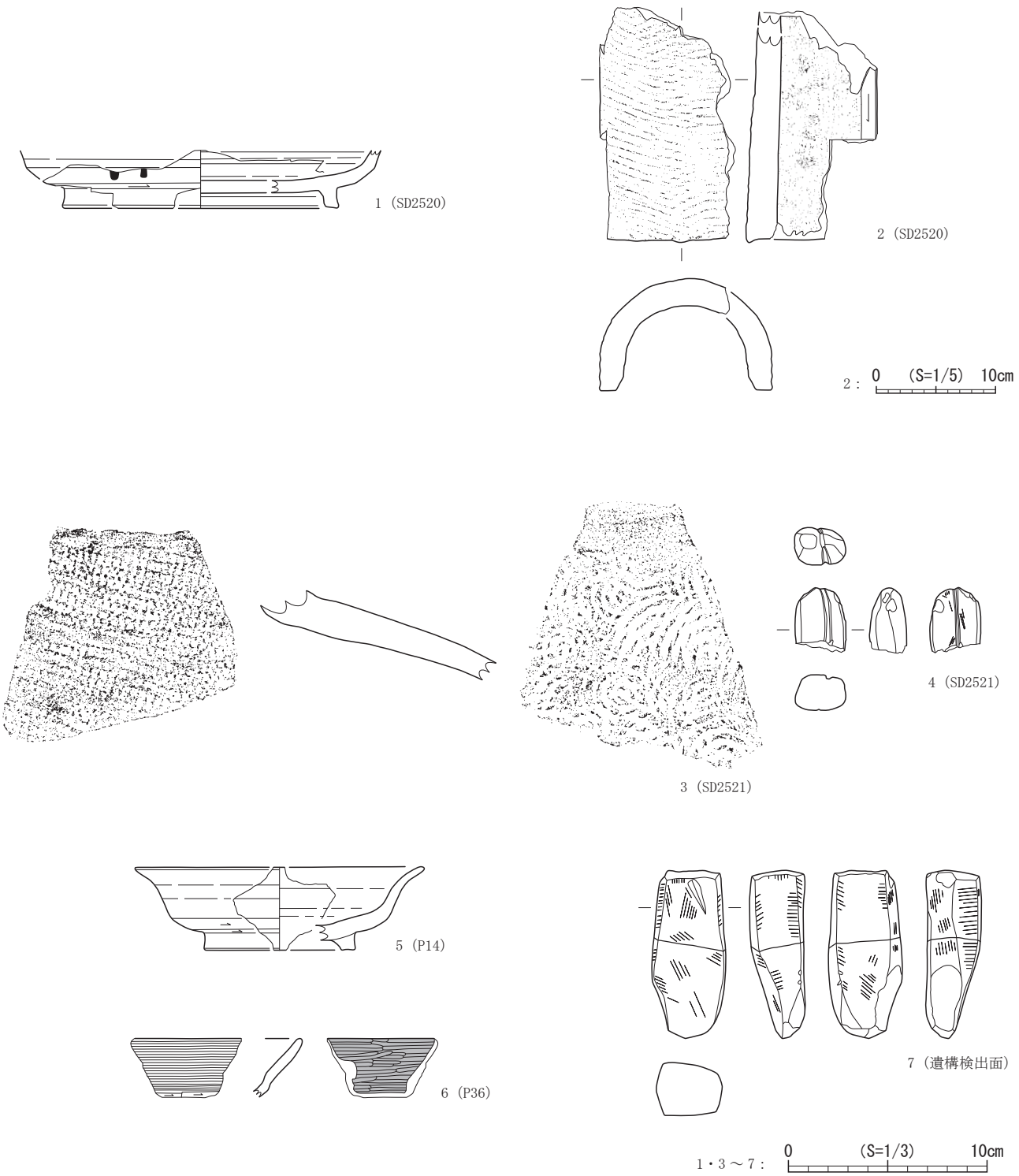
【ピット】

今回の調査では計 78 基のピットが検出されており、うち 5 基はⅡ層上面から掘り込まれていることを確認している。平面形状は円形や楕円形を基調としたものが主体であり、直径は 15 ～ 65 ㎝である。柱痕跡が検出された



部位	層位	土色	土性	備考
P3	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	灰白色粘土質シルト粒をやや多量含む。マンガン粒を含む。（柱痕跡）
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層粒を少量含む。（掘方埋土）
P6	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	灰白色粘土質シルト粒を少量含む。炭化粒（～φ 0.5 ㎜）を微量含む。（柱痕跡）
	2	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	灰白色シルト質粘土粒を微量含む。マンガン粒を含む　酸化鉄粒を含む。（掘方埋土）
P8	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	Ⅲ層粒～小ブロックを微量含む。焼土（～φ 10 ㎜）を微量含む。酸化鉄粒を含む。
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	Ⅲ層粒を極微量含む。
P9	1	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	Ⅲ層粒を微量含む。マンガン粒を含む。（柱痕跡）
	2	10YR5/1 褐灰色	粘土質シルト	Ⅲ層粒～小ブロックを少量含む。（掘方埋土）
P12	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	淡黄色粘土粒を微量含む。マンガン粒を含む。（柱痕跡）
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	灰黄褐色粘土粒～小ブロックを中量含む。（掘方埋土）
P16	1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	Ⅲ層粒～小ブロックを少量含む。炭化粒（～φ 5 ㎜）を微量含む。（柱痕跡）
	2	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	Ⅲ層粒～中ブロックを中量含む。（掘方埋土）
P17	1	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	Ⅲ層粒を少量含む。マンガン粒を含む。炭化粒（～φ 5 ㎜）を少量含む。（柱痕跡）
	2	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	Ⅲ層粒～中ブロックをやや多量斑状に含む。（掘方埋土）
P18	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	Ⅲ層粒～小ブロックをやや多量含む。（柱痕跡）
	2	10YR4/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層粒～小ブロックを斑状にやや多量含む。マンガン粒を含む。（掘方埋土）
	3	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	Ⅲ層と斑状に混ざる。（掘方埋土）
P20	1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	Ⅲ層粒を中量含む。炭化粒（～φ 5 ㎜）を微量含む。（柱痕跡）
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	Ⅲ層と粒～中ブロック状に斑状に混ざる。マンガン粒を含む。酸化鉄粒を含む。（掘方埋土）
P22	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	Ⅲ層粒～小ブロックを少量含む。マンガン粒を含む。（柱痕跡）
	2	10YR5/2 灰黄褐色	粘土質シルト	Ⅲ層と斑状に混ざる。（掘方埋土）
P23	1	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	Ⅲ層と斑状に混ざる。（柱痕跡）
	2	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	Ⅲ層と斑状に混ざる。（掘方埋土）
P24	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	Ⅲ層粒を少量含む。炭化粒（～φ 5 ㎜）を微量含む。酸化鉄粒を含む。（柱痕跡）
	2	10YR5/1 褐灰色	シルト質粘土	Ⅲ層と斑状に混ざる。（掘方埋土）
	3	10YR4/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層と粒～中ブロック状に斑状に混ざる。（掘方埋土）
P27	1	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	Ⅲ層粒を微量含む。炭化粒・焼土（～φ 5 ㎜）を少量含む。（柱痕跡）
	2	10YR5/1 褐灰色	粘土質シルト	Ⅲ層粒を微量含む。マンガン粒を含む。酸化鉄粒を含む。（掘方埋土）
P31	1	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	Ⅲ層粒を少量含む。炭化粒（～φ 5 ㎜）を少量含む。（柱痕跡）
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	灰黄褐色粘土質シルト・Ⅲ層が粒～中ブロック状に斑状に混ざる。マンガン粒を含む。（掘方埋土）
	3	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	褐灰色粘土・Ⅲ層とブロック状に斑状に混ざる。（掘方埋土）
P36	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層粒を少量含む。炭化粒（～φ 5 ㎜）を微量含む。（柱痕跡）
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層と斑状に混ざる。（掘方埋土）
P38	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	Ⅲ層粒を少量含む。マンガン粒を含む。炭化粒（～φ 5 ㎜）を微量含む。（柱痕跡）
	2	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	Ⅲ層と粒～小ブロック状に斑状に混ざる。（掘方埋土）
	3	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層と斑状に混ざる　マンガン粒を含む。（掘方埋土）
P43	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層粒を少量含む。（抜取り？）
	2	10YR3/2 黒褐色	粘土	Ⅲ層粒を少量含む。（柱痕跡）
P46	1	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	Ⅲ層粒をやや多量斑状に含む。炭化粒（～φ 5 ㎜）を少量含む。（柱痕跡）
	2	10YR5/1 褐灰色	粘土質シルト	褐灰色粘土質シルト・Ⅲ層と斑状に混ざる。マンガン粒を含む。（掘方埋土）
P47	1	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	Ⅲ層粒～小ブロックを少量含む。炭化粒（～φ 0.5 ㎜）を微量含む。（柱痕跡）
	2	10YR5/1 褐灰色	シルト質粘土	Ⅲ層と斑状に混ざる。（掘方埋土）
P55	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層粒が多量斑状に混ざる。（柱痕跡）
	2	10YR4/1 褐灰色	粘土	Ⅲ層粒～小ブロックが斑状に混ざる。（掘方埋土）
	3	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	Ⅲ層と粒～中ブロック状に斑状に混ざる。（掘方埋土）
P62	1	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	Ⅲ層粒を中量含む　酸化鉄粒を含む。（柱痕跡）
	2	10YR5/1 褐灰色	シルト質粘土	Ⅲ層と斑状に混ざる。（掘方埋土）
P64	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	Ⅲ層粒～大ブロックを含む。マンガン粒を含む。（柱痕跡）
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	Ⅲ層粒～小ブロックを少量含む。マンガン粒を含む。（掘方埋土）
P65	1	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	Ⅲ層粒を少量含む。マンガン粒を含む。（抜取り？）
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	Ⅲ層と斑状に混ざる。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を含む。（抜取り？）
	3	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	Ⅲ層粒を少量含む。酸化鉄粒を含む。炭化粒（～φ 1 ㎜）を少量含む。（柱痕跡）
	4	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	Ⅲ層粒～小ブロックを少量含む。酸化鉄粒を含む。マンガン粒を含む。（掘方埋土）
P75	1	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	Ⅲ層粒を微量含む。（柱痕跡）
	2	10YR5/1 褐灰色	シルト質粘土	Ⅲ層と斑状に混ざる。（掘方埋土）
P77	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	Ⅲ層粒を少量含む。炭化粒（～φ 5 ㎜）を微量含む。マンガン粒を含む。（柱痕跡）
	2	10YR5/2 灰黄褐色	シルト質粘土	褐灰色シルト質粘土・Ⅲ層と斑状に混ざる。（掘方埋土）

第 17 図　ピット断面図



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量（cm）			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	E-644	SD2520	堆積土	須恵器	高台付坏	—	(13.8)	(2.9)	体：ロクロナデ 体下端・底：回転ヘラケズリ 高台：ナデ 体：墨書？	ロクロナデ	胎土緻密 砂粒含む	4-1
3	E-643	SD2521	堆積土	須恵器	甕	—	—	(4.5)	平行タタキ目（二方向）	当て具痕（同心円文）		4-3
5	E-639	P14	堆積土	須恵器	高台付坏	(14.4)	(7.5)	4.2	体：ロクロナデ 体下端：回転ヘラケズリ	ロクロナデ	胎土緻密 砂粒含む	4-4
6	C-1321	P36	堆積土	土師器	坏	—	—	(2.9)	口：ヨコナデ体：手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	胎土緻密 砂粒含む	4-5

図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量（cm）			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
2	F-126	SD2520	堆積土	瓦	丸瓦	(19.7)	(11.0)	2.3	凸面：平行叩き目→一部ケズリ　凹面：糸切り痕→布目痕→一部ナデ　胎土：緻密　砂粒を含む 断面形：半円形　側縁：分割後凹面面取り	4-2
4	K-414	SD2521	堆積土	石製品	石錘	(3.3)	2.6	1.8	石材：凝灰岩	4-6
7	K-412	遺構検出面	—	石製品	砥石	8.5	3.7	2.7	砥面が 4 面認められる。B 面と D 面に横方向の粗い擦痕が観察される。重さ 125.1g　石材：砂粒砂岩	4-8
—	K-413	P 79	堆積土	礫	小玉石	2.0	1.5	0.75	重さ :35 g　写真掲載のみ	4-7

第 18 図　第 294 次出土遺物

ピットは30基であり、直径7～15㎝の小規模な柱痕跡が確認されているが、建物跡などを構成するか否かは不明瞭である。遺物は須恵器の高台付坏（P14出土･第18図5）や、土師器坏（P36出土･第18図6)、小玉石（P79出土・写真4-7）などが出土している。

3. まとめ

今回の第294次調査区からは溝跡が10条（SD2520～2529)、性格不明遺構が1基（SX2530)、ピットが78基検出された。主な遺構の重複関係から考えられる新旧関係は以下のとおりである。

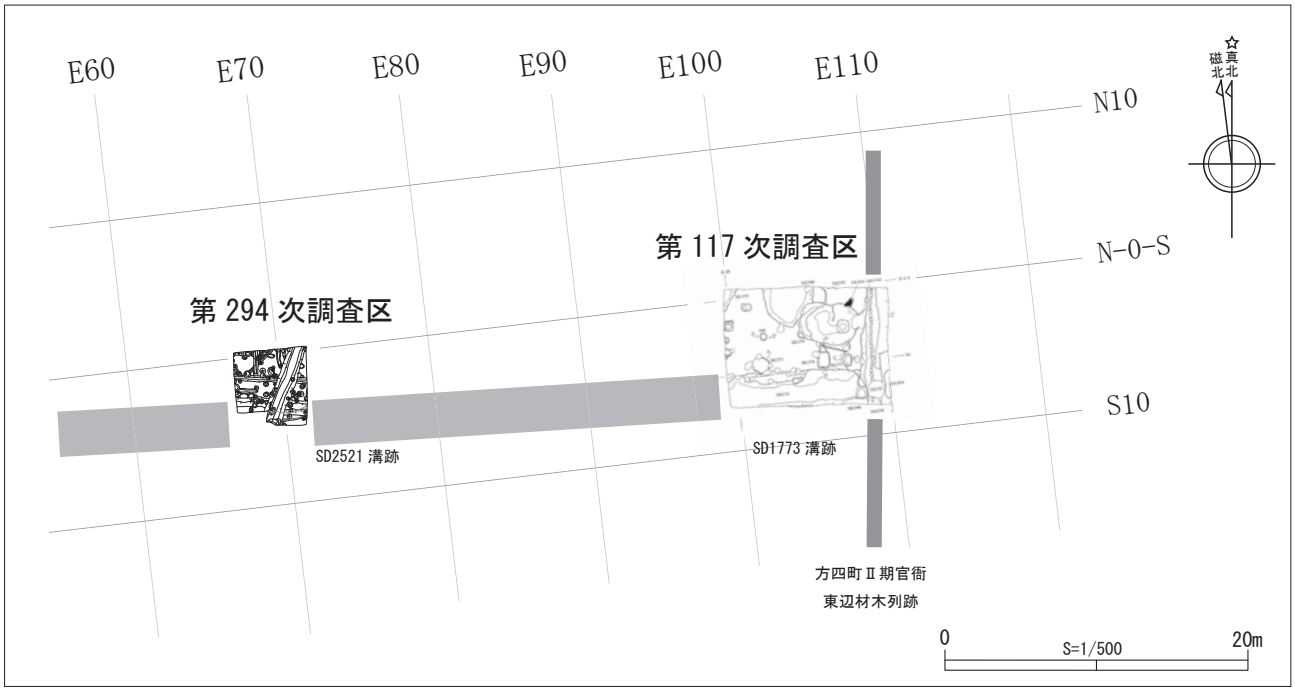
古　SD2529 → SD2528 → SD2521 → SX2530 → SD2520　新

このうちSD2521溝跡については東側に位置する117次調査区で検出されているSD1773溝跡の延長線上に位置している（第19図）。SD1773溝跡は方四町Ⅱ期官衙の東辺材木列跡（SA1770）に直角となり、材木列の掘方と接する箇所で途切れるような形状であることから、Ⅱ期官衙の遺構と考えられている溝跡である。位置関係からSD2521溝跡は同一の溝跡である可能性が考えられるが、溝の断面形状等の点で違いがみられるため、今後周辺での調査事例を待って検討していく必要がある。

その他の溝跡については官衙に伴う溝跡であるかは不明であるが、SD2520溝跡からは平行叩きが施された丸瓦（第18図2）が出土している。郡山遺跡における平行叩きが施された丸瓦の出土例は少なく、これまでに報告書に掲載されたものはF-27(第35次調査)、F-001(第180次調査)のみである。なお、今回出土した瓦と類似した特徴を有する丸瓦が大蓮寺窯跡第2次調査で出土(Fb－3)している。

また、本調査区では小規模な柱痕跡を有する柱穴が密集して検出されたが、同様の状況は近隣の第117次調査区でも確認されており、官衙期以降の遺構の存在が考えられている。本調査区内における建物構成は不明であったが、同様の可能性を想定しておきたい。

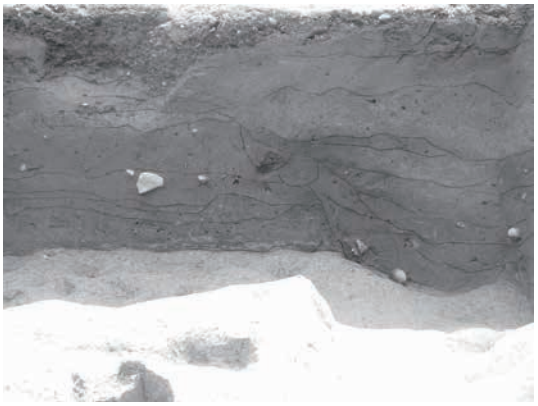
今回の第294次調査区ではⅡ期官衙の遺構の可能性がある溝跡のほか、時期不明の溝跡や、小規模な柱痕跡を有する柱穴等が検出された。官衙内の縁辺部の様相を解明するため、今後も周辺での調査を進めていく必要がある。



第19図　周辺調査区と遺構配置図

1. 調査区遺構検出状況（北から）

2. SD2520 溝跡完掘状況（南から）


3. 調査区南壁東側断面（北から）

4. 調査区北壁東側断面（南から）

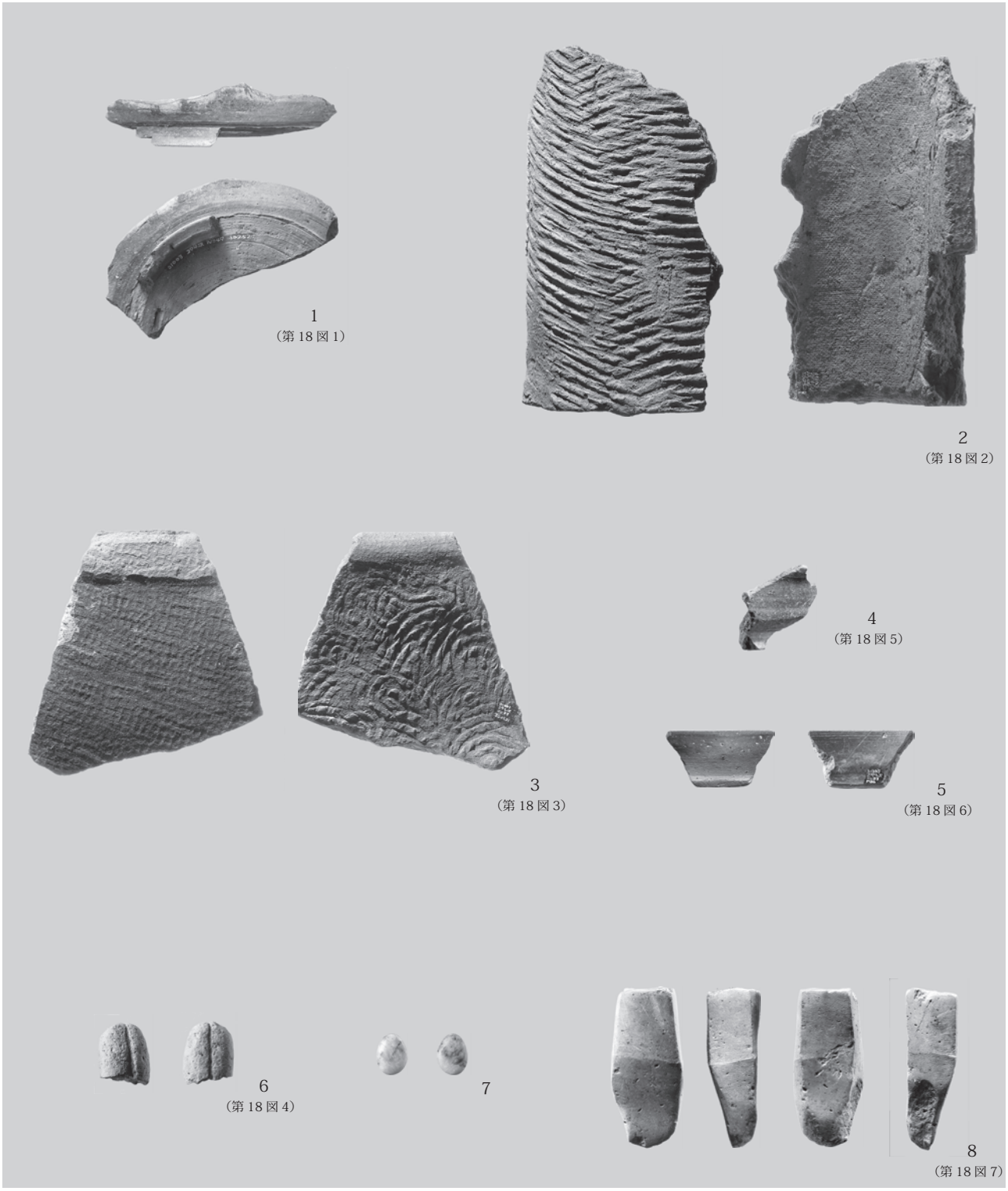
5. SD2521 溝跡完掘状況（東から）

6. SD2528 溝跡完掘状況（東から）

7. 調査区東壁南側断面（西から）

8. 調査区遺構完掘状況（北から）

写真図版 3　第 294 次調査



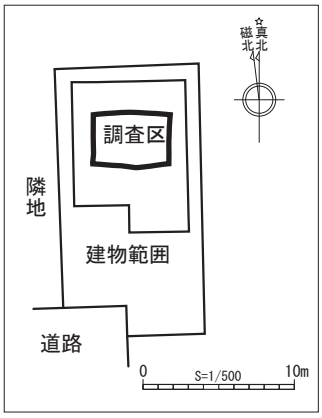
写真図版 4　第 294 次出土遺物

Ⅲ．第 295 次発掘調査

１．調査経過と調査方法

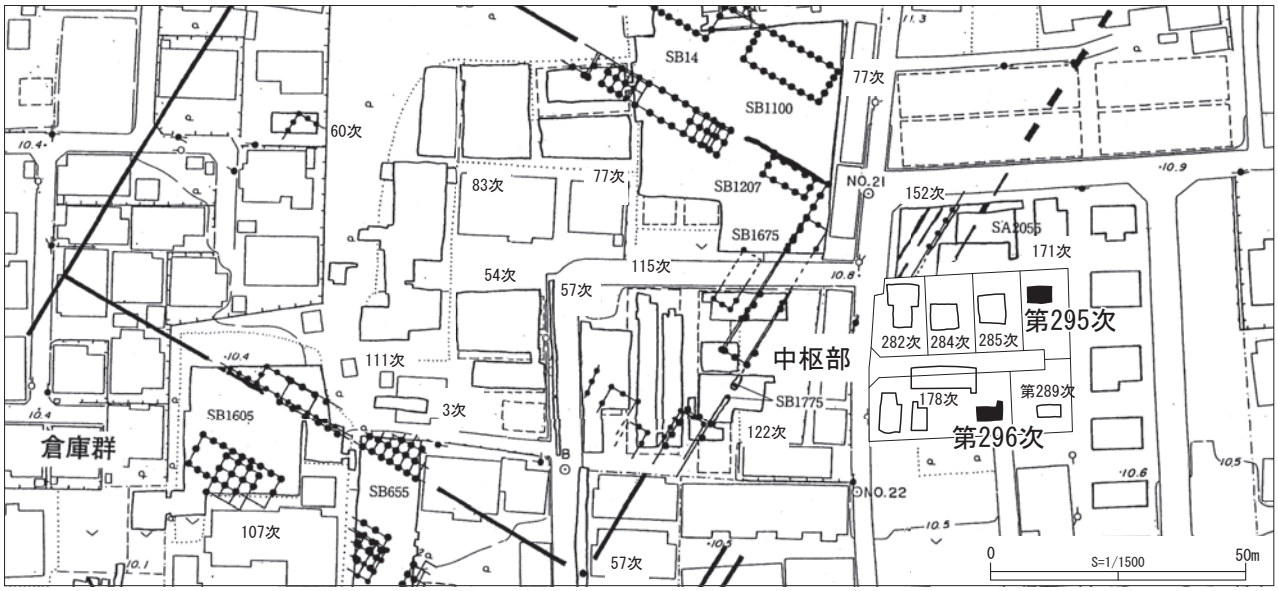
第 295 次調査は、個人住宅建築に伴う発掘調査である。申請者より平成 31 年 2 月 22 日付で提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（平成 31 年 2 月 27 日付 H30 教生文第 102-586 号で通知）に基づき実施した。

今回の調査地点は、郡山遺跡Ⅰ期官衙中枢部の前面（東面）付近に位置する。平成 30 年度に調査が行われた第 282・284・285 次調査区の東側に、第 289 次調査の北側に位置する。（第 2・21 図）



第 20 図　第 295 次調査区配置図

調査は令和元年 6 月 4 日に着手し、建築範囲内に 3.5m × 5m の規模で調査区を設定した。重機で盛土およびⅠ～Ⅳ層を除去後、Ⅴ層上面（GL － 1.2 ～ 1.3m）で遺構検出作業を行い、溝跡 1 条とピット 6 基を確認した。遺構の調査終了後、調査区平面図（1/40）、断面図（1/20）を作製し、記録写真はデジタルカメラで撮影し、6 月 5 日に複数回の転圧をかけながら重機による埋戻しを行い、調査を終了した。



第 21 図　第 295・296 次調査区位置図

２．検出遺構と出土遺物

今回の調査では、Ⅴ層上面で溝跡 1 条とピット 6 基を検出した。遺物は溝跡から土師器片などが出土しているが、小破片のため図化はできなかった。

【SD2531 溝跡】

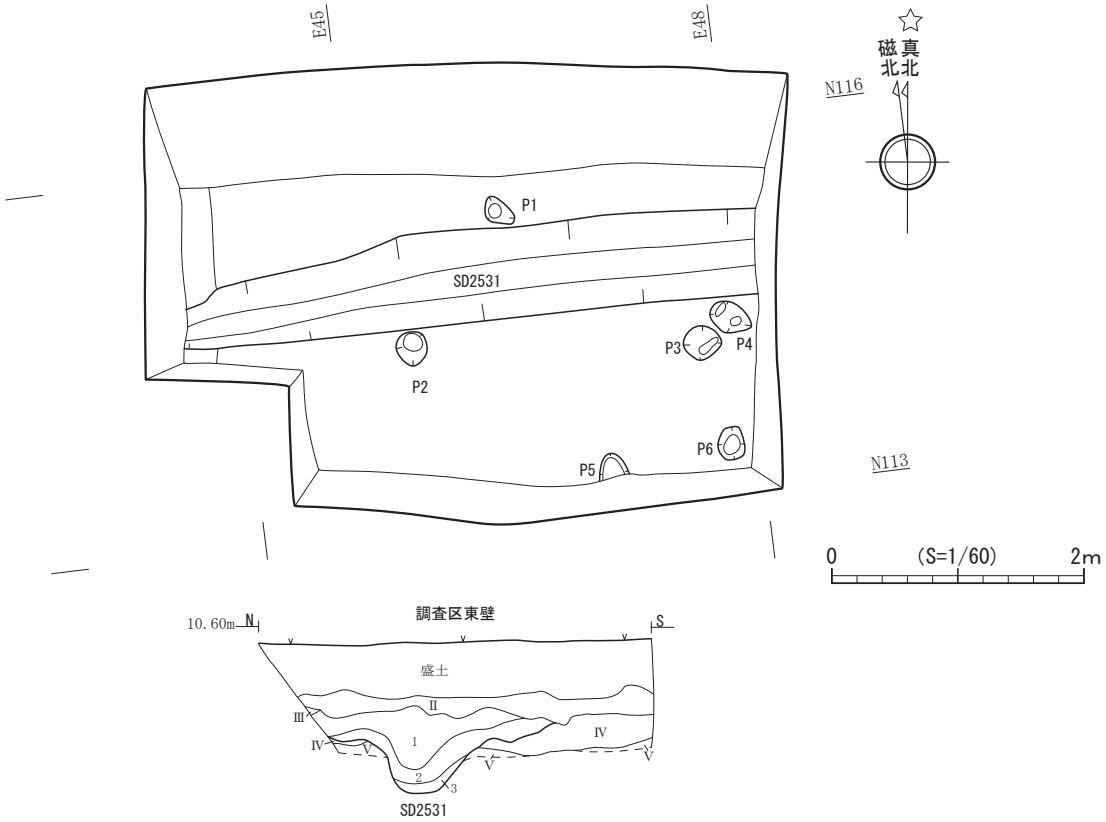
調査区の中央部で検出した東西方向の溝跡で、調査区外へ延びている。検出長は 4.6 m、上端幅は 50 ～ 73 ㎝、下端幅は 14 ～ 24 ㎝である。深さは 30 ～ 34 ㎝で、断面形は逆台形状である。調査区東壁の断面観察からⅣ層上面から掘り込まれていることが確認された。Ⅳ層上面からの深さは 70 ㎝である。堆積土は 3 層に分層された。黒褐色粘土を主体としている。遺物は土師器片が出土している。

【ピット】

ピットは 6 基検出された。平面形は円形が多く、規模は径が 14 ～ 34 ㎝、深さが 9 ～ 23 ㎝である。建物跡や柱列跡を構成するような配列は確認されなかった。柱痕跡を有するピットは確認されなかった。

3．まとめ

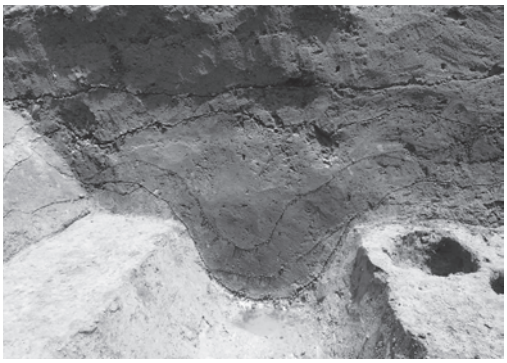
今回の調査地点は、郡山遺跡のⅠ期官衙東辺の東側に位置する。今回の調査では、Ⅴ層上面で溝跡１条とピット６基を確認した。遺構の規模や位置関係、出土遺物などの状況から、いずれの遺構も官衙に関連する遺構ではないと考えられる。



遺構名	層位	土色	土性	備考
基本層	Ⅰ	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化物粒を微量含む。酸化鉄粒を微量含む。調査区北壁で確認。
	Ⅱ	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	炭化物粒を微量含む。層下部に酸化鉄斑を含む。
	Ⅲ	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	炭化物を微量含む。酸化鉄を微量含む。
	Ⅳ	10YR2/3 黒褐色	粘土	Ⅱ層小ブロック・粒を少量含む。
	Ⅴ	10YR5/6 黄褐色	粘土	黒褐色土斑を少量含む。
SD2531	1	10YR2/2 黒褐色	粘土	
	2	10YR2/3 黒褐色	粘土	黄褐色粘土粒を少量含む。
	3	10YR3/2 黒褐色	粘土	黄褐色粘土粒を少量含む。黄褐色粘土ブロックをやや多く含む。

第 22 図　第 295 次調査区平面・断面図

１．遺構完掘状況（西から）



２．SD2531 溝跡断面（西から）

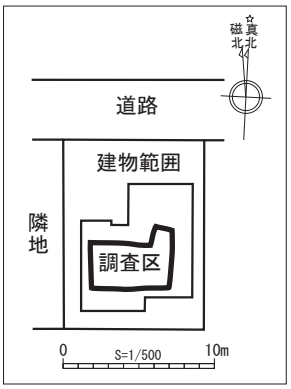
写真図版 5　第 295 次調査

Ⅳ．第 296 次発掘調査

１．調査経過と調査方法

第 296 次調査は、個人住宅建築に伴う発掘調査である。申請者より令和元年 5 月 7 日付で提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（令和元年 5 月 10 日付 H31 教生文第 101-43 号で通知）に基づき実施した。

今回の調査地点は、郡山遺跡Ⅰ期官衙中枢部の前面（東面）付近に位置する。平成 30 年度に調査が行われた第 282・284・285 次調査区の南側に、第 289 次調査の西側に位置する。（第 2・21 図）



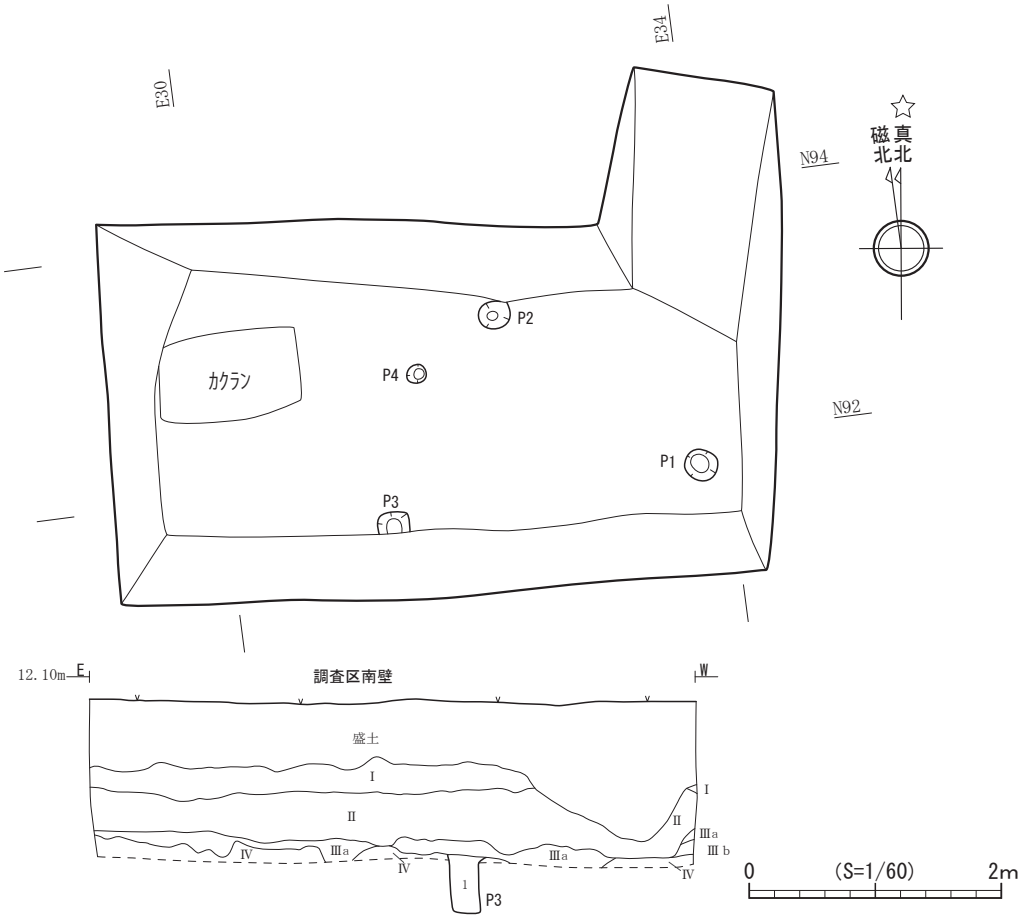
第 23 図　第 296 次調査区配置図

調査区は建築範囲内に 3 × 5m の規模で設定した。重機掘削により盛土およびⅠ～Ⅲｂ層を除去後、Ⅳ層上面（GL － 1.2 ～ 1.3 m）で遺構検出作業を行い、ピット 4 基を検出した。

遺構の調査終了後、調査区平面図（1/40）、断面図（1/20）を作製し、記録写真はデジタルカメラで撮影した。当日中に複数回の転圧をかけながら重機による埋戻しを行い、調査を終了した。

２．検出遺構と出土遺物

今回の調査では、Ⅳ層上面でピット 4 基を検出した。出土遺物はなかった。



	層位	土色	土性	備考
基本層	Ⅰ	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	畑の耕作土。
	Ⅱ	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	炭化物粒を微量含む。酸化鉄粒を微量含む。
	Ⅲａ	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	黄褐色粘土粒をやや多く含む。
	Ⅲｂ	10YR3/3 暗褐色	粘土	炭化物粒を微量含む。
	Ⅳ	10YR5/6 黄褐色	粘土	
P3	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	黄褐色粘土粒を少量含む。

第 24 図　第 296 次調査区平面・断面図

【ピット】

ピットは4基検出した。平面形は円形が多く、ピットの規模は径が17～26㎝、深さが17～41㎝である。柱痕跡を有するピットは確認されなかった。また建物跡や柱列跡を構成するような配列は確認されなかった。

3．まとめ

今回の調査地点は、郡山遺跡のⅠ期官衙東辺の東側に位置する。今回の調査では、Ⅳ層上面でピット4基を確認したのみで、その他に遺構は確認されず、遺物も出土しなかった。

1．遺構完掘状況（北から）

2．調査区南壁断面

写真図版6　第296次調査

Ⅴ．第297次発掘調査

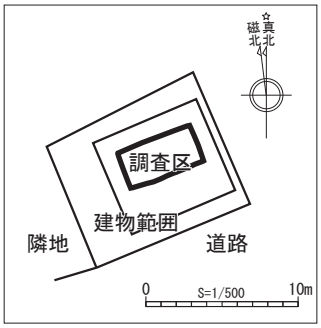
1．調査経過と調査方法

第297次調査は、個人住宅建築に伴う発掘調査である。申請者より令和元年6月14日付で提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（令和元年6月17日付H31教生文第101-98号で通知）に基づき実施した。

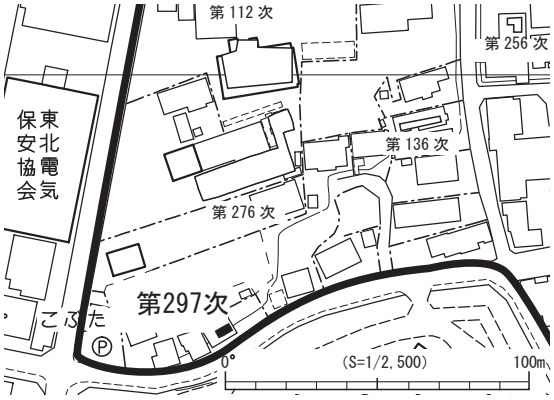
今回の調査地点は、郡山遺跡の南西部で、平成30年度に調査が行われた第276次調査の南側に位置する。（第2・26図）

調査区は建築範囲内に2.5×5mの規模で設定した。重機掘削により盛土を除去後、Ⅱ層上面（GL－1.2～1.3ｍ）で遺構検出作業を行ったが、遺構は確認されなかった。

調査区平面図（1/40）、断面図（1/20）を作製し、記録写真はデジタルカメラで撮影した。当日中に複数回の転圧をかけながら重機による埋戻しを行い、調査を終了した。



第25図　第297次調査区配置図



第26図　第297次調査区位置図

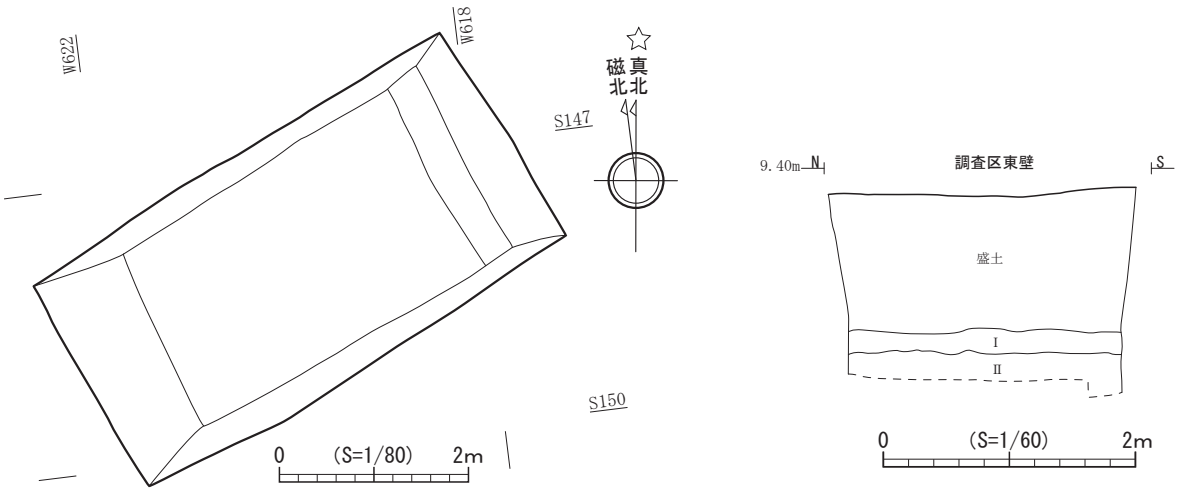
2．検出遺構と出土遺物

今回の調査では遺構は検出されなかった。遺構検出面から土師器片と須恵器片が出土しており、そのうち須恵器2点を図化した。

3．まとめ

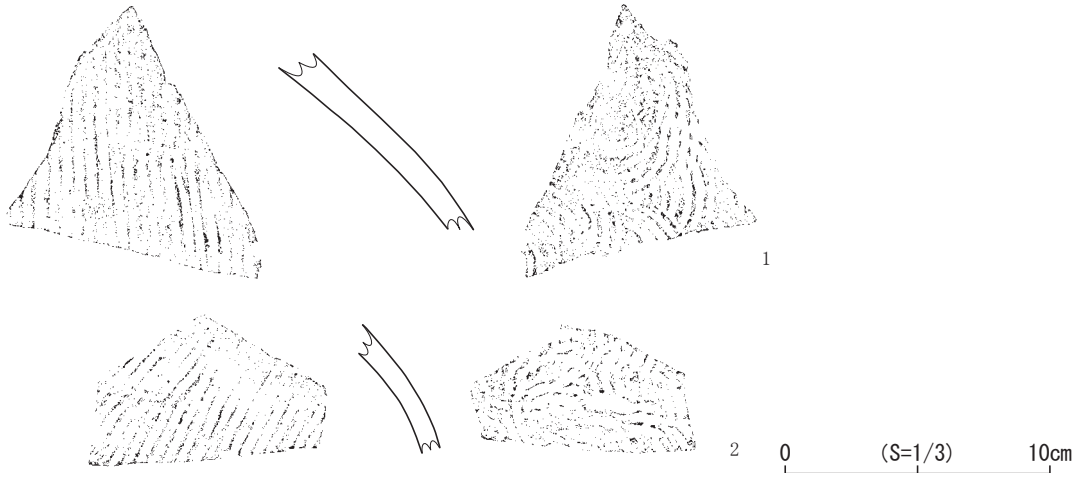
今回の調査地点は、郡山遺跡の南西部に位置する。本調査区の北側には竪穴住居跡が検出されている第276次

調査が、西側には長町駅東遺跡があり、官衙の時期の竪穴住居跡等が検出されることが想定された。今回の調査で、遺構は検出されず、出土遺物も僅少であった。遺構面は削平されたと考えられる。



	層位	土色	土性	備考
基本層	I	10YR3/1 黒褐色	粘土	マンガン粒を少量含む。砂を微量含む。酸化鉄粒を微量含む。
	II	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄が層上部に集積。マンガン粒をやや多く含む。砂をやや多く含む。

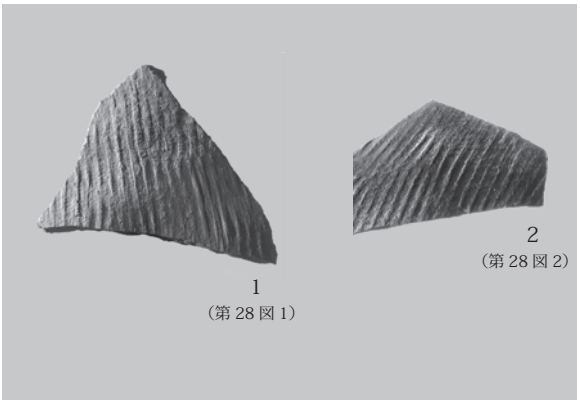
第 27 図　第 297 次調査区平面・断面図



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量（cm）			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	E-640	遺構検出面	—	須恵器	甕	—	—	(6.7)	平行タタキ目（二方向）	当て具痕（同心円文）→ナデ	胎土緻密 砂粒含む	7-1
2	E-641	遺構検出面	—	須恵器	甕	—	—	(4.9)	ロクロナデ→平行タタキ目（二方向）	当て具痕（同心円文）→ナデ	胎土緻密 砂粒含む	7-2

第 28 図　第 297 次調査　出土遺物

1．調査区全景（南西から）



第 297 次調査出土遺物

写真図版 7　郡山遺跡第 297 次調査

Ⅵ. 第 299 次発掘調査

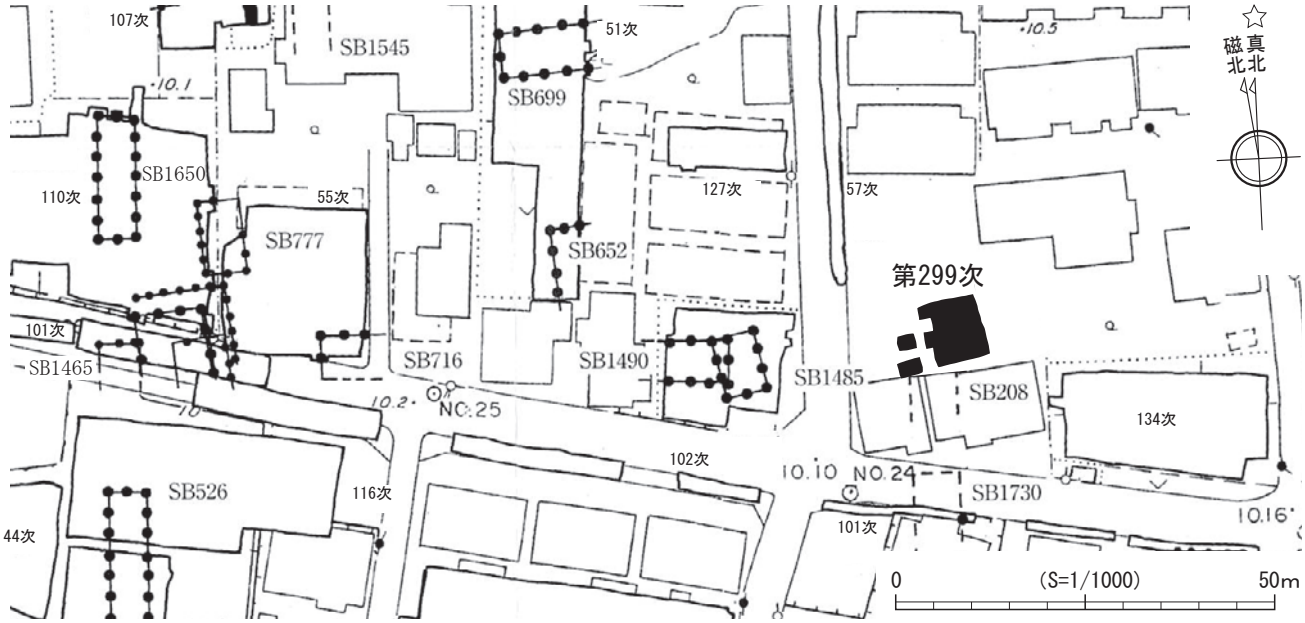
1．調査経過と調査方法

第 299 次調査は、史跡整備に伴う範囲確認調査である。調査地点は郡山三丁目 126-6 に所在し、昭和 56 年度に調査した第 20 次調査と一部重複しながら、その北側に位置する。（第 2・29 図）

方四町Ⅱ期官衙については、これまでの調査から、その構造が藤原京を模して造営したとされており、中枢部では正殿を中心に東西対称する位置に南北棟の建物が配置されたと考えられている。西列建物跡群は SB526 掘立柱建物跡（第 44 次調査）や SB1465 掘立柱建物跡（第 101 次調査）、SB1650 掘立柱建物跡（第 110 次調査）がそれぞれ確認されているが、東列建物跡群については SB208 掘立柱建物跡（第 20 次調査）の一部が確認されているのみで、その詳細は明らかになっておらず、東列建物跡群の状況を検証する必要があった。

郡山遺跡内では東日本大震災以降、個人住宅建築工事に伴う調査を優先していたため、史跡整備に伴う調査を休止していたが、今年度から再開し、東列建物跡群の状況を確認するため、第 20 次調査で検出された SB208 掘立柱建物跡の詳細確認を目的として調査を実施した。なお、本調査は史跡内での調査であるため令和元年 6 月 18 日付で現状変更許可申請書（H31 教生文第 947 号）を提出し、令和元年 7 月 19 日付で現状変更が許可されている（元受文庁第４号の 329）。

調査は令和元年 9 月 2 日から開始し、東西 7.0 m×南北 8.0 mの調査区を設定した後、重機により盛土及び基本層Ⅰ・Ⅱ層を除去し、基本層Ⅲ層上面（GL － 0.6 ～ 0.7m）で遺構検出作業を行った。なお、今回の調査は範囲確認調査であるため、遺構の検出のみにとどめ、掘り下げは行っていない。調査では第 20 次調査の SB208 掘立柱建物跡の柱穴を検出したため、建物跡の規模を確認する目的で調査区を新たに 2 ケ所（北調査区：東西 2.0 m×南北 1.7 m、南調査区：東西 2.8 m×南北 1.7 m）設定した。遺構の記録は平面図・断面図を S ＝ 1/20 で作製し、記録写真は 35 ㎜モノクロフィルムとリバーサルフィルムを併せて、デジタルカメラを用いて撮影した。9 月 17 日に調査を終了し、検出した遺構を土嚢で保護した上で、重機で埋め戻しを行った。



第 29 図　第 299 次調査区位置図

２．検出遺構と出土遺構

検出された遺構は掘立柱建物跡１棟と竪穴住居跡１軒、性格不明遺構１基、ピットである。各遺構と基本層中から土師器片が出土している。

【SB208 掘立柱建物跡】

調査区の南西部で検出された。確認した柱穴は調査区で３基、北調査区で１基である。このうち N2E1 は第 20 次調査で確認された柱穴で、柱痕跡と掘方の一部が掘り下げられていた。N1E1 は P16 と重複しており、P16 より古い。建物跡は東西２間以上、南北１間以上で、柱間は東西で 2.84 m と 3.06m、南北で 2.66m である。方向は北辺でN―6°―Wである。柱穴の掘方の形状は全て方形で、規模は一辺が N1E1 で 104 ㎝、N2E1 で 91 ㎝、N1E2 で 140 ㎝、N1E3 で 148 ㎝以上ある。掘方埋土は灰黄色やにぶい黄橙色粘土で、基本層Ⅲ層を起源としたにぶい黄橙色粘土ブロックを多く含んでいる。柱痕跡は径 28 ～ 32 ㎝の円形で、暗褐色粘土である。西列建物跡群と同様の東西２間の南北棟の建物跡の検出を想定していたため、柱穴想定位置である北調査区の南側に南調査区を設定したが、ここで柱穴は確認されなかった。

【SI2549 竪穴住居跡】

調査区の南東部で検出された。検出したのは住居跡の南西隅部分で、大部分は調査区外へ延びる。規模は西壁で 251 ㎝以上、南壁で 104 ㎝以上である。形状が方形の住居跡で、西壁を基準とした方向は N―24°―E である。遺構確認のみのため、遺構の掘り下げを行っておらず、出土遺物はない。

【SX2550 性格不明遺構】

南調査区の西部で検出された。遺構の一部分の検出であり形状が不明であるため性格不明遺構とした。規模は 192 ㎝以上で、堆積土は基本層Ⅲ層を起源とする黄橙色粘土粒とブロックをやや多く含む暗褐色粘土である。遺構の掘り下げを行っておらず、出土遺物はない。

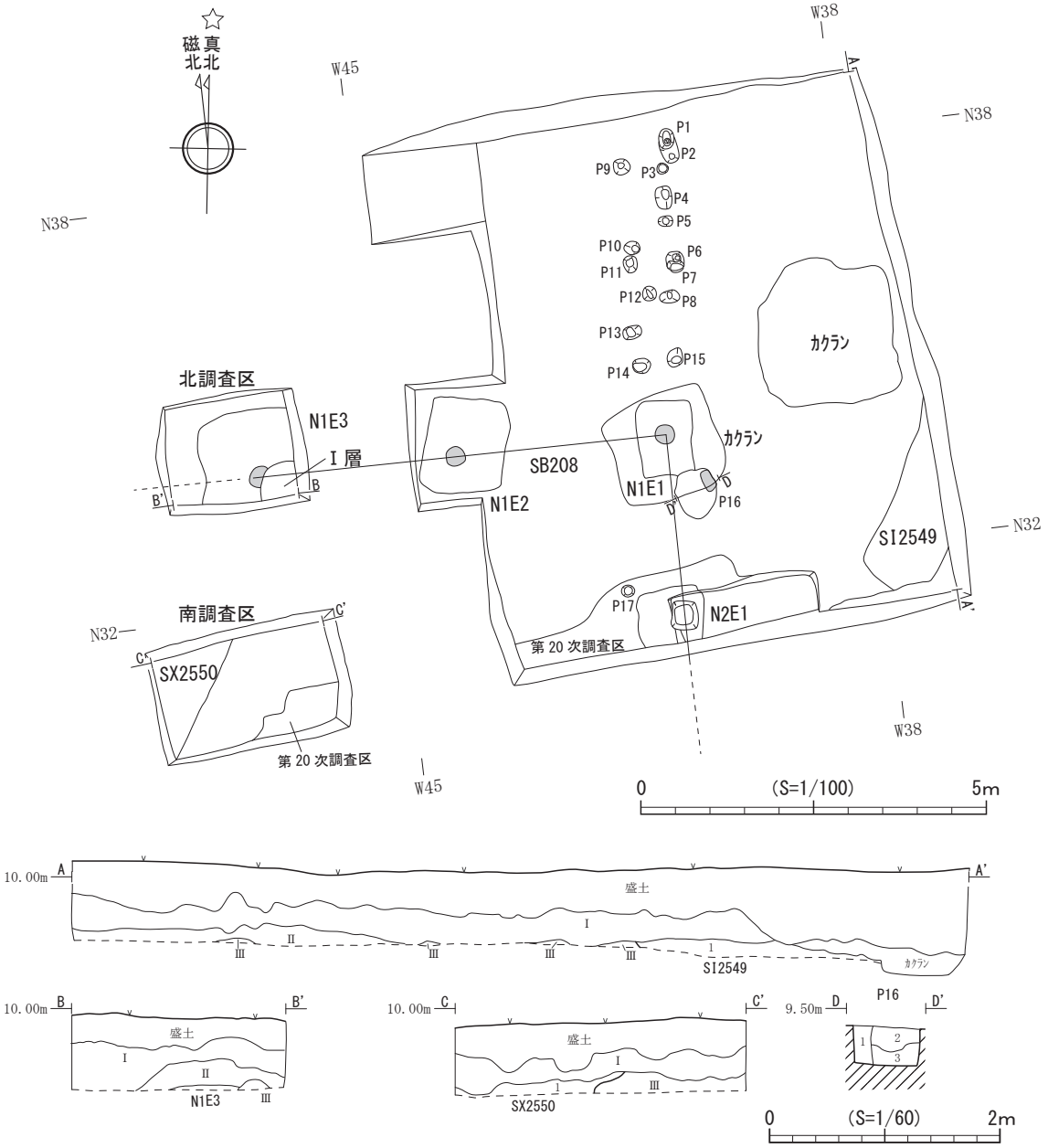
【ピット】

ピットは 15 基検出された。P16 は SB208 掘立柱建物跡 N1E1 と重複しており、P16 が新しい。P16 では柱痕跡が検出されており、径は 31 ㎝である。P2 ～ P15 は径 16 ～ 34 ㎝楕円形や円形の小規模のピットで柱痕跡はない。堆積土は基本層Ⅱ層暗褐色粘土質シルトである。ピット群の西側全体が現在の耕作によるとみられる南北方向の浅い溝状となっており、これらのピット群は現在の耕作に関係するものとみられる。

３．まとめ

今回の調査では第 20 次調査で確認されていた SB208 掘立柱建物跡の北および西側での延長部分が確認された。今回確認された建物跡は南北１間以上、東西２間以上の建物跡であることが判明したが、調査面積が狭かったため、この建物跡が調査区の南側と西側にどのように展開するかは不明である。一方、南調査区では柱穴が確認されなかったため、今回確認された建物跡は、西列建物跡群で確認されているような東西２間の南北棟の建物とは柱の配置が異なると考えられる。

第 31 図は郡山遺跡Ⅱ期官衙中枢部の主要遺構配置図である。今回確認された SB208 掘立柱建物跡は、西列建物跡群の SB1465 掘立柱建物跡とおおむね東西対称の位置にある。現段階では SB208 掘立柱建物跡の規模は不明であるため、西列建物跡群と東西対称となる建物跡であるとは断定できない。今後は、SB208 掘立柱建物跡の規模を明らかにするとともに、Ⅱ期官衙中枢部の建物の構造や性格などを解明するためにも今後も調査を継続していく必要がある。

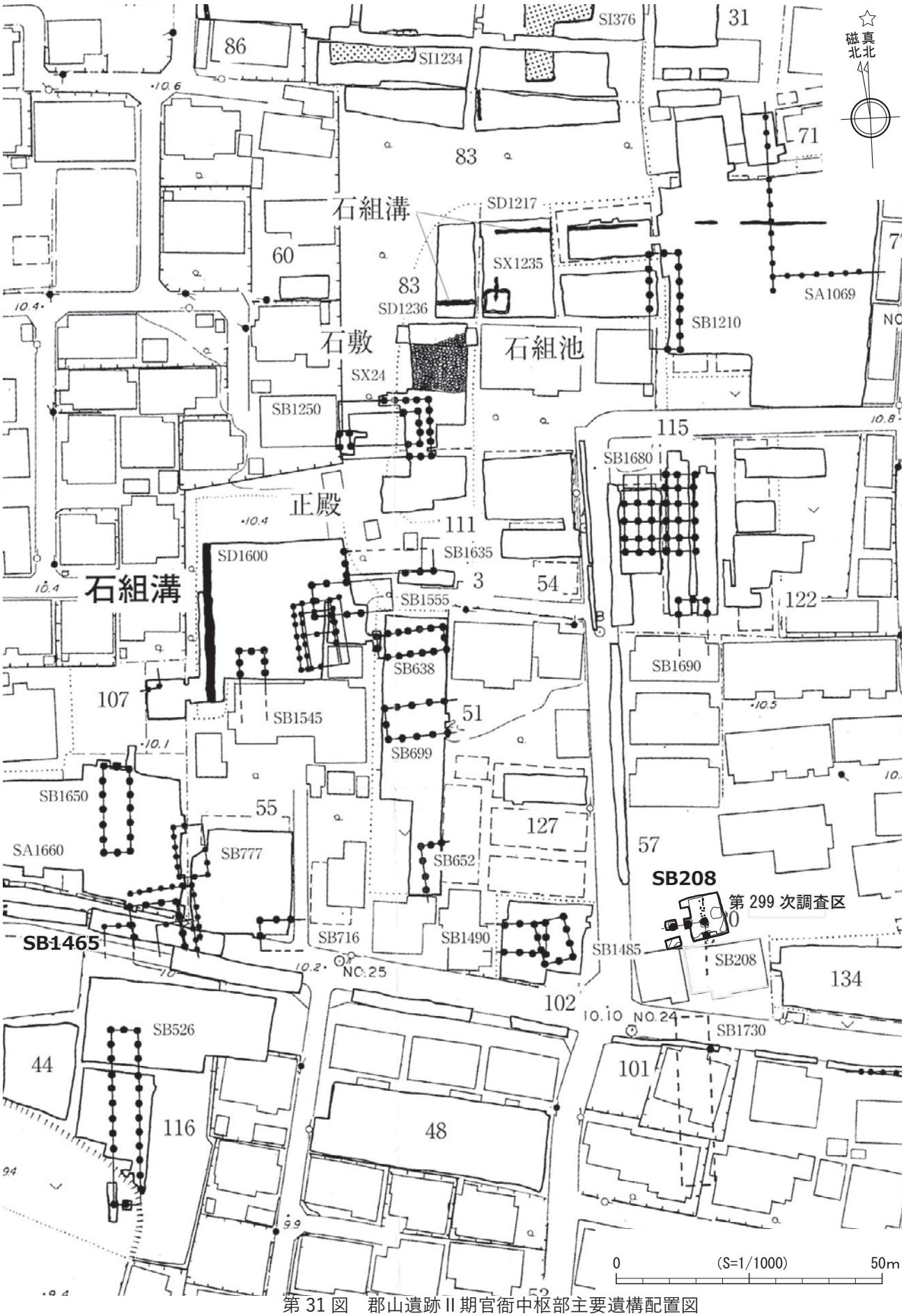


	層位	土色	土性	備考
基本層	I	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	炭化物粒を少量含む。
	II	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	にぶい黄橙色粘土質シルト粒・小ブロックを少量含む。マンガンを非常に多く含む。
	III	10YR6/4 にぶい黄橙色	粘土質シルト	灰黄褐色粘土粒を少量含む。酸化鉄を少量含む。

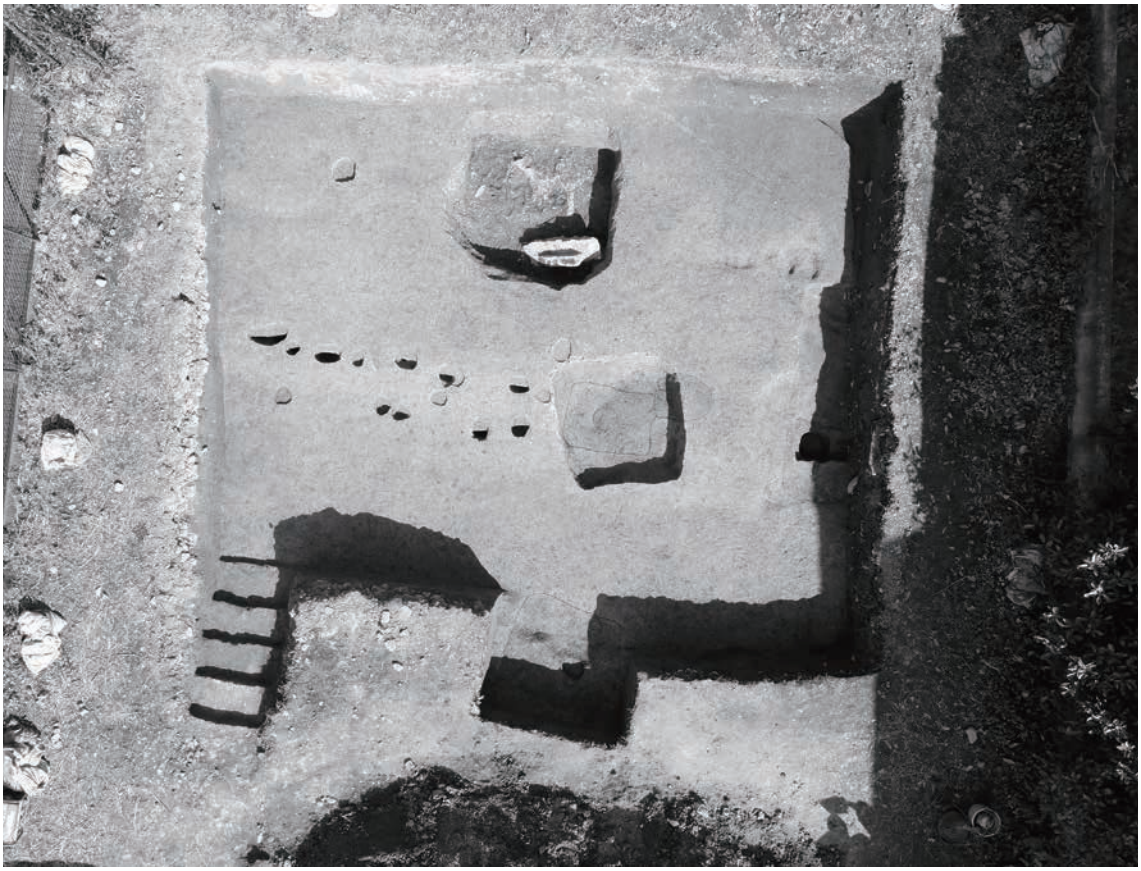
遺構名	規模（cm）	層位	土色	土性	備考
SB208 N1E1	27	柱痕跡	2.5Y4/1 灰黄色	粘土	にぶい黄橙色粘土粒を少量含む。グライ化。
	104 × 78	掘方埋土	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	粘土	にぶい黄橙色粘土ブロックを多く含む。グライ化。
SB208 N2E1	91 × (80)	掘方埋土	10YR3/2 黒褐色	粘土	酸化鉄を少量含む。にぶい黄橙色粘土ブロックを非常に多く含む。
SB208 N1E2	29	柱痕跡	10YR3/4 暗褐色	粘土	炭化物を微量含む。にぶい黄橙色粘土粒を少量含む。酸化鉄を微量含む。
	140 × 115	掘方埋土	10YR4/3 にぶい黄橙色	粘土	にぶい黄橙色粘土ブロックを多く含む。酸化鉄を微量含む。
SB208 N1E3	32	柱痕跡	10YR3/3 暗褐色	粘土	酸化鉄粒を微量含む。
	(148) × 133	掘方埋土	10YR4/3 にぶい黄橙色	粘土	炭化物粒を微量含む。にぶい黄橙色粘土粒・ブロックをやや多く含む。
P16	31	柱痕跡	10YR2/3 黒褐色	粘土	にぶい黄橙色粘土粒を少量含む。
	71 × 60	掘方埋土	10YR3/4 暗褐色	粘土	黄橙色粘土粒を少量含む。炭化物を微量含む。酸化鉄を少量含む。
		掘方埋土	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄とにぶい黄橙色粘土粒やや多く含む。

遺構名	層位	土色	土性	備考
SI2549	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	にぶい黄橙色粘土粒を少量含む。（住居堆積土）
SX2550	1	10YR3/4 暗褐色	粘土	炭化物を少量、酸化鉄を微量含む。黒褐色粘土、にぶい黄橙色粘土粒・小ブロックをやや多く含む。

第 30 図　第 299 次調査平面・断面図



第 31 図　郡山遺跡 II 期官衙中枢部主要遺構配置図



1. 調査区全景（上が東）

2. 遺構検出状況（南から）

写真図版 8　第 299 次調査（1）

1. 遺構検出状況（南東から）

2. SB208 掘立柱建物跡検出状況（東から）

3. SB208　N1E1 柱穴検出状況（東から）

4. SB208　N1E2 柱穴検出状況（西から）

5. SB208　N2E1 柱穴検出状況（南から）

6. SB208　N1E3 柱穴検出状況（北から）

7. 南調査区全景（北から）

8. 調査区東壁南半部断面（西から）

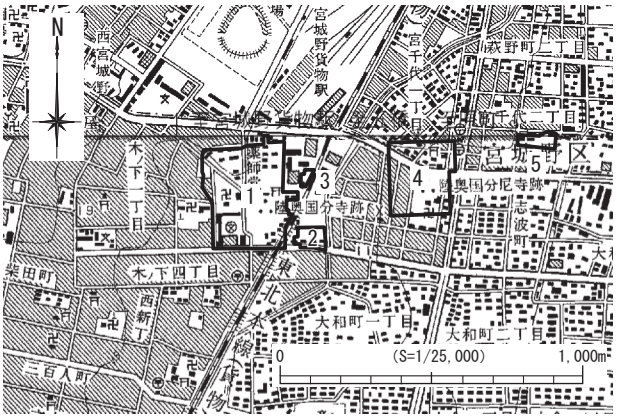
写真図版 9　第 299 次調査（2）

第３章　陸奥国分寺跡第 30 次調査

１．調査経過と調査方法

陸奥国分寺跡は若林区木ノ下に所在する。現在確認できる最北に位置する国分寺で、大正 11 年（1922）に国史跡に指定されている。昭和 30 ～ 34 年（1955 ～ 59）に学術調査が、昭和 47 年（1972）以降は史跡整備のための調査が行われ、これらの調査の結果、伽藍配置をはじめとし、寺院の概要が明らかにされている。

慶長年間（1596 ～ 1615）に陸奥国分寺は伊達政宗によって再興されたと伝えられ、現在の境内には薬師堂（国指定有形文化財）、仁王門（県指定有形文化財）、鐘楼（市登録有形文化財）などの建物がある。鐘楼建立の詳細な時期は不明であるが、『奥州仙台城絵図』- 正保 2 年（1645）- には薬師堂や仁王門と共に鐘楼が描かれており、このことから江戸時代の初め頃には存在していたと考えられる。



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	陸奥国分寺跡	寺院	自然堤防	奈良・平安
2	薬師堂東遺跡	集落跡・墓	自然堤防	奈良・平安・近世
3	陸奥国分尼寺跡	寺院	自然堤防	奈良・平安
4	国分寺東遺跡	集落跡	自然堤防	平安・中世
5	志波遺跡	散布地	自然堤防	平安・中世

第 32 図　陸奥国分寺跡と周辺の遺跡

現在の鐘楼は平成 23 年（2011）に発生した東日本大震災や経年劣化により倒壊の危険性があったことから、宗教法人陸奥国分寺が事業主体となり解体・復元修理工事が行われることになった。これに伴い事前に、鐘楼の基礎構造や陸奥国分寺跡の遺構の有無の確認が必要とされ、建物解体後に調査を行うことになった。なお、史跡内での調査であるため、令和元年 8 月 16 日付で現状変更許可申請（H31 教生文第 1402 号）を提出し、令和元年 9 月 20 日付で現状変更の許可（元受文庁第 4 号の 663）が得られている。

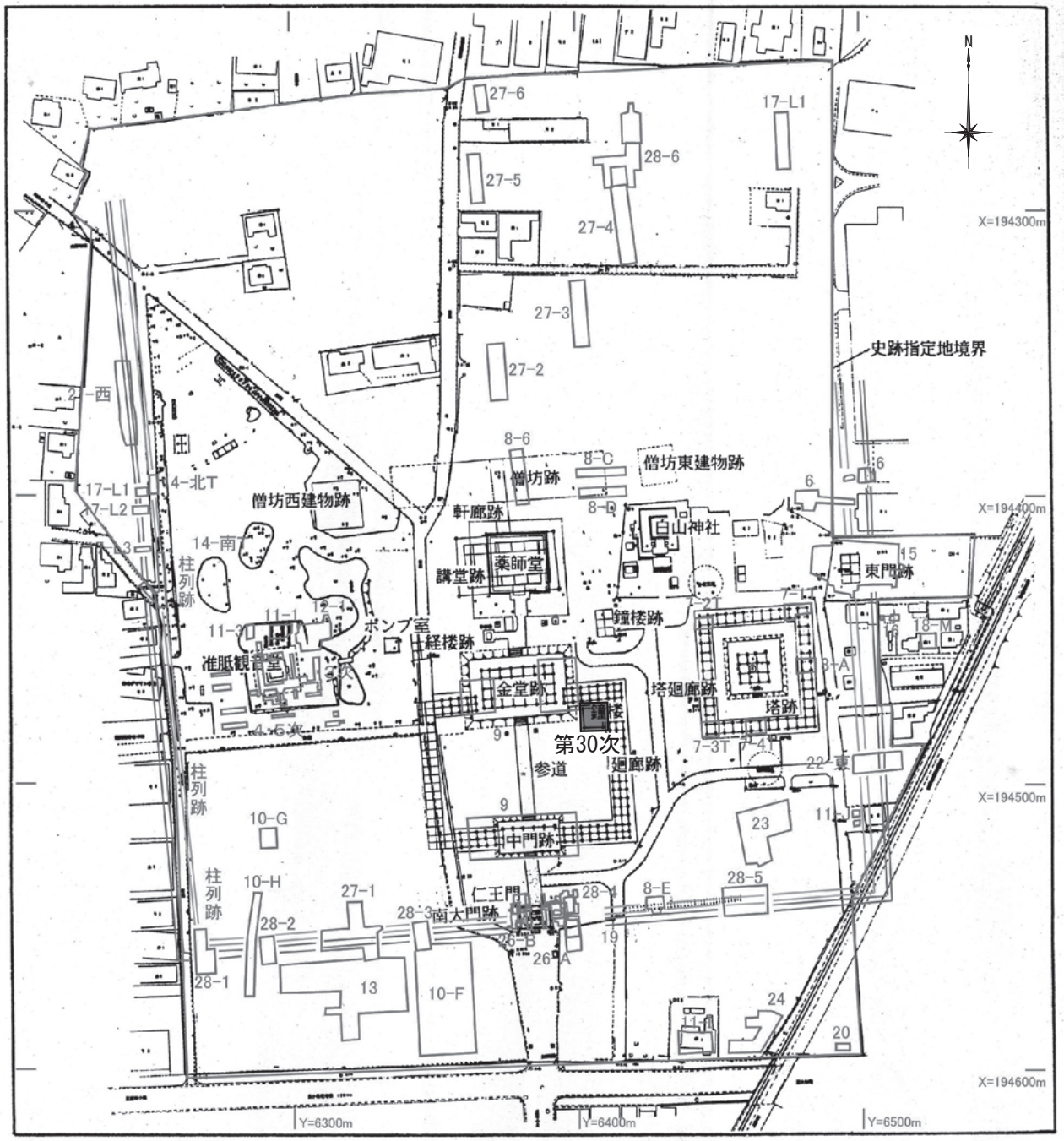
調査は 11 月 11 日に着手した。鐘楼基礎部分の調査を実施し、その後陸奥国分寺跡の遺構面の調査を行った。鐘楼の調査は土台石周辺の土と土間構築土などを除去し、土間の平面図（S=1/20）や礎石等のエレベーション図（S ＝ 1/20）を作成した。復元修理工事への影響を考慮し、下層調査は建物周辺 3 ケ所と出入口 1 ケ所、計 4 ケ所にトレンチを設定し、調査を行った。写真は 35 ㎜モノクロフィルムとリバーサルフィルムを使用し、併せてデジタルカメラで撮影した。調査は 12 月 6 日に終了し、同日中に埋め戻しを行った。

２．検出遺構と出土遺物

（１）鐘楼の礎石と土間の状況

調査では鐘楼の礎石 12 基、建物の土間と土台石、雨垂痕跡を確認した。

鐘楼は梁行 2 間、桁行 3 間の南北棟の建物である。礎石の表面には、現鐘楼の柱による径 21 ㎝の柱痕跡が色調の違いで認められ、うち 3 カ所では「＋」印の墨付けの痕跡を確認した。残存する柱痕跡から柱間は北辺で 190 ㎝（N1E3 － N1E2）、185 ㎝（N1E2 － N1E1）で総検出長は 375 ㎝、東辺で 160 ㎝（N1E1 － N2E1）、180 ㎝（N2E1 － N3E1）、168 ㎝（N3E1 － N4E1）で総検出長は 508 ㎝である。東柱列を基準とした建物の方向は N―2°―W である。礎石の石材は全て玄武質安山岩で N3E2 以外は自然面の平担な部分を利用している。礎石の規模は表 3 の通りで、最大で長軸が 112 ㎝の大きな礎石もある。礎石は全て表面が風蝕している。中には表面の一部が赤褐色になっており、これは被熱痕跡であると考えられる。N4E3 のように熱を受けて表面が剥落している礎石もある。N3E2 の表面にわずかな段であるが円形の造り出しが確認された。風蝕しているが、円形柱座であると考えられる。



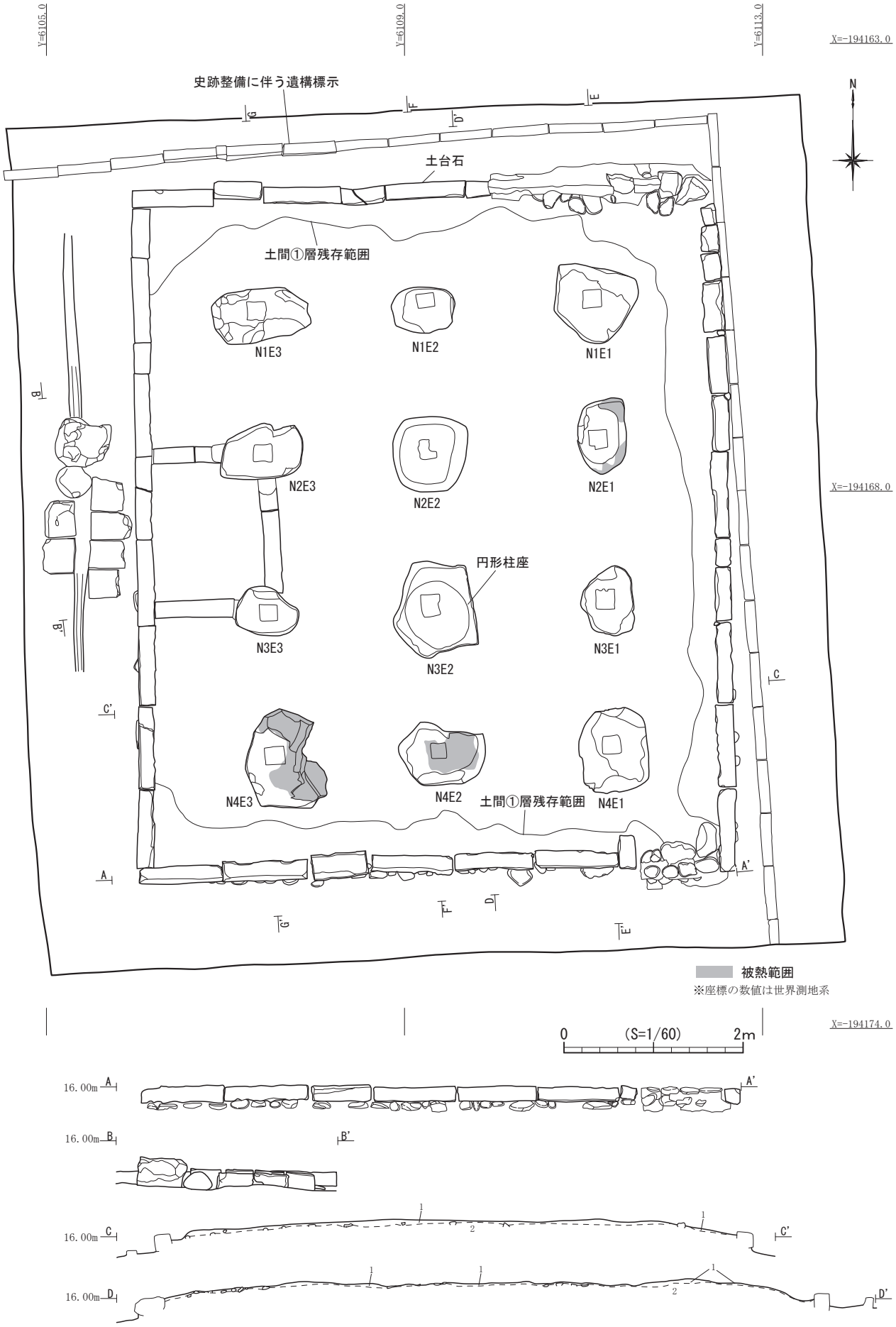
第 33 図　陸奥国分寺跡全体図

0　50　100M

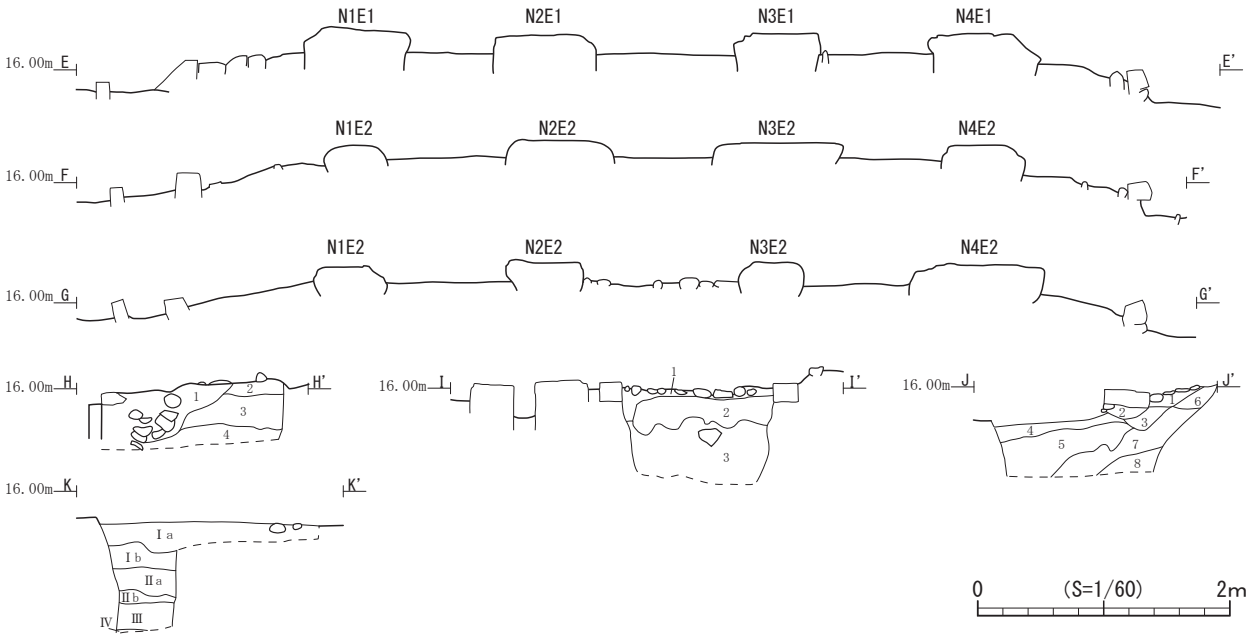
（数字は調査次数を示す。図中のX、Y座標は日本測地系の座標）

柱座は南側がやや不明瞭となるが、径は 69 ～ 78 ㎝で、礎石上面に対し柱座の部分が大きい。北辺にある N1E1、N1E2、N1E3 と N2E1 では礎石を据え付けのための掘り方と根石が確認された。

土間の規模は南辺で 665 ㎝、西辺で 776 ㎝である。土間の高さは現地表面から測ったところ、最も高いところで 32 ㎝程度ある。土間の周りには土台石を設置しており、個々の土台石には長さ 60 ～ 90 ㎝、幅 16 ㎝の凝灰岩の切石を使用している。土台石は北東隅と南東隅の一部がモルタルで修復されている。また、土台石の東辺の北部では、昭和 40 年代の整備に使用されたコンクリートブロックが鐘楼の土台石の一部に接した状態で設置していることを確認した。出入口部分は、土間内部に凝灰岩の切石を「コ」の字状に配している。凝灰岩の切石と礎石（N2E3 と N3E3）が接している部分にはモルタルで補強されていた。南辺と西辺の一部では土台石の下に大きさ約 10 ～



第 34 図　土間①層面検出状況平面・見通し・エレベーション図



部位	層位	土色	土性	備考
土間 (C－C'、D－D')	1	10YR4/4 褐色	シルト	コンクリート土間以前の床面。しまりは弱いが、硬化している箇所もある。(土間①層)
	2	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	しまりが強い。(土間②層)
1T (H－H')	1	10YR4/4 褐色	シルト	拳大の礫が混入。(土台石の掘方？)
	2	10YR4/6 褐色	シルト	焼土粒を微量含む。(土間②層)
	3	7.5YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	黄褐色粘土質ブロックを含む。黒褐色粘土質ブロックを少量含む。土間の構築土。
	4	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	炭化物を少量含む。古代瓦集積の堆積土。
2T (I－I')	1	7.5YR4/4 褐色	シルト	礫の中に充填されている土。表層はしまり、固くなっている部分あり。
	2	7.5YR5/6 にぶい褐色 7.5YR5/8 明褐色	シルト	混成層。明褐色土小ブロック状に含む。
	3	7.5YR4/3 褐色	シルト	古代・近世の瓦が多く含む。分層不可で大きく１つにした。
3T (J－J')	1	10YR4/6 褐色	シルト	土台石の掘方。
	2	10YR4/6 褐色	砂質シルト	土台石の掘方。
	3	10YR4/6 褐色	粘土質シルト	炭化物と黄褐色粘土粒を微量含む。土台石の掘方。
	4	10YR3/4 黒褐色	粘土質シルト	整備時の整地土。
	5	7.5YR3/4 黒褐色	粘土質シルト	黄褐色粘土ブロックを多く含む。炭化物を微量含む。古代・近世瓦を含む。
	6	10YR4/4 褐色	シルト	(土間②層)
	7	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	黄褐色粘土ブロックを少量含む。近世瓦を多く含む。
	8	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	炭化物を微量含む。
4T (K－K')	Ⅰa	10YR4/3 褐色	シルト	焼土粒を極微量に含む。近世・古代の瓦の破片を含む。小礫を少量含む。整備時の整地土。
	Ⅰb	10YR4/3 褐色	粘土質シルト	黄褐色粘土ブロックを少量、焼土粒を微量含む。整備時の整地土。
	Ⅱa	7.5YR5/3 暗褐色	粘土質シルト	砂と焼土粒を微量含む。
	Ⅱb	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	炭化物粒を微量含む。
	Ⅲ	10YR4/6 褐色	粘土	黄褐色粘土ブロックを少量含む。
	Ⅳ	10YR5/6 黄褐色	粘土	

第 35 図　礎石エレベーション図・下層調査断面図

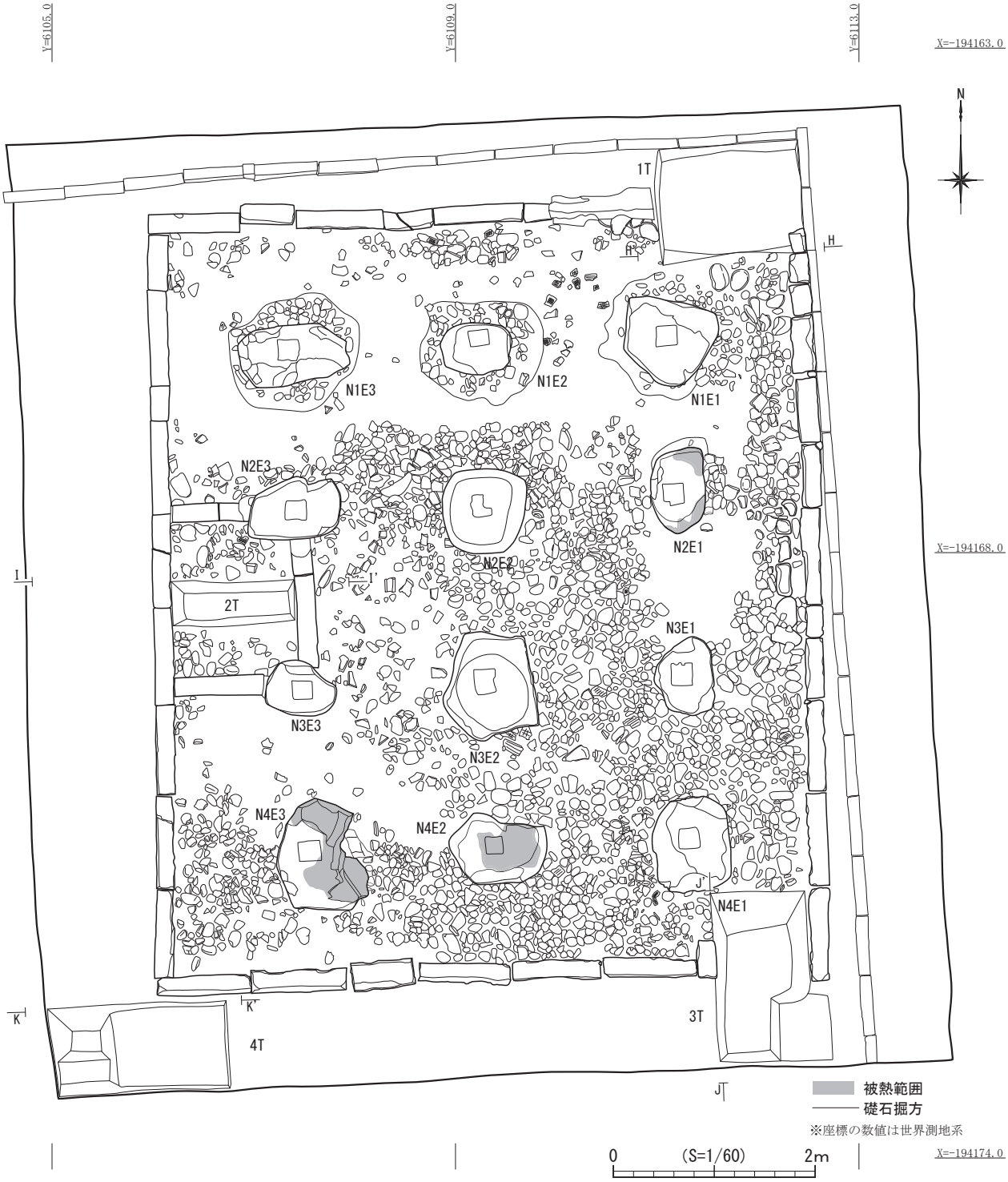
34 ㎝の扁平な川原石が並べられていることが確認された。土間内部は褐色シルトの土を入れて土間の床としていた(土間①層)。土間は中央部で硬化している箇所も一部あったが、風蝕のためしまりがない箇所が多く、精査の際に硬化面の範囲を確認することができなかった。この土間を除去したところ、中央から南側にかけて大量の川原石とともに古代と近世の瓦の破片が面的に広がった状態で確認された (土間②層)。川原石と瓦の破片は全体的に敷かれたかのように広がっていた。一方土間の北側は固く締まった建物の基礎となる層が出ており、この層の上に川原石や瓦片が入れられている。

No.	大きさ (長軸×短軸) ㎝	柱痕跡 (径) ㎝	被熱痕跡	備考
N1E1	96 × 80	21	×	柱墨付け
N2E1	87 × 54	21	○	
N3E1	76 × 59	22	×	
N4E1	91 × 80	20	×	
N1E2	71 × 50	20	×	
N2E2	91 × 84	22	×	
N3E2	102 × 87	24	×	円形柱座
N4E2	97 × 75	17	○	柱墨付け
N1E3	111 × 58	21	×	柱墨付け
N2E3	98 × 53	22	×	
N3E3	69 × 52	20	×	
N4E3	112 × 82	22	○	

表 3　礎石計測一覧表

土間東辺の中央部では幅 15 ㎝程の細長く大きめの川原石が「コ」の字状に配置されていた。この川原石の配列はかつての出入口の痕跡である可能性があり、建物解体時の建築部材の調査からも、柱材に残る痕跡からかつては入口が東側にあったことが推測されている。

雨落ち溝とみられる痕跡は鐘楼建物外の西側中央部で検出された。溝状になったくぼみの幅は 14 ㎝、検出長は



第 36 図　土間②層面検出状況平面図

約 5 mで、残存状況は悪い。

（2）下層調査

鐘楼の基礎構造と陸奥国分寺跡の遺構の有無の確認を目的として、下層調査区を 4 ケ所設定した。当初は鐘楼の土間内で下層調査を行う予定であったが、土間内に大量の川原石と瓦片が広がっていたのに加え、礎石の安定性に影響を与える可能性があることから、土間外に 3 ヶ所（1T、3T、4T)、西出入口に 1 ヶ所（2T）の下層調査区を設定した。このうち、1T と 2T で GL － 40 ～ 50 ㎝の深さで古代の瓦片が面的に広がっている状況を確認した。確認した面積は狭小であるが、この下部には古代瓦が集積する何らかの遺構が存在する可能性がある。3T で

はGL－45㎝まで掘り下げたが、古代と近世の瓦片が混入する整地層を確認するにとどまり、鐘楼の掘込地業等は確認できなかった。4TではGL－90㎝で古代の遺構確認面の黄褐色粘土層を確認した。この調査区ではGL－60㎝までは整地層で古代と近世の瓦片が混入している。これらの下層調査トレンチでは土間の構築土はしまりが強くない粘土質シルト、もしくはシルトで盛られており、版築の痕跡は確認されなかった。また、鐘楼の掘込地業等は確認できなかった。

(3) 出土遺物

遺物は鐘楼の土間内部を中心に大量の瓦片と陶器、磁器、土製品、金属製品が出土した。数量が最も多いのは近世の瓦で出土総点数は3,314点である。出土した瓦についてはその多くが小破片である。図化したのは瓦14点、陶器3点、磁器1点、土製品2点、金属製品6点である。

第37図1の軒丸瓦は蓮子の形状と蓮弁の配置関係から1961年に報告された『陸奥国分寺跡』の「重弁蓮花文鐙瓦第五類」に分類される瓦で、陸奥国分寺創建期の瓦である。第37図2は宝相華文の軒丸瓦で、瓦当面に範傷が確認できる。第37図5と6は凹面にヘラで文字の一部と考えられる痕跡が書かれている。第38図3と4は表面中央の凹み部分に粗い布目痕があり、型で成形して作られたと考えられる。4は同じ大きさのものが9点出土している。同様のものが昭和49年(1974)の調査（金堂回廊跡）で出土している（仙台市教育委員会2014・仙文報第430集・第26図14 ）が、用途が不明であるため不明土製品とした。近世瓦の瓦当面の文様には九曜文と珠文三巴文のほか、菊花文も出土している。土間①、②層から出土した陶磁器で産地と年代が判明したのは表4のとおりである。

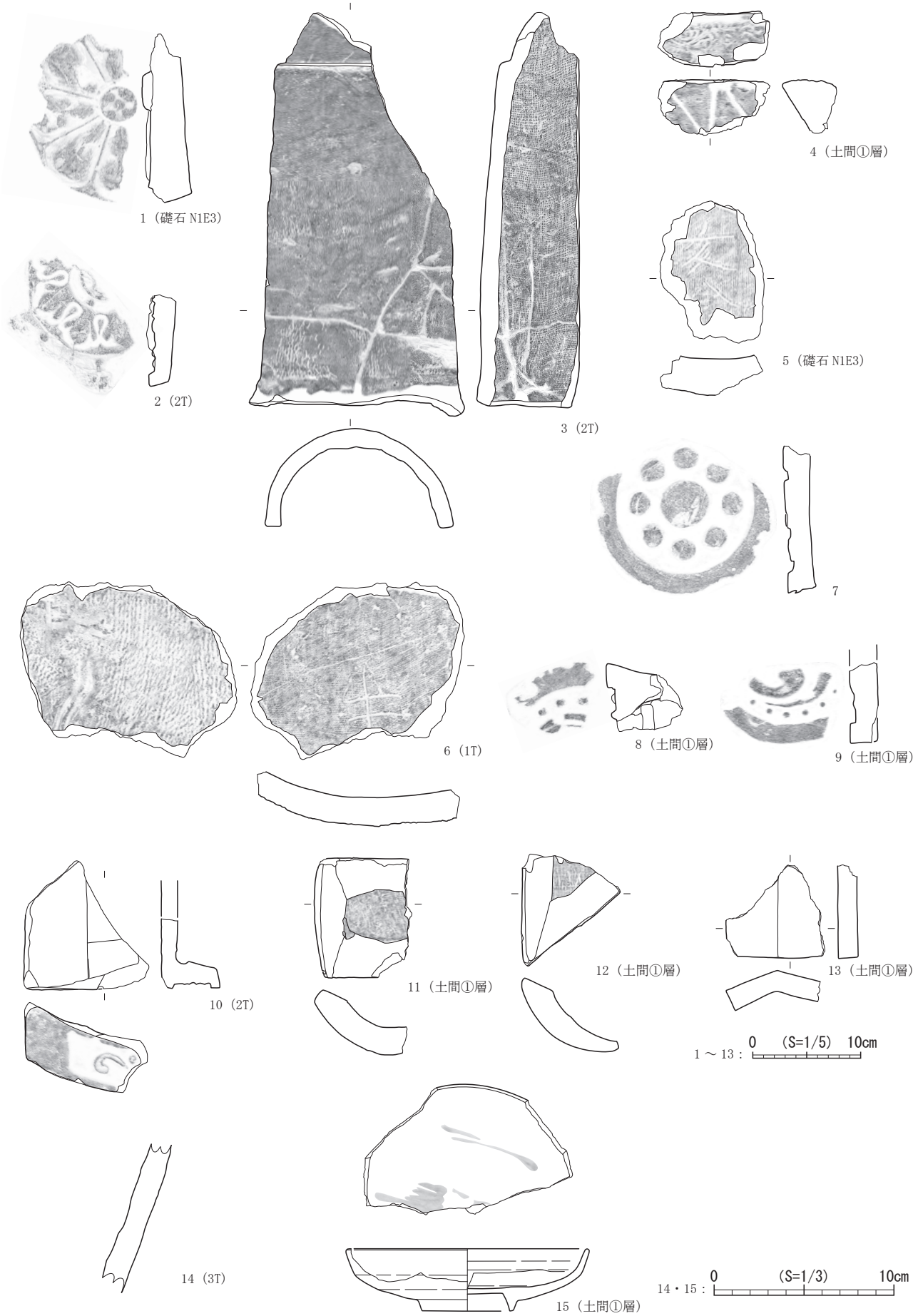
出土層	種別・器種	産地	年代	備考
土間①	磁器　染付碗	肥前	18C	文様　雨ふり　　雷を表現
土間①	磁器　染付碗	波佐見	18C	文様　菊花　コンニャク印判
土間①	土製品　人形の一部			
土間①	陶器　かけわけ碗	大堀相馬	18C	
土間①	陶器　土瓶の蓋	大堀相馬	18C後半	白濁釉
土間①	瓦質土器　焜炉			焚口にはり出しの部分
土間①	磁器　染付くらわんか	波佐見	18C	
土間①	磁器　染付皿	肥前	18C前半	見込：コンニャク印判 高台「大明年製」大・年のみある
土間①	磁器　染付碗	瀬戸美濃	19C後半	文様　唐草（くずれたもの）
土間①	磁器　端反碗	瀬戸美濃	19C中頃	文様　東屋　山水
土間①	土製品　土鈴	地元？	19C以降	型押し
土間①	陶器　鉄絵の皿	大堀相馬	19C前～中葉	I-3　灰釉
土間①	瓦質土器　火鉢		江戸時代	
土間①	磁器	肥前	19C	文様　唐草？変形？
土間①	磁器　染付猪口	肥前	19C前半	内側：四方襷　　外側：文様　市松
土間①	磁器　染付碗	肥前	18C	
土間①	磁器　染付碗	瀬戸美濃	19C中頃	
土間①	磁器　変形鉢	肥前	19C後半	イッチン　　文様　植物の葉
土間①	陶器	大堀相馬	19C前半	片口か？　白濁釉

出土層	種別・器種	産地	年代	備考
土間①	陶器			
土間①	陶器　起立甕	在地？	19C以降	鉄釉
土間①	陶器　起立甕	在地？	19C以降	鉄釉
土間①	陶器　起立甕	在地？	19C以降	鉄釉
土間①	陶器　小型甕	堤焼	19C	鉄釉
土間①	陶器　摺鉢	岸窯？	17C ？	鉄釉
土間①	陶器　摺鉢	堤焼？	19C	鉄釉
土間①	陶器　取手	不明	不明	
土間①	陶器　鍋	不明	幕末明治？	鉄釉　口径20㎝ぐらい
土間①	陶器　鉢	堤焼	19C中頃～	海鼠釉
土間①	陶器　碗	不明	不明	目跡がある
土間①	土師器質土器　火鉢	不明		手あぶり
土間②	瓦質土器　鉢		不明	
土間②	磁器　染付碗	瀬戸美濃	19C中頃	J-1　文様　稲束か？
土間②	陶器			
土間②	陶器	大堀相馬	19C後半	高台の部　墨文字？ 蛇の目高台　白濁釉
土間②	陶器　摺鉢	不明	18C以降	鉄釉
土間②	陶器　摺鉢	堤焼	19C	I-4　鉄釉

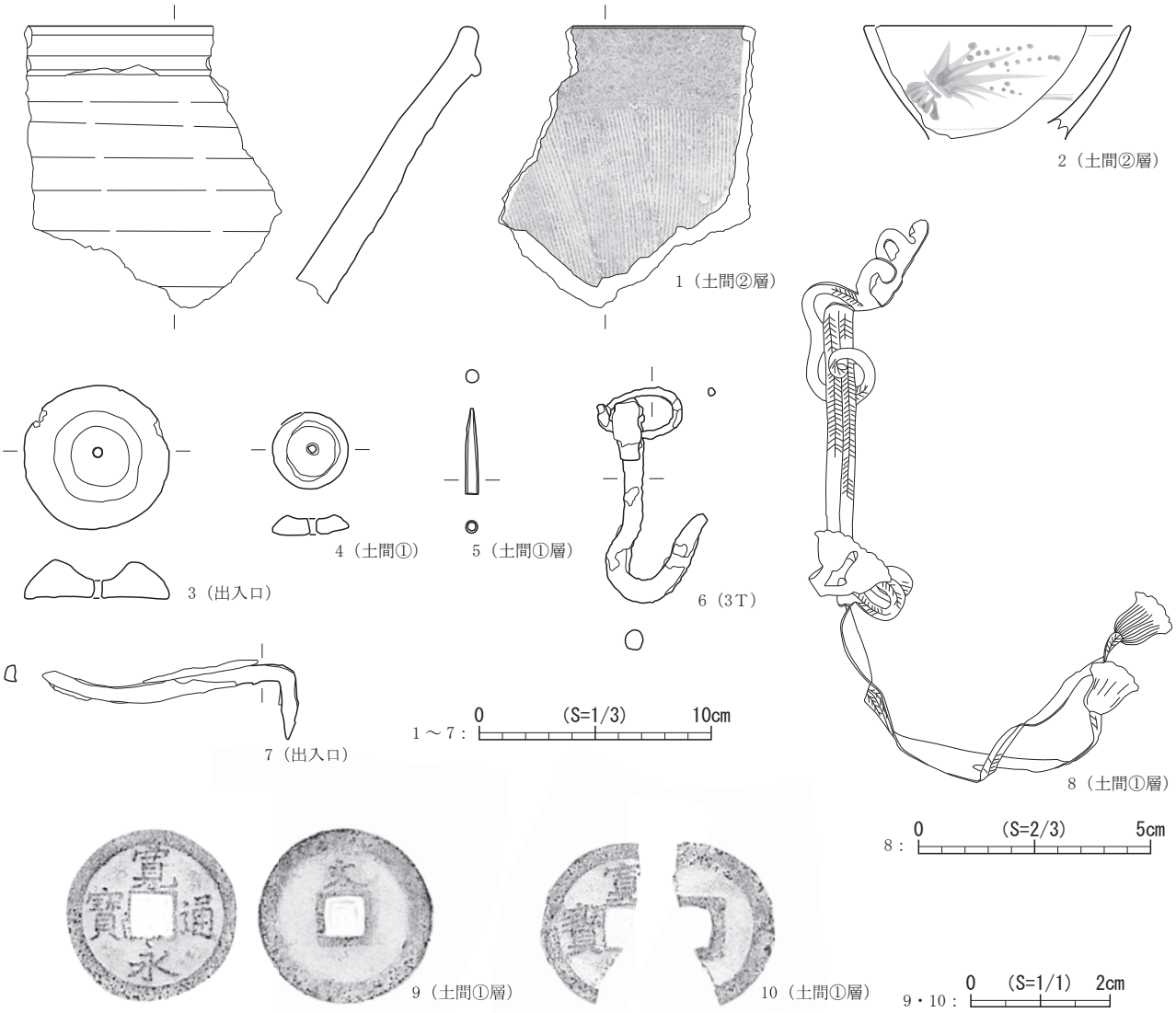
表4　出土陶磁器一覧表

	古代瓦			近世瓦							土師器	須恵器	土師質土器	磁器	陶器	中世陶器	瓦質土器	石製品	土製品	鉄製品		不明	合計
	丸瓦	平瓦	不明	丸瓦	平瓦	不明	道具瓦	桟瓦	面戸瓦	隅切瓦										釘	不明		
表土	2	4	34	6	6	36	1				1							1	1				92
1T	12	22	125	12	20	63					1						1					6	262
3T土間外		7	13	2	4	3																	29
3T土間内	15	37	116	27	68	192					1			3	2			1					462
4T1層	4	11	88	11	15	53							3	1									186
4T2層	3	3	24			2																	32
4T3層		4				1					2												7
4T土間外	2	3	116	1	6	40					2												170
N1E1掘方	1	5	11	2	2	5																	26
N1E3掘方	1	8	14		7	5									1							1	37
N1E2掘方	1	1	11	1	3	10														1			28
N1E3掘方	1																						1
出入口	5	12	33	33	39	68					1			4	2					11			208
出入口1層	1	6	17	6	3	26					3		1	2	1					4			70
出入口2層	5	10	86	3	15	85	1				2												207
出入口3層	61	130	269	31	84	144					1												720
土間・縁辺															1							1	2
土間①層	32	103	661	295	503	1239	1	1	1	1	37	13	13	98	135	1	13	3	17	85	23	11	3286
土間②層	4	12	22	19	39	73								4	6		1					1	181
合計	150	378	1640	449	814	2045	3	1	1	1	51	13	17	112	148	1	15	5	18	101	23	20	6006

表5　出土遺物集計表


1（礎石 N1E3）
2（2T）
3（2T）
4（土間①層）
5（礎石 N1E3）
7
6（1T）
8（土間①層）
9（土間①層）
10（2T）
11（土間①層）
12（土間①層）
13（土間①層）
1～13：0 (S=1/5) 10cm
14（3T）
15（土間①層）
14・15：0 (S=1/3) 10cm

第 37 図　出土遺物（1）



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量（cm）			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
37-1	F-5	N1N3	根石	瓦	軒丸瓦	—	—	—	古代　瓦当面：重弁蓮華文　裏面：ケズリ、ナデ　瓦当面長（15.6 cm）	13-1
2	F-4	2T	2	瓦	軒丸瓦	—	—	—	古代　瓦当面：宝相華文　瓦当面長（8.4 cm）	13-2
3	F-6	2T	3	瓦	丸瓦	(36.6)	19.0	1.8	古代　凸面：縄タタキ、ナデ　凹面：布目痕、すり消し、輪積み痕　側面：ヘラケズリ	13-3
4	G-1	土間	①層	瓦	軒平瓦	(5.0)	(10.0)	(5.0)	古代　瓦当面：均整唐草文（多賀城Ⅳ期）　顎面：山形文、ナデ、自然釉	13-4
5	G-2	N1E3	掘方	瓦	平瓦	(12.5	(9.5)	3.4	古代　凸面：縄目タタキ、ナデ　凹面：布目痕、ヘラ描き	13-5
6	G-4	1T	—	瓦	平瓦	(14.0)	(20.0)	2.8	古代　凸面：縄目タタキ、ナデ　凹面：布目痕、ナデ、ヘラ描き	13-6
7	F-1	土間	①層	瓦	軒丸瓦	—	—	—	近世　瓦当面：九曜文　瓦当面長（16.5 cm）	13-7
8	F-3	土間	①層	瓦	軒丸瓦	4.7	—	—	近世　瓦当面：巴文　裏面：ナデ、（指）押さえ　側面：ナデ　瓦当面長（5.3 cm）	13-8
9	F-2	土間	①層	瓦	軒丸瓦	—	—	—	近世　瓦当面：巴文　裏面：ナデ　瓦当面長（6.7 cm）	13-9
10	G-3	2T	3	瓦	軒平瓦	(12.0)	(11.5)	1.5	近世　凸面：ナデ　凹面：ナデ　桔梗文？＋唐草文	13-10
11	H-2	土間	①層	瓦	面戸瓦	(11.1)	8.7	2.5	近世　凸面：ナデ　凹面：布目痕　端部：ケズリ→ナデ	13-11
12	H-1	土間	①層	瓦	丸戸瓦	(10.5)	(9.2)	2.6	近世　隅切　凸面：ナデ　凹面：ナデ、コビキ痕	13-12
13	H-3	土間	①層	瓦	桟瓦	(8.6)	(8.7)	1.9	近世　凸面：ナデ　凹面：ナデ	13-13

図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量（cm）			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
37-14	I-5	3T		陶器	甕	—	—	(8.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	中世。在地。13 ～ 14C。	13-14
15	I-3	土間	①層	陶器	皿	13.6	5.3	3.45		鉄絵	大堀相馬。19C 前～中葉。灰釉	13-15
38-1	I-4	土間	②層	陶器	摺鉢	—	—	(12.0)		口縁：ロクロナデ　体部：櫛目	堤焼。19C。鉄釉。	14-1
2	J-1	土間	②層	磁器	碗	11.5	—	4.5	稲束文？	圏線	染付。瀬戸美濃。　19C 中頃。	14-2

図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量（cm）			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
38-3	P-1	出入口	—	土製品	不明	6.3		1.5	布目痕（目が細かい）→ナデ 。孔径 3 ㎜。	14-3
4	P-2	土間	①層	土製品	不明	3.3		8.0	布目痕（目が粗い）→ナデ 。孔径 3.5 ㎜	14-4
5	N-7	土間	①層	銅製品	不明	3.7	0.5	0.5	赤色顔料付着	14-5
6	N-4	3T	3	鉄製品	吊金具?	9.4	0.8	0.9	環の径 3.7 cm	14-6
7	N-1	出入口	—	鉄製品	鋌	(11)	3.3	0.8	屈曲　端部欠損	14-7
8	N-3	土間	①層	銅製品	仏像装身具	12.2	8.0	0.06	仏像の冠繒。上位・中位・下位それぞれ折れ曲がっている。	14-8
9	N-8-1	土間	①層	銅製品	銭貨	2.5			新寛永通寶。赤色顔料付着。	14-9
10	N-8-2	土間	①層	銅製品	銭貨	(2.5)			古寛永通寶。	14-10

第 38 図　出土遺物（2）

３．まとめ

今回の調査では陸奥国分寺鐘楼で確認した礎石と土間の構造について下記の点が判明した。

鐘楼では 12 基の礎石を確認した。礎石の石質は安山岩で、大きいもので長軸が 111 ㎝あり、建物の柱の径に対して大型といえる。また､3 石の礎石には熱を受けた痕跡が認められ､中には表面が熱で剥がれているものもあった。江戸時代に建てられた鐘楼が火災にあった記録はなく、土間内部の調査でも火事の痕跡は確認されていない。このことから礎石の被熱痕跡は礎石が鐘楼に用いられる以前に受けたもので、鐘楼の礎石はかつて別な建物で利用されたものを転用した可能性が考えられる。鐘楼の周辺では陸奥国分寺の金堂跡と廻廊跡の調査が行われているが、多くの礎石は抜き取られており、根石だけが検出されているものが多い。平成 17 年に調査が行われた仁王門の礎石も国分寺南大門の礎石を転用していた可能性が指摘されている（仙台市教育委員会　2006）。

礎石 N3E2 では風蝕が進行しているものの、礎石上面に高さ 1 ㎝程度で径 69 ～ 78 ㎝の円形の平坦な高まりを確認した。これは円形柱座とみられ、宮城県内でこのような柱座の可能性がある礎石が確認されている古代の建物跡には多賀城廃寺金堂跡と講堂跡がある※1。多賀城廃寺は多賀城と同時期の神亀元年（724）の創建とされ、陸奥国分寺の創建（天平年間・740 ～ 750 年）より先行している。多賀城廃寺跡の礎石の石材は安山岩で、今回確認した陸奥国分寺跡の礎石と同様、高さ 3 ㎝程度の一段の円形柱座とみられる造り出しを有している。これらのこともまた今回鐘楼で確認された柱座を有する礎石が古代の国分寺において別な建物に使用されていた可能性を示すものといえる※2。

鐘楼の土間内部では大量の川原石と瓦片が面的に広がっていることを確認した。川原石の面の上には土を入れて土間として使用している。瓦片は古代のみならず近世瓦も多く含まれている。また、一部の礎石の掘方内にも近世瓦が混入しており、このことから近世以降に鐘楼が建て直された可能性もある。

下層調査では 1T と 3T で土間の基礎構築土を確認したが、しまりが弱い粘土質土で構築されており、版築の痕跡は確認されないことから、川原石や瓦は土間の基礎を強固にするために入れられた可能性も考えられる。建物下で掘込地業は確認されていない。このような状況は江戸時代初めに建てられたとされる仁王門の基礎構造とは川原石や瓦が広がっている点などで異なっている。

今回の鐘楼の調査では基礎構造に加え、礎石の状況から鐘楼の礎石は古代の国分寺の建物の礎石が転用された可能性があることが考えられた。また円形柱座を伴った礎石の存在から、国分寺の造営には当時の高度な技術が用いられたことがうかがえる。

※1：調査報告書には多賀城廃寺跡の金堂や講堂の礎石に「円形柱座のようなもの」が残っていると記載しており、これは火災にあった際、柱以外の部分が変質し、結果的に柱部分が円形の高まりとして残ったものとして、柱座とはしていない（宮城県教育委員会　1970）。しかし報告書掲載写真や現地で礎石を実見したところ、礎石は熱を受け、また風蝕はしているものの、礎石上面の高まりは人工的に造り出された柱座である可能性が高い。

※2：礎石の柱座については奈良文化財研究所の箱崎和久氏より多くの御教示を頂いた。

1. 調査区土間②層検出状況 (上が北)

2. 調査区遠景 (南から)

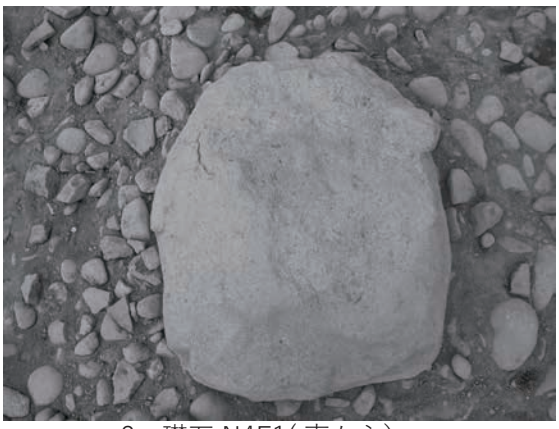
3. 調査区土間①層検出状況 (南から)

4. 礎石 N1E1 （南から）

5. 礎石 N2E1(南から)

写真図版 10　陸奥国分寺跡第 30 次調査

1. 礎石 N3E1(南から)

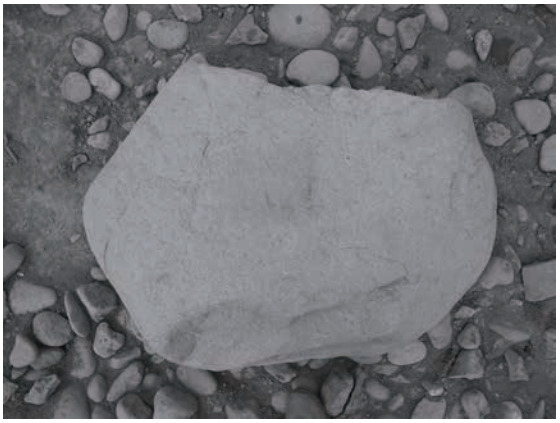

2. 礎石 N4E1(南から)

3. 礎石 N1E2(南から)

4. 礎石 N2E2(南から)

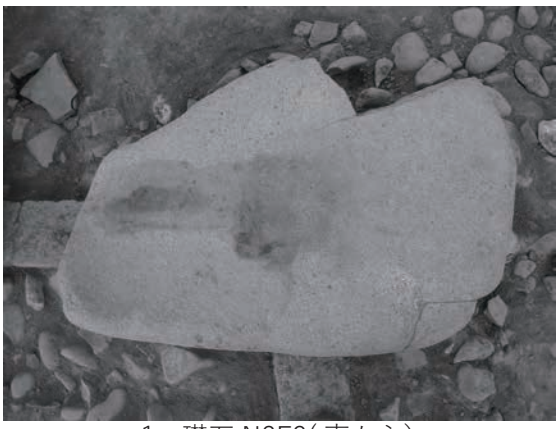
5. 礎石 N3E2(南から) ※円形柱座あり

6. 礎石 N3E2(西から)


7. 礎石 N4E2(南から)

8. 礎石 N1E3(南から)

写真図版 11　陸奥国分寺跡第 30 次調査



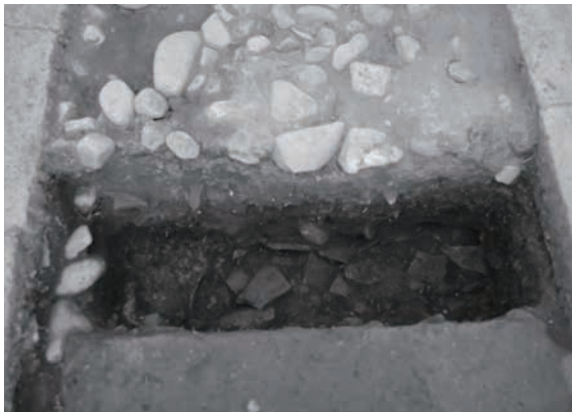
1. 礎石 N2E3(南から)

2. 礎石 N3E3(南から)

3. 礎石 N4E3(南から)

4. 旧出入口検出状況 (東から)

5. 1T 検出状況全景 (北から)

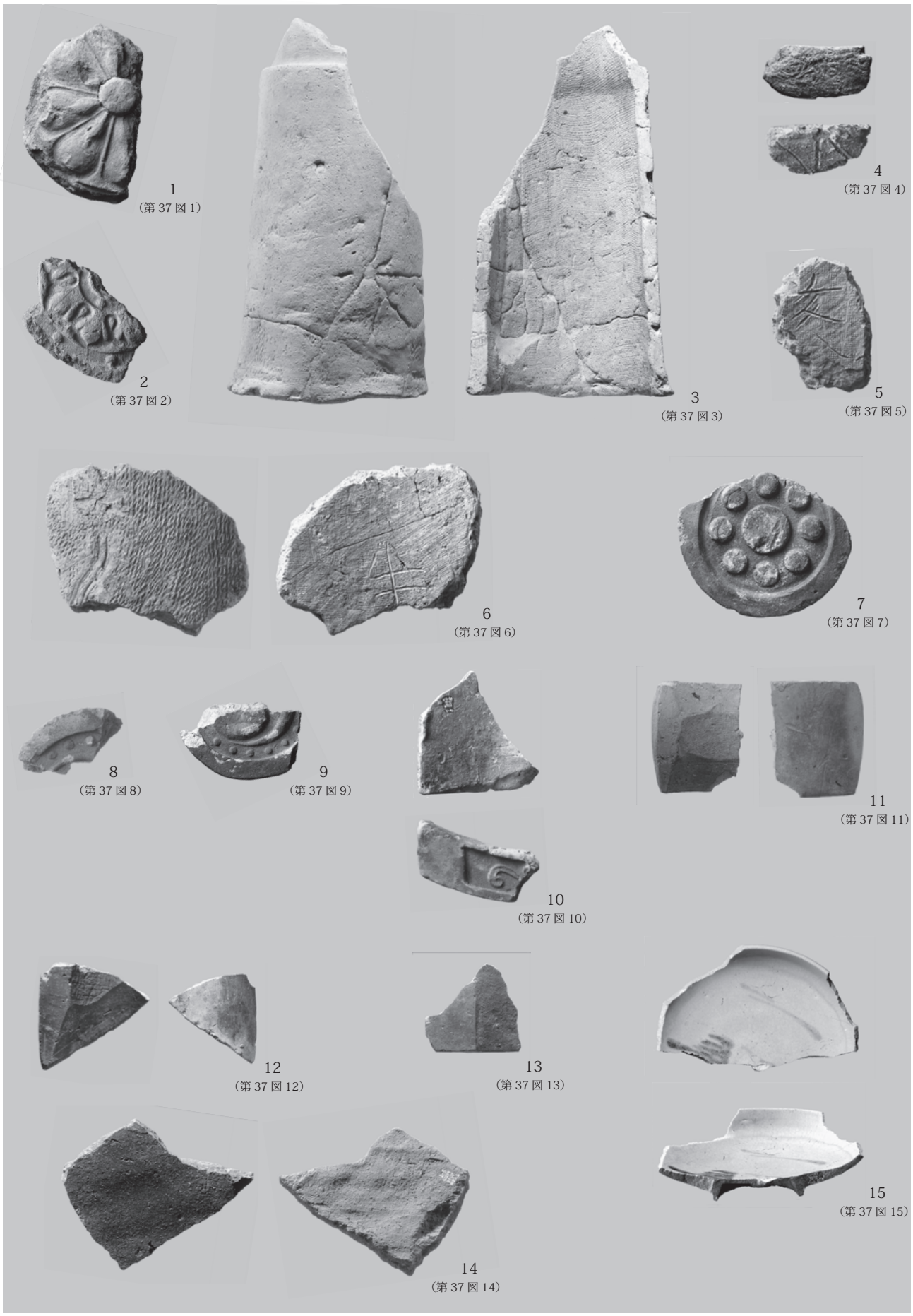


6. 2T 検出状況全景 (南から)

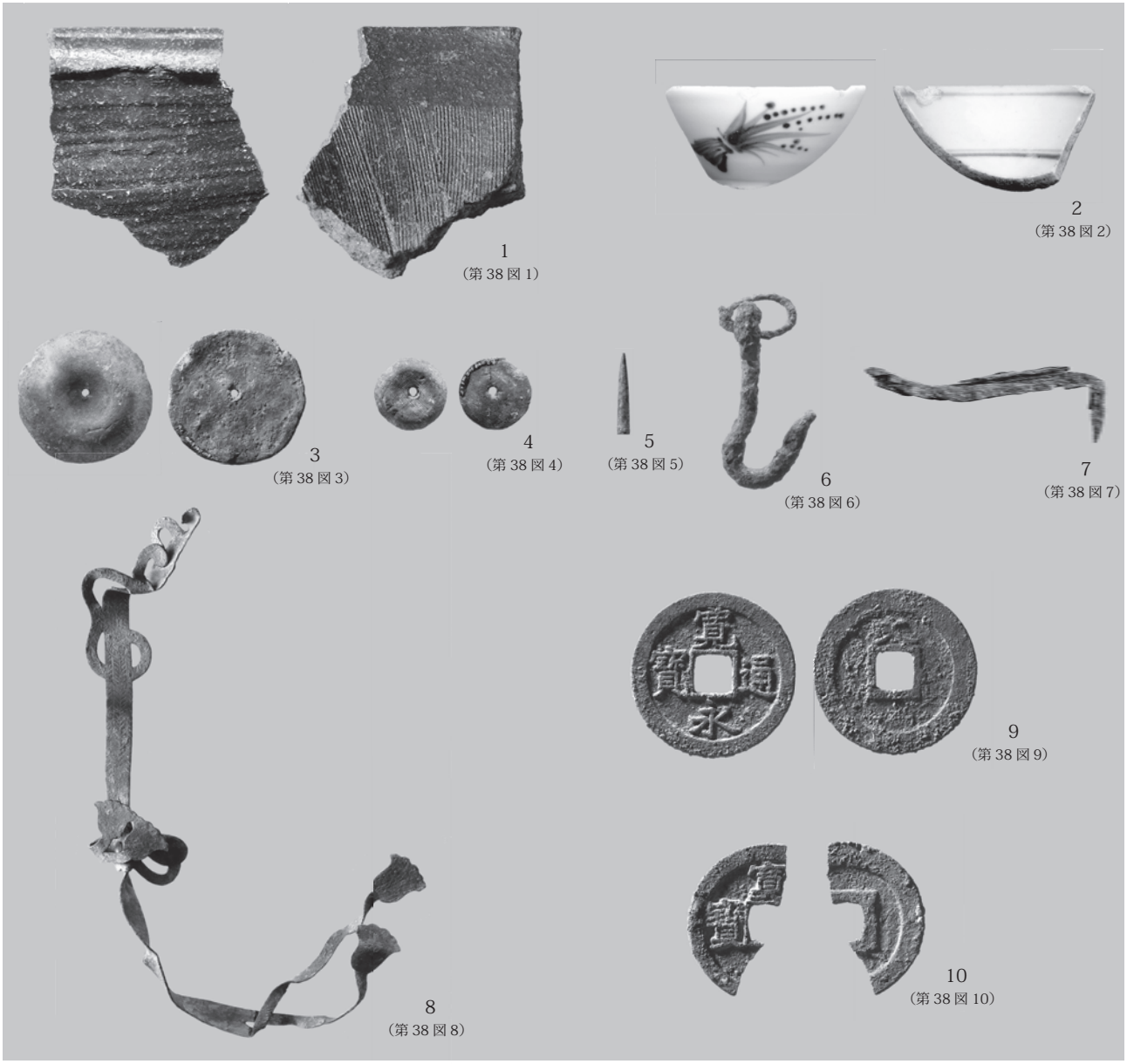
7. 3T 検出状況全景 (東から)

8. 4T 検出状況全景 (南から)

写真図版 12　陸奥国分寺跡第 30 次調査



写真図版 13　陸奥国分寺跡第 30 次調査　出土遺物（1）



写真図版 14　陸奥国分寺跡第 30 次調査出土遺物（2）

引用・参考文献

陸奥国分寺跡発掘調査委員会　1961 『陸奥国分寺跡』

宮城県教育委員会　1970 『多賀城跡調査報告Ⅰ　―多賀城廃寺跡―』

仙台市教育委員会　1980 『年報 1』 仙台市文化財調査報告書第 23 集

仙台市教育委員会　1981 『郡山遺跡Ⅰ』 仙台市文化財調査報告書第 29 集

仙台市教育委員会　1982 『郡山遺跡Ⅱ』 仙台市文化財調査報告書第 38 集

仙台市教育委員会　1984 『郡山遺跡Ⅳ』 仙台市文化財調査報告書第 64 集

仙台市教育委員会　1985 『郡山遺跡Ⅴ』 仙台市文化財調査報告書第 74 集

仙台市教育委員会　1992 『郡山遺跡Ⅻ』 仙台市文化財調査報告書第 161 集

仙台市教育委員会　1993 『大蓮寺窯跡』 仙台市文化財調査報告書第 168 集

東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1997 『東北大学埋蔵文化財調査年報 8』

仙台市教育委員会　1999 『郡山遺跡ⅩⅨ』 仙台市文化財調査報告書第 234 集

仙台市教育委員会　2000 『郡山遺跡ⅩⅩ』 仙台市文化財調査報告書第 244 集

奈良文化財研究所　2003 『古代の官衙遺跡　Ⅰ 遺構編』

奈良文化財研究所　2003 『古代の官衙遺跡　Ⅱ 遺物・遺跡編』

仙台市教育委員会　2005 『郡山遺跡発掘調査報告書　総括編（1)』 仙台市文化財調査報告書第 283 集

仙台市教育委員会　2006 『郡山遺跡 26』 仙台市文化財調査報告書第 296 集

奈良文化財研究所　2006 「川原寺の調査―第 133-12 次」『奈良文化財研究所紀要 2006』

宗教法人　陸奥国分寺　2007 『陸奥国分寺薬師堂仁王門修復工事報告書』

奈良文化財研究所　2007 「飛鳥寺の調査―第 143-6 次」『奈良文化財研究所紀要 2007』

仙台市教育委員会　2009 『郡山遺跡 29』 仙台市文化財調査報告書第 347 集

仙台市教育委員会　2013 『郡山遺跡第 167・180・196 次調査』 仙台市文化財調査報告書第 412 集

仙台市教育委員会　2014 『国史跡　陸奥国分寺跡』 仙台市文化財調査報告書第 430 集

奈良文化財研究所　2015 『東アジア古代寺址比較研究（Ⅱ）　―金堂編―』

仙台市教育委員会　2016 『荒井南遺跡他』 仙台市文化財調査報告書第 446 集

仙台市教育委員会　2017 『郡山遺跡 37』 仙台市文化財調査報告書第 460 集

仙台市教育委員会　2017 『史跡陸奥国分寺跡　―整備事業報告書―』

仙台市教育委員会　2019 『郡山遺跡 39』 仙台市文化財調査報告書第 478 集

第４章　調査成果の普及と関連活動

１．主な広報・普及・協力活動

年月日	行事名称	担　当	対　象
4.27	郡山中学校ピロティ見学	庄子	クラブツーリズム（株）　歴史への旅 16 名
5.21 ～ 23	職場体験	三浦	仙台市立長町中学校 2 年生 5 名
5.31	出前授業「郡山遺跡」	三浦	仙台市立八本松小学校 6 年生 53 名
6.13	遺跡・ピロティ見学	三浦	（株）トーキン OB15 名
6.24	資料調査	庄子	新潟県埋蔵文化調査事業団
6.26	遺跡・ピロティ見学	庄子	地底の森ミュージアム 8 名
7.5	出前授業「郡山遺跡」	三浦	仙台市立東長町小学校 6 年生 98 名
7.9	美化活動・ピロティ見学	佐藤・齋藤・庄子・三浦	仙台市立東長町小学校 6 年生
7.10	美化活動・ピロティ見学	佐藤・齋藤・庄子・三浦	仙台市立八本松小学校 6 年生
7.10	郡山中学校ピロティ見学	庄子	NTT 退職者の会 13 名
8.2	資料調査	庄子	東北歴史博物館
8.21 ～ 23	職場体験	三浦	仙台市立八木山中学校 2 年生 5 名
8.27 ～ 29	職場体験	三浦	仙台市立郡山中学校 2 年生 3 名
9.27	郡山中学校ピロティ見学	齋藤・三浦	仙台・文化財サポーター会 25 名
10.30	出前授業「地域の歴史」	大友	仙台市立東長町小学校 4 年生 117 名
11.12 ～ 14	職場体験	三浦	仙台市立柳生中学校 2 年生 4 名
11.19 ～ 21	職場体験	三浦	仙台市立山田中学校 2 年生 4 名
11.19	郡山中学校ピロティ見学	三浦	成蹊大学 1 名
11.21	資料調査	三浦	東北学院大学
2019.4.8 ～ （毎月 8 日）	お薬師さんの手づくり市	整備活用係	一般市民（主催：薬師堂手づくり市実行委員会） ※陸奥国分寺薬師堂ガイドボランティア会の解説活動の協力

中学生の職場体験（郡山遺跡発掘調査事務所）

小学生の美化活動（郡山遺跡）

報　告　書　抄　録

ふりがな	こおりやまいせき
書名	郡山遺跡40
副書名	令和元年度発掘調査概報
巻次	40
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第484集
編著者名	庄子裕美　五十嵐愛　三浦昂也
編集機関	仙台市教育委員会（文化財課）
所在地	〒980-0011　宮城県仙台市青葉区上杉１丁目５－12　上杉分庁舎10階　TEL 022（214）8893
発行年月日	2020年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間		調査面積（㎡）	調査原因
郡山遺跡（こおりやまいせき）	宮城県（みやぎけん） 仙台市（せんだいし） 太白区郡山（たいはくくこおりやま）	04104	01003	38° 12′ 58″	140° 53′ 41″	292次	20190219～ 20190308	22㎡	個人住宅建築
						294次	20190312～ 20190327	22㎡	個人住宅建築
						295次	20190604～ 20190605	17.5㎡	個人住宅建築
						296次	20190520	15㎡	個人住宅建築
						297次	20190625	12.5㎡	個人住宅建築
						299次	20190902～ 20190917	57.5㎡	範囲確認
陸奥国分寺跡（むつこくぶんじあと）	宮城県（みやぎけん） 仙台市（せんだいし） 若林区木ノ下（わかばやしくきのした）	04103	01019	38° 25′ 08″	140° 90′ 31″	30次	20191111 ～ 20191206	82.7㎡	範囲確認

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
郡山遺跡	官衙跡 寺院跡 集落跡	飛鳥～平安	・材木列跡 ・竪穴住居跡 ・掘立柱建物跡 ・溝跡	土師器、須恵器、瓦	
陸奥国分寺跡	寺院跡	奈良～平安	・鐘楼土間	瓦、金属製品、陶器、磁器	・鐘楼の礎石に円形柱座を確認

要約

・郡山遺跡第292次調査では郡山遺跡Ⅰ期官衙の内部区画施設と考えられる材木列跡を検出した。
・郡山遺跡第299次調査では郡山遺跡Ⅱ期官衙の中枢部の東列建物跡の検出が想定される箇所の調査を行い、第20次調査で検出されたSB208掘立柱建物跡の延長部分を確認した。
・陸奥国分寺跡第30次調査では江戸時代に建立されたと考えられる鐘楼の建物土間内部で川原石や瓦片が広がっていることを確認した。また建物の礎石は、建物に対して大きく、古代の建物の礎石を転用した可能性がある。

仙台市文化財調査報告書第484集

郡　山　遺　跡　40

―令和元年度発掘調査概報―

2020年３月

発行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区上杉一丁目５－12
上杉分庁舎10F
文化財課 TEL 022（214）8893

印刷　モリタ印刷株式会社
仙台市太白区郡山八丁目20－30
TEL 022（246）0105